教育関係共同利用拠点
「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」
Joint Educational Development Center
"Educational Development Core in International Cooperation"

2011 年度
教育関係共同利用拠点事業報告書

Joint Educational Development Center Project Report 2011

東北大学高等教育開発推進センター
大学教育支援センター
Center for Professional Development (CPD)
in Center for the Advancement of Higher Education (CAHE)
Tohoku University

目　　次

用語リスト..... 3

1.　拠点事業について

1.　教育関係共同利用拠点「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」について..... 7

2.　2011 年度活動報告

2-1.　計画の目標及び運営の基本方針..... 11

2-2.　組織運営に関する目標と実施状況及び課題..... 11

2-3.　学内外への宣伝・広報..... 12

2-4.　調査研究活動..... 13

2-5.　プログラム開発..... 15

2-6.　プログラム実施..... 17

2-6-1.　東北大学 大学教員準備プログラム（Tohoku U. PFFP）..... 17

2-6-2.　新任教員研修プログラム（NFP）..... 19

2-6-3.　大学教育マネジメント人材育成プログラム（EMLP）..... 19

2-7.　研究成果の発表・出版..... 21

2-8.　他機関との連携..... 22

2-9.　2012 年度以降の課題..... 22

3.　参考資料

3-1.　大学教育力開発事業（特色ある教養教育内容開発）..... 27

3-2.　大学教育力開発事業（部局プロフェッショナル・ディベロップメント）..... 29

3-3.　新任教員研修アンケート結果..... 30

3-4.　PD プログラム

3-4-1.　PD プログラム分野一覧..... 31

3-4-2.　PD プログラム実施一覧..... 32

3-4-3.　PD プログラム参加者アンケート..... 47

3-5.　CPD 教員組織..... 72

3-6.　CPD 教員の活動..... 74

用語リスト

組織名

・CAHE (Center for the Advancement of Higher Education): 東北大学高等教育開発推進センター

・CPD (Center for Professional Development): 東北大学高等教育開発推進センター大学教育支援センター

プログラム名

・PDP (Professional Development Program): 専門性開発プログラム

・PFFP (Preparing Future Faculty Program): 大学教員準備プログラム

・Tohoku U. PFFP (Tohoku University Preparing Future Faculty Program): 東北大学 大学教員準備プログラム

・NFP (New Faculty Program): 新任教員プログラム

・EMLP (Educational Management and Leadership Program): 大学教育マネジメント人材育成プログラム

・SDP (Staff Development Program): 大学職員能力開発プログラム

1.　拠点事業について

1．教育関係共同利用拠点「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」について

東北大学高等教育開発推進センターは，平成 22 年 3 月，教育関係共同利用拠点の認定を受けた。

本拠点は，大学教員に対してライフステージの必要性に対応し，教育活動に必要な専門性を形成する職能開発プログラムを開発・提供するとともに，組織的な教育改善・向上のために，教職員を対象に，カリキュラム・マネジメントや学生支援・相談など教育・学生支援の専門性を開発するプログラムを開発・提供することを目標にしている。

平成 22 年度の日本の大学教員は 171,236 人（学長，副学長を含む）が在職し，11,066 人が新規採用で入職した。このうち，いわゆる新規学卒者は，10.7%，企業・官庁・研究所・自営業・高校教員から転職した教員は 38.6%である。新規採用の 20.4%は教授・准教授であり，教育活動の経験なしに入職し，自立した専門職として活動することが求められている。こうしたキャリアの多様性に対応した組織的な専門性開発プログラムの開発・提供を事業の目的としている。

また，大学教育には，アドミッション・ポリシー，ディプロマ・ポリシーの策定，学位にふさわしい能力を身につける教育課程編成，教育成果の測定などに基づくカリキュラム・マネジメントや大学教員の教育能力開発を行い，学生支援を行うトータルな教育力が求められている。そのためには，教員だけでなく教育を運営する職員の能力開発が重要である。

すなわち，大学教育力は，カリキュラム開発や内部質保証などの組織開発と，それを担う教職員，教育・学習マネジメントリーダーなどの人材育成の双方が支え合うものであり，高等教育開発推進センターは，調査研究・開発研究・実践の 3 つの領域において全国の国公私立大学の組織的な教育改善・向上に貢献するために，各種の国際連携を進めてきた実績をいかし，カリフォルニア大学バークレー校（アメリカ），メルボルン大学（オーストラリア），クィーンズ大学（カナダ）など海外の大学と連携し，調査研究，プログラム開発，プログラム実施を一体的に進めている。

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災によって，22 年度に予定していた 3 月下旬の事業はすべて中止になり，東北大学高等教育開発推進センター及び大学教育支援センターが置かれていた合同研究棟は，屋上ペントハウスが崩壊して危険建物となり，現在はマルチメディア教育研究棟の一部を借用する状態となった。しかし，平成 23 年 3 月 22 日のセンター教員会議以後，23 年度の活動準備をはじめ，4 月 19 日の第 15 回東北大学高等教育セミナー「震災後の学生支援と教職員支援のあり方 - 阪神・淡路大震災の教訓に学ぶ - 」を皮切りに，各種の活動を展開することができた。

拠点活動も 3 年目に入り，2011 年度の活動の評価をふまえた新しい活動を開始している。2012 年度には，履修証明プログラムの試行などをより制度化し，組織された大学教育力開発の活動を提供する計画を策定している。ここに，2011 年度の活動を評価・点検し，2012 年度の活動方針を策定した。

2.　2011 年度活動報告書

2-1．計画の目標及び運営の基本方針

(1) 10 月以降，各種事業が円滑に実施できるよう，4～7 月に各種の準備を進める

(2) 事業の実施を通じて，各部・各室の活性化とセンターの組織的強化を図る

(3) 東北大学高等教育開発推進センター（Center for the Advancement of Higher Education; CAHE）教員の職能開発としても位置付け，CAHE 教員の教育研究を支援・推進する

(4) 特に，取り組むべき重要課題は次の通り

① 理学・工学・文学など伝統的研究科の参加を促し，東北大学院生の最良部分をプログラムに参加させること

② 専門性開発プログラム（Professional Development Program; PDP）の枠組みの改善及び各分野での教育論（例：理学教育論，語学教育論）など，教育内容・教材開発の推進

③ 大学教員準備プログラム（Preparing Future Faculty Program; PFFP）について，2010 年度の経験に基づいて，メルボルン大学・UC バークレー校派遣プログラムの改善を含めたプログラム全体の改善・充実

④ 大学教育マネジメント人材育成プログラム（Educational Management and Leadership Program; EMLP）の開発と試行的実施。特に派遣すべき人材の性格，選抜方法の確定

⑤ 他の教育関係共同利用拠点及び放送大学 ICT 活用・遠隔教育センターとの連携を強め，調査研究・研究開発・プログラム提供の能力を高めること

⑥ 調査研究部門を強化し，個人・組織の双方で高等教育研究を推進すること

⑦ 履修証明プログラムに関する制度面の整備と調査研究を進めること

2-2．組織運営に関する目標と実施状況及び課題

（1）目標

① 業務量に対応するために，分担を明確にすると共に，教員 1 名，事務補佐員 1 名を採用する

② 研究開発員・共同研究員の増員を図る

③ 大学教員支援センター（Center for Professional Development; CPD）の教員研究室及び事務室，セミナー等の双方向発信が可能な施設・設備を整備する

④ CPD 定例打合せ，コア会議，部門長会議などの効率的運営を図る

⑤ 東北大学内部局，グローバル 30 事業，他教育関係共同利用拠点との連携を図る

（2）実施状況

・**教員組織の整備**　調査研究部門長担当准教授転出後（2010 年 10 月），大学教育支援センター長が兼任していた部門長を，後任准教授（高等教育開発室）が担当した。遠隔教育関係教員人事を進め，7 月から助教 1 名を採用（2014 年 3 月までの任期雇用・年俸制）した。新たな研究開発員，コア会議メンバー，共同研究員の委嘱を行い，研究開発員 20 名（内，CAHE 教員 15 名），共同研究員 5 名の体制となった（参考資料 3-5）。

・**事務体制の整備**　10 月から事務補佐員 1 名を雇用し，准職員 2 名，事務補佐員 2 名の体制とした。

・**設備の整備**　マルチメディア教育研究棟に 3 部屋を借用し（計 303 ㎡），事務室・教員室・セミナー室・作業室を確保した。テレビ会議システム（ポリコム）を購入し，計 4 か所までの同時配信が可能となった。また，簡易テレビ会議ツール（Skype）の活用により，複数相手の遠隔会

議を可能とした。

・**組織運営の改善**　CPD 部門長会議（13 回），コア会議（9 回），定例打ち合わせ（30 回）を開催した。7 月 29 日に共同利用運営委員会を開催した。

・**他組織との連携強化**　学内ではグローバル 30 事業と連携して外国人教員対象の合同 FD を開催したほか，部局 PD プログラム開発の募集を行う等，部局との連携強化に努めた。国内では，他の拠点及び広島大学高等教育研究開発センターと共同で,「大学の組織運営とマネジメント人材育成」調査を実施した。また，メルボルン大学との共同で採択された豪州首相日本対象教育支援プログラムの実施に際しては，東北大学国際教育院との共同セミナー，山形大学，福島大学でのセミナー開催を企画し，2012 年度に実施予定である。

（3）**評価及び課題**

・**事務体制の強化**　依然として業務量が多いので, 准職員 3 名, 事務補佐員 1 名を合わせて 4 人態勢とする。

・**教員組織の整備**　調査研究活動に対応し，機関調査（Institutional Research; IR）に重点を置いた共同研究員の補強，海外連携大学との関係強化のために共同研究員の委嘱とメンター活動のために研究開発員を補強する（参考資料 3-8）。

・**組織運営の改善**　CPD 副センター長・実施部門長を変更し，組織運営の強化を図ると共に，部門長会議による運営とし, コア会議は 4 半期ごとに全体的な意見集約と基本方針決定に重点を置く。

また，異動などに伴う運営委員の変更を行い， 6 月に共同利用運営委員会を開催する。

・**中間評価の実施**　3 年目に入るので中間評価を行う。共同利用運営委員会（6 月，2 月）及び外国人専門家の来日の機会など年間を通して実施する。

2-3．学内外への宣伝･広報

（1）**目標**

① パンフレットを作成し，学内および国内外へ教育関係共同利用拠点の広報活動を推進する

② ホームページを改善し，英語化の推進をする

③ ICT を活用し，迅速な情報提供が行えるよう，ブログを開設する

（2）**実施状況**

・**広報物の作成**　パンフレット「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」（日 10,000 部・英 500 部），2011 年度 PD プログラム開講科目一覧（日 10,000 部）を作成し，国内外における各種集会，セミナー，訪問調査等で活用した。

・**HP の更新**　東北大学高等教育開発推進センターHP を改修し，PDP 広報，ウェブによる行事申込みが安易に行えるようにした。また，大学教育支援センターHP を開設し，PDP のキャリア別プログラムなどの説明や実施報告など, 高等教育開発推進センターHP と差異化して活用している。

・**シンポジウムの開催**　国際シンポジウム「グローバル時代の大学マネジメントと質保証」（2012 年 1 月 24・25 日，134 名参加，参考資料 3-4-2，No.22-23），国際シンポジウム「次世代の大学院教育―日米両国における大学院教育改革」（2012 年 3 月 19 日，58 名参加，参考資料 3-4-2，No.47）を開催し，国内外に情報発信をした。

・**ポスター等による情報発信**　個々のセミナー案内をポスターやホームページにより情報発信した（参考資料 3-4-2）。

・**メーリングリストの配信**　セミナーや各種プログラムの開催案内や募集案内を拠点メーリングリストに登録している約 800 名のメンバーへ配信した。

（3）**評価および課題**

・**広報活動の改善と推進**　パンフレット等の活用，個々のセミナーポスターにより拠点活動の発信は昨年度以上に行っているが，拠点事業，組織について，特に学内者の理解と認知度を高めるため，より効果的に行う必要がある。

・**メーリングリストの自動更新**　これまでセミナー申込情報を基にメーリングリストを手動で登録，更新していたが，システムを独立させ，新たに自動登録システムを開設することにより，希望者が情報入手できるよう改善する。

2-4．調査研究活動

（1）　**目標**

① 教員のキャリア・ステージと専門性開発の課題に関する共同調査の分析とフィードバックを行う

② 大学教育マネジメント人材育成のために，大学管理職の能力開発に関する調査研究を進める

③ 履修証明に関する調査研究を進める

④ PFFP に関する調査研究，教育活動のロジックモデルの構築のための調査研究，能力開発プログラムの効果測定のための調査研究を進める

（2）**実施状況**

① **各国の大学教授資格調査**（2011.3～6）

文部科学省委託調査であり，アジア・北米・カナダの大学教授資格を調査し，その結果は報告書に取りまとめた（http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1308331.htm）。その成果を発展させた商業出版の準備を進めている（報告書『諸外国の大学教授職の資格制度に関する実態調査』参照）。

② **大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査**（2010.12～）

2010 年度の実査に続いて，2011 年度に行ったのは次の 3 点である。(1) 追加調査を実施した（北里大学獣医学部 : 91 名中 46 名の協力を得た。回収率 50.5%）。(2) 日本教育社会学会（第 63 回大会，お茶の水女子大学）にて調査結果の報告を行った。(3) 報告書（電子版）の作成を行った。2012 年度は，報告書の出版・配布（東北大学高等教育開発推進センター・高等教育ライブラリ），ならびに，学会誌への投稿等による研究成果の周知の推進，の 2 点に取り組む予定である。

③ **東北大学の初修外国語学習に関する基礎調査**（2010.12～2012.4）

2010 年度の実査に続いて，2011 年度には，　報告書の作成，セミナー・シンポジウム，論文等による成果還元を行った（東北大学高等教育開発推進センター・第 10 回ランチタイム FD ; 参加者 18 名，参考資料 3-4-2，No.3，シンポジウム『東北大学における初修外国語』: 参加者計 34 名，参考資料 3-4-2，No.11）。調査事業としては 2011 年度で終了し，2012 年度からは以上を踏まえて，初修語教育に関する大学教育開発のシンポジウム，ワークショップを開

催する予定である。

④ **諸外国の PFFP（Preparing Future Faculty Program）調査**（2010.7～）
イギリスの PFFP および新任教員研修に関する調査を行った（表 1）。

表 1　イギリス調査概要

日程	訪問先	訪問目的
2012 年 2 月 5 日～12 日	オックスフォード大学 Oxford Learning Institute	オックスフォード大学における教員能力開発プログラムの形態と内容について，担当理事（人事）の Stephen Goss と教育開発担当 Kathleen Quinlan に聞き取り
	Staff and Educational Development Association	SEDA の開発した専門性能力フレームワークと各大学の教職員の専門性開発担当者に対する支援内容について，James Wisdom と Julie Hall に聞き取り また，Julie Hall が勤務をしている Roehampton University における取り組みについても聞き取りを実施
	Higher Education Academy	HEA の開発した UK Professional Standards Framework や学問分野別の教育改善に関する取り組みなどについて Stephanie Marshall，Grahame Bilbow, John Craig, Geoff Glover，Janet de Wilde に聞き取り
	Mick Healey 教授	教育と研究のリンクに関する聞き取り

⑤ **国内の PFFP 研究会**（2011.7.2）　「大学院における大学教員養成プログラム（PFFP）のあり方に関する研究会」（2011 年 7 月 2 日，15 名参加）を開催した。国内で大学教員準備講座などの PFFP 実施校が参加し（北海道大学，東北大学，筑波大学，一橋大学，名古屋大学，京都大学，広島大学），コメンテーターの意見も踏まえ，今後の大学院における大学教員養成プログラムの在り方について取りまとめた。

⑥ **大学管理職の能力形成に関する調査**（2011.6～）京都大学，名古屋大学，愛媛大学の 3 拠点と広島大学高等教育研究開発センターと共同で，国公私立大学学長，私立大学理事長，国立大学理事・副学長，国公私立大学部局長・学科長・専攻長を対象とした調査を年度末から実施した。2012 年度内に研究会を開催して分析を進め，学会発表・報告書作成を行うと共に，その成果に基づく管理職向けプログラム開発を進める。

⑦ **履修証明に関する調査研究**　HP による資料の収集を行った。

⑧ **その他の研究活動**　拠点の研究活動として，Kay J. Gillespie et. al.，2010，*A Guide to Faculty Development*, 2nd, Jossey-Bass の翻訳を進めている（2012 年中に出版予定）。
拠点の研究活動として，CPD メンバーによる次の個人研究を実施した。

・**大学教育における震災ボランティア支援のあり方およびその教育効果に関する調査研究**
2011 年度には, 震災ボランティア経験がある 123 名の学生から協力を得て電子アンケートによる実査を行い，中間報告書（速報版，電子出版）を刊行した。2012 年度は，以上の活動を踏まえ，インタビュー調査，ならびに成果還元の推進（中間報告書の改訂版およびインタビュー調査結果を収録した最終報告書の刊行）を行う予定である。

・**大学教員の授業準備に関する調査研究**　2011 年度には，東北大学の教員（助教以上）を対象に質問紙調査を行い，1,289 名（回収率約 47%）の回答を得た。2012 年度は，質問紙調査の回答データの分析，インタビュー調査，およびこれらの結果についての発表，ならびに報告書の刊行を予定している。

・**学生の学習成果の測定に関する研究**　2011 年度は 3 回の研究打ち合わせを行い，研究枠組みの検討，学生と教員を対象とした調査項目の精査，学生を対象とした試行的 Web 調査の結果を受け，インタビュー調査の内容を議論した。2012 年度は，引き続き質的調査による教育・学習過程の解明の可能性を探る。

（3）評価及び課題

・**成果還元・フィードバックの推進**　2010 年度ならびに 2011 年度に企画・実施した調査の成果が出始めている。2010 年度拠点事業報告書でも指摘された点であるが，各調査研究の成果を他事業にフィードバックすることが求められる。特に 2011 年度で終了した調査事業については，速やかに PD プログラムや他の事業へのフィードバックを進めるべきである。一方で，2010 年度報告書で課題として指摘された，大学教員の能力構造（研究と教育の関連）の解明については，報告書の作成と学会発表（1 件）に留まっている。大学教員調査の分析を更に推し進め，査読付き論文等により質が担保される媒体を用いて，内容の公開・周知を図る必要がある。

・**拠点の主要調査事業の展開**　2010 年度ならびに 2011 年度は，数ある拠点調査研究事業の中でも主なものとして，大学教員調査にリソースを投入してきた。これにより，個人の専門性・能力開発に関して，フィードバックを行う素地が整ってきている。他方で，大学教育力の開発を考える上で重要なもう一方の側面である，組織についての調査研究としては，大学管理職を対象とした調査研究や教育・学習マネジメント研究は端緒についたばかりである。拠点事業後半の主軸調査として，これら組織開発に関わる調査研究にリソースを注ぎ，研究知見の蓄積を図る必要がある。

・**研究成果の公表**　教員個人に焦点を当てた研究，組織に焦点を当てた研究とはまた別に，大学教育に広く関わる研究プロジェクトも並行して進めてきている。これらの調査研究の成果を広く周知するため，報告書の作成，学会発表，論文執筆などを行い，公表を推進する必要がある。

2-5. プログラム開発

（1）目標

① 2010 年度の活動及び大学教員養成プログラムのあり方に関する会議などの結果に基づいて PFFP の枠組みを修正する

② 国内外の大学教員養成プログラム（PFFP など）の状況を把握し，日本型大学教員準備プログラムの基礎となる枠組みを明らかにする

③　PFFP においてマイクロティーチングなど模擬授業による授業技術開発の方法について検討する

④　EMLP の開発・試行的実施を行う

⑤　PDP における実験指導[S-02]，研究指導[S-03]など開催未定カテゴリーの開発・実施を行う

⑥　教育内容開発を進め，先進的な教養教育科目や PDP の開発を進める

⑦　PFFP 派遣，新任教員プログラム，EMLP を一体として進めるために，研究科との共同事業に取り組む

⑧　PFFP および新任教員プログラムの他大学の院生を含めた選抜と派遣を今後検討する

⑨　動画化を進め，オンデマンドでの PDP 配信・提供を行う

（2）実施状況

・**PDP の構造の改訂**　高等教育のリテラシー形成，専門教育での指導力形成，学生支援力形成に加え，マネジメント力を設け，4 分野に 14 のカテゴリーとした。（参考資料 3-4-1）

・**プログラム開発の推進**　2010 年度に引き続き，学内にて大学教育力開発（特色ある教養教育内容開発）を公募し，申請された 5 研究科・部局へ計 9 科目の開発を採択した（参考資料 3-1，総計 638 万円。内 2 科目 150 万円は 2012・2013 年度開発・実施予定）。これらの開発科目は，外国語教育，倫理教育，医学教育における英語プレゼンテーション力強化，天文学者育成コース開発など多岐にわたっており，東北大学の教育全体のアップ・グレードに寄与することを期待している。

・**部局プロフェッショナル・ディベロップメント（部局 PD）開発**　新たに学内にて部局単位の専門性開発プログラムの公募を行い，申請に基づき 4 部局の PD プログラム開発を採択した（参考資料 3-2，総計 184 万円）。

・**動画化の推進**　2011 年度実施したセミナー類はすべて動画撮影した。このうち PFFP 関係のものは，ISTU（東北大学インターネットスクール）で配信したが，フリー・アクセスにはしてない。その他のものは内容を CPD で検討した上，8 つを編集し，次年度に配信することにした。

・**新任教員プログラム**　2011 年度に，東北大学大学教員準備プログラムに新任教員が参加したが，東北大学の新任教員全体に提供する新任教員プログラムを開発するため，各部局にアンケートを行った（参考資料 3-3）。アンケートに基づき，全学・部局・東北大学高等教育開発推進センターの役割分担を明確にした上で，東北大学高等教育開発推進センターの実施する新任教員プログラムの内容を検討した。

（3）評価及び課題

・**PDP コンセプトの明確化**　2011 年度は多岐にわたる内容の PDP を提供し，参加者による評価は高く，更に多くの要望が寄せられているが，すべてのニーズを満たすことは困難である。また，多種多様な内容を扱ったため，全体としてどのような PDP を目指しているのかが不明瞭だった。今後は，PDP のコンセプトを明確化し，個別のプログラムが全体目標に貢献するよう内容の精査をする必要がある。

・**PDP・部局 PD 開発の内容**　2010 年度の開発は，PFFP への提供を目的にしたものであったが，

2011 年度は特色ある教養教育開発と部局の PD 活動を促進することを目的にした。その結果，スペイン語の教材開発，中国語 CALL 教材開発，高校と大学の英語教育の連携，英語の多読法など PDP のコンテンツ内容開発が推進された。まだすべての開発が関係していないが，これらの成果を普遍化し，PDP 開発のモデルとして PDP への提供に結びつけることが大きな課題である。

・**PDP 構造化の改善**　2011 年度は 2010 年度に開発した PDP を 5 つのシリーズに分け提供し，それぞれのセミナーについて推奨対象者を明記した。構造化をしたことで，自らの関心にしたがってさまざまなプログラムに参加をできるという利点があったが，提供側から見た場合に，対象者の幅が広く，セミナーによってはどういった対象者に焦点を当てて内容を準備することが好ましいのかわかりにくいという課題が指摘された。そこで，2012 年度は主題別に構造化し提供するプログラムと対象者別に構造化し提供するプログラムを準備する必要がある。

2-6．プログラム実施

（1）目標

① 2010 年度の PDP 開発を報告書でレビューした上で，年度内に授業として提供してもらう

② 単発の PDP，集中講義形式（週末や休み期間），e ラーニングなどを組み合わせたブレンディッドラーニング形式を進める

③ 2010 年度の PFFP 実施に基づき改善を加え，院生（主に東北大学）派遣を継続するほか，新任教員（東北大学）派遣を実施する。院生の派遣は，東北大学を中心とするが，他大学も視野に入れる

④ マイクロティーチングなど模擬授業を PFFP に組み込み，実施する

⑤ EMLP を試行的に実施する

（2）実施状況

・PDP は，対象者を明確にしたコースと，単発セミナーを組み合わせた分野・領域別コース，及びアド・ホックなセミナー類の 3 種に区分して実施した。

・2010 年度の開発活動に基づき，「グローバル時代の大学教職員像」（大学教員と国際化など 6 セミナー），「大学の授業の基礎と探求」（大学の授業基礎編など 8 セミナー），「学生を支援する」（発達障害学生支援を学ぶなど）　など 6 セミナー，「大学のマネジメント」（少子化時代の教育マネジメントなど 2 セミナー），「大学のカリキュラム」（教育マネジメントと質保証など 3 セミナー）の 5 シリーズを提供し，外に単発セミナーを 10 実施した。これらの総参加者は,1523 名であり，2010 年度の 2 倍となった。参加者から全体として高い評価を受けている（参考資料 3-4-3）。

2-6-1.　東北大学 大学教員準備ログラム（Tohoku University Preparing Future Faculty Program; Tohoku U. PFFP）

2011 年度東北大学 大学教員準備プログラムでは，2010 年度の活動を踏まえて 5 つの達成目標を立て，その目標を達成するために国内外での活動をプログラムに組み込むこととした。また，活動を支える仕組みとして，経験豊かな教員によるコメントなどのメンター制度と，活動を通して

学んだことや考えたことを記述するポートフォリオの作成を組み込んだ。プログラムは 2011 年 11 月下旬～2012 年 3 月中旬にかけて実施し，院生 14 名，ポストドクトラル 1 名，新任教員 3 名が参加した。

【達成目標】

- 単位やカリキュラム，シラバスの意味など大学教育の基礎を説明できる
- シラバスを通して，15 回の授業計画を表現できる
- 1 回の授業を設計し，実践できる
- 自分の行った教育活動に関して自己省察を実践できる
- 大学教員の役割，仕事を理解し，説明できる

【プログラム活動】

- オリエンテーション「PFFP へようこそ」
- セミナー「大学の授業の基礎編 1 ―シラバス作成から成績評価まで」
- ワークショップ「英語で授業を」
- ワークショップ「自分の授業をみつめる～マイクロティーチング」（もしくは，指導教員の授業の一回分を担当する模擬授業の実施）
- セミナー「諸外国の教育を知る～米・豪の高等教育」
- 海外集中コース（バークレー集中コース・メルボルン集中コース）
- ポートフォリオの作成

表 1　実施セミナー等

	日時	概要
PFFP へようこそ	2011 年 11 月 19 日（土） 10：30～16：30	参加者顔合わせ，大学教員のキャリアと Tohoku U. PFFP の目的や大学教育の課題に関する講義，今後の活動に関する説明など
大学の授業の基礎編 1 ―シラバス作成から成績評価まで	2011 年 11 月 28 日（月） 13：30～17：00	大学の授業に関する計画，実施，評価の諸側面を学ぶ
英語で授業を	2011 年 12 月 3 日（土） 10：00～16：00	教室で使う英語表現や第 2 外国語でのコミュニケーションにおける課題などを実践的に学ぶ
自分の授業をみつめる～マイクロティーチング	2012 年 1 月 19 日（木） 13：00～18：00	リフレクションに関する講義とマイクロティーチングの実施
諸外国の教育を知る～米・豪の高等教育	2012 年 2 月 22 日（水） 13：30～17：30	アメリカ，オーストラリアの高等教育の専門家より，それぞれの国の高等教育の課題，カリキュラム，教育改善の動きなどを学び，日本との比較をする
海外集中コース バークレー集中コース メルボルン集中コース	2012 年 3 月 3 日（土） ～3 月 12 日（月）	カリフォルニア大学バークレー校およびメルボルン大学において，1 週間の集中コースに参加
参加報告会	2012 年 3 月 22 日（木）	参加者による報告

【評価及び課題】

参加者が自分なりの教育観を構築し，主体的に教育について考察，実践，省察できるようプログラムの内容を企画した。参加者への聞き取りやアンケートの結果より，プログラムに対する評価は高く，教育活動についても多角的な視点から考えることができるようになったことが明らかとなった。課題としては以下 4 点が挙げられる。まず，メンター制度の改善である。メンター制度は試行的な内容であったので，2012 年度には，メンター育成のためのワークショップの開催，メンターの位置づけ，活動内容の明確化に取り組む。2 点目に，Tohoku U. PFFP のコンセプトをより明確に参加者に伝えることが挙げられる。本プログラムでは参加者の教育観構築と主体的な学びを促進するために様々なセミナーなどの活動を設定したが，中には，知識を段階的に獲得していくタイプのプログラムを期待していた参加者もおり，本プログラムの提供形式とのずれが生じてしまっているケースが見られた。2012 年度 Tohoku U. PFFP では，コンセプトを明確に伝える機会を設ける必要がある。3 点目に，大学院生を対象とした大学教員準備プログラムに含むべき要件を明らかにする必要がある。2011 年度には国内で同様のプログラムを提供する大学の担当者が集まり研究会を実施したが，2012 年度に大学教員を採用する側からのニーズ把握を行うための研究会を実施し，実践に基にした共通性を明らかにする。最後に，プログラムの講師の育成に取り組む必要が指摘できる。現在海外集中コースで提供してもらっている内容を国内で実施する際に，講師やファシリテーターが必要となってくる。Tohoku U. PFFP を担う人材育成という課題は，大学教職員専門性開発全体にも共通して指摘できる課題である。なお，2011 年度 Tohoku U. PFFP および下記新任教員研修プログラム（New Faculty Program; NFP）の詳細は別途（報告書『2011 年度東北大学 大学教員準備プログラム報告書』）参照。

2-6-2. 新任教員研修プログラム（New Faculty Program; NFP）

2011 年度には，大学教員準備プログラム（院生向け）に加え，新任教員も派遣対象として募集を拡大し，理学研究科助教，文学研究科准教授，法学研究科准教授の計 3 名が参加した。プログラム活動は，前項で詳述した Tohoku U. PFFP の国内セミナーの受講と，メルボルン集中コースへの派遣とし，PFFP のものと同内容を提供した。国内セミナーの受講においては，多忙中の参加に配慮し，ISTU を用いた動画配信を実施した。

【評価及び課題】

参加者からの評価は概ね好評であり，国内セミナーや海外集中コースで学んだことをすぐ自らの授業実践に役立てることができた旨が報告されている。また，異なる分野の同年代の教員と交流の機会を持てたことが大変有意義であったとの意見が寄せられている。しかし，2011 年度の実施プログラムでは，日常の業務や授業との両立に若干支障があったとの指摘がなされた。今後、新任教員の実態に配慮したプログラムの提供体制（実施時期，時間帯）を整える必要がある。

2-6-3. 大学教育マネジメント人材育成プログラム（Educational Management and Leadership Program; EMLP）

2011 年度から，教育開発や教育マネジメントに携わる教員向けに，大学教育マネジメント人材育成プログラムの開講を開始した。当プログラムでは，プログラム参加者が自身の所属する機関が

直面している課題を解決する改革案の作成を通じて，課題解決能力を養うことを目的としている。その目的を達成するために, 国内外での活動から成る4つのステップからプログラムを構成した。また，改革案作成を支援するために，教育開発ならびに教育マネジメントの経験が豊富な教員による助言者制度を採用した。プログラムは2011年9月上旬～2012年3月末日にかけて実施し，計11名（東北大学3名，東北大学除く国立大学3名，私立大学5名）が参加した。

【達成目標】

- 各自の大学・学部・研究科等に特有な課題の発見
- 各自の大学・学部・研究科等における教育マネジメントのためのプログラムや計画の設計
- 各自の状況に応じた、実行可能性の高いプランの立案と効果的な実行

【プログラム活動】

- Step1: 問題を抽出する―キックオフ・ワークショップ
- Step2: 問題解決への多様なアプローチを知る―クィーンズ集中コース
- Step3: 教育マネジメントへのアプローチを磨く―コンサルテーション・ワークショップ
- Step4: 改革案を完成させる／実施する―改革案ポートフォリオの作成と提出

表3　実施セミナー等

		日時	概要
Step1	キックオフ・ワークショップ	2011年9月2日（金）10：00～17：00	プログラム趣旨説明，カナダの高等教育の実情解説，各参加者の課題のプレゼンテーションとディスカッション，海外派遣に関わる連絡等
Step2	クィーンズ集中コース	2011年9月26日（月）～30日（金）	カナダ・クィーンズ大学における1週間の集中コースに参加
Step3	コンサルテーション・ワークショップ	2012年1月7日（土）～9日（月）	クィーンズ集中コースでの学習を踏まえて作成してきた改革案の進捗報告と，報告を踏まえた助言者や参加者同士のディスカッション
Step4	改革案を完成させる	2012年3月31日	改革案の提出

【評価及び課題】

数値上の評価は高い水準であり、個々のセミナー・集中コース・セミナー等については概ね好評を得ている。最終アンケート結果によると、プログラム参加者の個人的な目標やプログラムに対する期待次第で、評価も左右されるところがある。

課題として次の4点がある。

1点目は，震災の影響があったとはいえ，スケジュールが遅かったので，2012年度には，プログラム開始を早める。

2点目は，EMLPのコンセプトを明確にし，参加者からの理解を深め，自己の課題を具体化できるようにする。

3点目に，英語による報告・執筆などの負担が大きいので，課題の設定方法などで負担感を減らす余地がないか検討する。

4 点目は，　2011 年度は国立大学や私立大学の様々なポジションから参加者を得ることができ，価値観の多様性がこのプログラムにとって有益であった。2012 年度には応募資格を更に拡大し，大学教員のみならず大学職員にも門戸を開いたプログラムとする。

なお，各機関の課題を持ち寄るという，個別の文脈を活かしたプログラム設計のなかで，如何に一般的な，文脈を超えて共通する内容を扱ったセミナー・セッションを組み入れるかという点が大きな課題であろう。調査研究事業の中の「大学の組織運営とマネジメント人材育成調査」、「教育・学習マネジメントに関わる調査研究」の成果を参照しつつ，共通部分の改善に取り組む予定である。

（3）2-6 の評価及び課題

・**参加者アンケートの結果に基づくプログラムの評価・改善**　これまでの各プログラムの実施結果，ならびに参加者のアンケート調査結果等をもとに，継続して次年度以降のプログラムの改善を図っていく必要がある。PDP の参加者アンケート結果（参考資料 3-4-2）からは，「新しい知識・情報を知ることができた」「受講して満足した」の項目においては概ね好評価を得ていることがわかる。しかしながら，複数の講演者によるセミナーの場合には，その内容の一貫性や焦点のずれなどを指摘する声もあがっている。今後は，調査結果に基づいたプログラム内容の再設計，および改善を図ることが求められる。

・**PDP の提供形態の改善**　2011 年度の PDP は対面の講義形式による提供が多くを占めたが，内容によっては①ワークショップ形式での提供，②動画と対面講義やワークショップの組み合わせによるブレンディッドラーニング形式での提供，③動画のみによる提供，など異なる提供形態を探る必要がある。また，プログラムの多くは月曜日もしくは金曜日の午後に実施されたため，現職の教職員からは，関心をもっていても授業や勤務状況により，参加をすることができないという指摘があった。そこで，プログラムの内容によっては，夕方や週末の提供，オンラインでの動画配信による提供など，さまざまなニーズに応えるような提供形態を取り入れる必要がある。

・**部局との連携**　2011 年度は部局 PD の開発に着手したが，本格的な開発は 2012 年度に実施する部局や，開発した PD の実践を今年度に控えている部局など，現状は様々である。部局との協力，連携関係の強化は今後の PD プログラムの開発，実践において大変重要なため，部局 PD をきっかけとした関係の強化に継続して取り組んでいく必要がある。

・**広報活動のさらなる充実と成果の公開**　2010 年度の課題を踏まえ，ウェブサイトでの情報配信やパンフレットの作成などにより，各プログラムの広報，および各研究科への働きかけ等を拡充した。その結果，2010 年度から引き続き実施している PFFP においては，応募者数や応募研究科について改善がみられた．しかし，プログラム参加者からは，プログラムの存在そのものや内容についてのさらなる広報活動の必要性や，学内での認知度を向上させ，よりプログラムに参加しやすい環境を整えてほしいとの声もあがっている。これまでの成果等の公開も含め，ウェブサイト等を効果的に活用した広報活動を推進する必要がある。

2-7.　研究成果の発表･出版

（1）目標

① 研究的出版および主に実践的な内容を中心にした PD ブックレットをシリーズ化して刊行する。

② 研究成果を学会や研究会等で発表し，社会に還元する。

（2）実施状況

・**研究成果の出版**　高等教育ライブラリ，No.3『東日本大震災と大学教育の使命』（2011 年 11 月 18 日開催 IDE 大学セミナーの記録，参考資料 3-4-2，No.32），No.4『高等学校学習指導要領 vs 大学入試』（2011 年 9 月 2 日開催フォーラムの編集，参考資料 3-4-2，No.35）の 2 冊を刊行した。『CAHE レポート 39　東北大学の初修外国語教育』を刊行し，2010 年度実施の大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査の結果を報告書（PDF 版）にまとめた。

・**ブックレットの刊行**　PD ブックレット vol. 2『大学の授業を運営するために―認知心理学者からの提案―』を刊行した。新年度に東北大学の全教員および新大学院博士課程後期学生へ配布する予定である。また，vol. 3『学生のための心理・教育的支援』を 2012 年 6 月に刊行予定であり，現在編集を進めている。

・**講演及び学会活動**　2010 年度に実施した大学教員調査の調査結果を基に「大学教員の能力像と獲得要因」と題し，大学教育社会学会にて報告した。また，大学教育支援センター教員が，京都大学第 18 回大学教育研究フォーラムでラウンドテーブル「FD プログラムにおける提供者と参加者の「ずれ」を考察する」を企画・発表した。その他，学外からの要望に応じ，各種の講演会にて発表。その他，各個人で各種の執筆・発表活動を行った。

（3）評価及び課題

・**ブックレットのシリーズ化**　2011 年度以降の PD ブックレットシリーズを検討中であるが，必要とされる項目を継続して刊行していくこととする。

・**学会活動の推進**　2011 年度は，2010 年度調査の分析に費やしたため，学会発表が限られた回数のみ行われた。そのため，2012 年度はこれまでの分析結果や 2011 年度の新規調査研究を踏まえ，国内および国際学会での発表を行う予定である。

2-8.　他機関との連携

（1）目標

他の教育関係共同利用拠点及び放送大学 ICT 活用・遠隔教育センターとの連携を強め，調査研究・研究開発・プログラム提供の能力を高めること

（2）実施状況（再掲）

・**他組織との連携強化**　学内ではグローバル 30 事業と連携して外国人教員対象の合同 FD を開催したほか，部局 PD 開発の募集を行う等，部局との連携強化に努めた。国内では，他の拠点及び広島大学高等教育研究開発センターと共同で，「大学の組織運営とマネジメント人材育成」調査を実施した。また，メルボルン大学との共同で採択された豪州首相日本対象教育支援プログラムの実施に際しては，東北大学国際教育院との共同セミナー，山形大学，福島大学でのセミナー開催を企画し，2012 年度に実施予定である。

（3）評価及び課題

2011 年度は, 調査研究を中心にして他拠点との連携を行ったが, 各拠点や機関と資源を共有し, 相互に持続的な発展が可能な事業等を提案するなど，日本全体の大学教育力開発に，拠点事業そのものが有効となるような活動を強めていく必要がある。

2-9．2012 年度以降の課題

計画の目標及び運営の基本方針

(1) 3 年目に入り，次のステージを視野に入れ，拠点のコンセプトを明確にし，東北大学高等教育開発推進センターによる日本型プログラムの実施を進める。

(2) CAHE の第 2 回外部評価をふまえ，CAHE の将来構想を支える事業を推進する。

(3) 特に，取り組むべき重要課題は次の通り。

① PDP を，キャリア別，主題別に区分し，組織改革（教育・学習マネジメント）と人材育成（教職員の能力開発）とを統合した大学教育力開発のコンセプトを明確にする

② 履修証明プログラム制度の設計を行い，平成 25 年度から実施できるように準備する

③ PFFP は，理学・工学・文学など伝統的研究科の参加を促し，更に改善を図るとともに，今までの成果を反映した日本型プログラムの試案を作成する

④ NFP を新たに試行・実施し，海外派遣を拡大する

⑤ EMLP を改善し，持続的に海外派遣を実施する

⑥ 組織改革と人材育成を統合する各分野での教育力プログラムの開発・実施を進め，2012 年度は，語学教育の集中的ワークショップを行う

⑦ 昨年度撮影した PDP を含め，動画により，オンデマンドでプログラム提供を行う

⑧ 広報宣伝を改善し，利用者を拡大する

⑨ 他の教育関係共同利用拠点及び放送大学 ICT 活用・遠隔教育センターとの連携を強め，調査研究・研究開発・プログラム提供の能力を高める

⑩ 次期 5 年間を見据えた調査研究計画を策定する

3.　参考資料

3-1．大学教育力開発事業（特色ある教養教育内容開発）

大学教育力開発事業（特色ある教養教育内容開発）の公募要項

１．**公募事業の目的**　現代社会に求められる教養を育てる特色があり，全国の大学に普及する内容を備えた教養教育を東北大学高等教育開発推進センターと共同で開発すること。教育の対象者は学士課程に限定する必要はなく,大学院生や社会人を対象にした幅広いもので構わない。たとえば,学部３・４年対象の文理融合教育科目の開発，大学院生向け職業人としての教養教育科目の開発,専門職業を支える外国語コミュニケーションスキル開発授業など多様な内容が考えられる。

２．**開発期間**　平成 23 年度

３．**求められる成果**　授業の目的と学習成果を明確にし，成果を達成できる教育方法の明確化，他大学でも転用可能な普遍性を明確にすることが望ましい。申請に基づき，東北大学高等教育開発推進センターが協力する。平成 24 年度において全学教育若しくは大学院教育で実施し，その結果もふまえて最終報告とする。

４．**応募締切**　平成 23 年 7 月 8 日（金），7 月中に決定。

５．**応募資格**　本学教員で,東北大学高等教育開発推進センター教員との共同事業であること。なお,高等教育開発推進センターとの共同体制についてご相談の方は，大学教育支援センターにてサポートします。（要問合せ）

６．**応募要領**　指定した書式に必要事項を記入して学内便あるいはメールで提出すること。

７．**課題の採択について**　応募された課題について審査を行い，可否を決定する。全学で 3 件程度，1 件あたり 100 万円以内の開発費を提供する。

８．**特色ある教養教育内容開発　採択科目一覧**

	申請者氏名	職　名	所　属	事業名称	H23 年度 配分予定額
1	志柿 光浩	教授	国際文化研究科	実践的初修外国語コミュニケーション能力カリキュラムの開発	800,000
2	李 郁蕙	講師	高等教育開発推進センター	学習者の自律的学習を促す中国語 CALL 教材の開発	850,000
3	石井 誠一	准教授	医学系研究科・医学教育推進センター	英語で発表，討論，診療ができる医学生の育成	（H24 年度実施）
4	笹野 泰之	教授 （教務委員長）	歯学研究科	歯学部高学年次教養教育「医の倫理・社会の倫理」の開発	（H24･25 年度実施）
5	田中 幹人	助教 (GCOE)	理学研究科 天文学専攻	君が天文学者になるセメスター	712,000

	申請者氏名	職　名	所　属	事業名称	H23 年度 配分予定額
6	橘 由加	准教授	高等教育開発推進センター	高校英語教育から大学英語教育への橋渡しを目指して―英語コミュニケーション能力の向上を図るための教授法とは―	850,000
7	中川 学	講師	高等教育開発推進センター	近代東アジアにおける文化と大学に関する授業開発	850,000
8	Ben SHEARON	講師	高等教育開発推進センター	多読法基礎ゼミ	450,000
9	Todd ENSLEN	講師	高等教育開発推進センター	英語で授業を（上級編）	773,331
				平成 23 年度配分　計	5,285,331

※平成 24 年度配分予定額：1,100,000 円

※平成 25 年度配分予定額：400,000 円

3-2.　大学教育力開発事業（部局プロフェッショナル・ディベロップメント開発）

大学教育力開発事業（部局プロフェッショナル・ディベロップメント開発）の公募要項

１．**公募事業の目的**　学士課程教育及び大学院教育に責任を持つ東北大学内の部局と東北大学高等教育開発推進センターとが共同で，新任教員研修，カリキュラム改革，大学院生に対する大学教員準備教育の推進などを企画立案・実施することで，総合的な大学教育力向上を目指す。

２．**開発・実施期間**　平成 23～24 年度

３．**開発の内容**　外部講師の招聘を含む FD の実施，東北大学高等教育開発センターの開催する海外派遣プログラム（大学院生向け海外大学の大学教員準備プログラム，FD 委員会委員，教務委員など中核人材向け海外大学での教育マネジメントプログラム）への派遣などを組み合わせ，部局の特色や必要性に対応したプログラム開発を行う。

４．**応募締切**　平成 23 年 7 月 8 日(金)，7 月中に決定。

５．**応募資格**　部局若しくは学科単位であること。

６．**応募要領**　指定した書式に必要事項を記入して学内便あるいはメールで提出すること。

７．**課題の採択について**　応募された課題について審査を行い，可否を決定する。全学で 3 件程度，1 件あたり 50 万円以内の開発費を提供する。

８．**部局プロフェッショナル・ディベロップメント　採択科目一覧**

	部　局	申請代表者 （職名・氏名）	事業名称	H23 年度 配分予定額
1	理学研究科	教授・小薗英雄	理工系教養英語の早期教育プログラム開発の研修	442,000
2	歯学研究科	歯学研究科長・佐々木啓一	国際知・融合知に基づく歯学大学院教育力の開拓	500,000
3	薬学部	薬学部長・大島吉輝	薬学部カリキュラム改革事業	400,000
4	学務審議会 （評価改善委員会）	理科実験室・須藤/関根	理科実験にかかる外部評価	500,000
			計	1,842,000

3-3.　新任教員研修アンケート結果

部局における新任教員対象 FD プログラム調査　集計表

	1.　必要性（%）			2．実施状況（%）			3. 今後の実施主体（※）		
○高等教育のリテラシー関係	とても必要	必要	合計	実施中	検討中	実施せず	全学	高教センター	部局
(1) 大衆化など高等教育をめぐる動向や政策の知識	12	77	12	8	15	69	21	16	4
(2) 大学教員の役割やキャリアに関する知識	27	69	4	12	19	58	15	22	5
(3) 東北大学の歴史・理念に関する知識	12	88	0	12	12	73	25	13	4
(4) 教養教育や専門教育など専門分野の教育論	19	77	4	19	8	65	12	22	11
(5) 著作権など大学教員として守るべき研究倫理	54	46	0	15	23	54	25	12	7
○教育指導力関係	とても必要	必要	合計	実施中	検討中	実施せず	全学	高教センター	部局
(6) シラバスの書き方など年間を通した教育計画の立て方	31	62	8	23	12	58	5	25	14
(7) 授業の設計と教授技術	54	42	4	31	8	54	2	26	16
(8) 成績評価の知識とスキル	28	54	8	19	12	62	3	27	13
(9) ゼミ・実験など少人数教育の指導法	31	62	8	23	12	58	1	27	17
(10) 研究指導など個々の学生に対する指導法	46	50	4	23	12	54	3	23	17
○学生支援力関係	とても必要	必要	合計	実施中	検討中	実施せず	全学	高教センター	部局
(11) 青年心理など学生の現状に関する知識	38	58	4	23	8	54	14	26	5
(12) 障害学生など特別な支援を要する学生への指導法	19	77	4	15	12	58	15	25	3
(13) 外国人学生など多様な学生と異文化の理解	27	69	4	12	23	54	13	25	6
(14) ハラスメント防止など指導上の規範の理解	62	38	0	35	19	38	15	22	10
○マネジメント力関係	とても必要	必要	合計	実施中	検討中	実施せず	全学	高教センター	部局
(15) 大学の組織、管理運営などの知識	8	81	12	19	23	50	28	9	6
(16) 東北大学の中期目標・計画と戦略目標・課題	8	81	12	23	8	58	28	8	7
(17) 部局の中期目標・計画と戦略目標・課題	12	85	4	31	12	54	10	5	32
○その他	とても必要	必要	合計	実施中	検討中	実施せず	全学	高教センター	部局
(18) 英語による教授法	経済学研究科・経済学部より高等教育開発推進センターにて開催することを要望された								

※「3. 今後の実施主体」の値は，当該項目の主要役割を担うべき＝２点，一部を担うべき＝１点として換算。

・東北大学内３６部局（研究科および研究所等）中２６部局回答（2011 年 2 月実施）

3-4. PDP

3-4-1. PDP 分野一覧

ゾーン	カテゴリー	エレメント
高等教育のリテラシー形成関連 コード：L (Literacy)	高等教育論 L-01	高等教育の歴史，大学の理念，大学制度 ・ 組織，入試制度，関連法制，管理運営，国内外の動向など広く高等教育に関する知識・教養に関するもの
	大学教員論 L-02	大学教師の役割 ・ 責務，倫理，キャリア形成など大学教員に関する知識
	教育内容 ・ カリキュラム論 L-03	教養教育論，カリキュラム論など教授する教育内容の教育論に関するもの
	教授技術論 L-04	授業の設計，シラバスの書き方，学習と教授の心理学，教育測定の原理と方法，プロジェクトベースラーニングの進め方，論文・レポート執筆の指導など教授技術に関するもの
専門教育での指導力形成関連 （各専門分野） コード：S (Specialty)	学習指導法 S-01	専門分野の学習方法の指導法
	実験指導法 S-02	実験の計画，準備，実施，結果の整理，施設 ・ 設備 ・ 機器類の使用，危険の防止，倫理的ガイドライン等についての指導法
	研究指導法 S-03	研究テーマの設定方法，関連文献の検索方法，プレゼンテーションの方法，論文のまとめ方，研究費の申請方法等についての指導法
学生支援力形成関連 コード：W (Health & Welfare)	学生論 W-01	現代学生論，大学生の発達と学習，学生の生活問題，学生理解とカウンセリングなど学生理解と指導に関するもの
	学生相談 W-02	大学コミュニティへの適応支援の技術，カウンセリングの基礎,コンサルテーションの基礎，グループワークの基礎，人間関係調整法等の指導
	キャリア教育 W-03	進路選択の支援方法，キャリア形成の支援方法，経済的自立の指導
	健康教育 W-04	健康な生活習慣形成の指導法，趣味や余暇活用の指導法
マネジメント力 コード：M (Management)	組織運営論 M-01	大学の管理運営，大学のリーダーシップ論，危機管理
	大学人材開発論 M-02	FD/SD 論、教職員開発プログラム作成，キャリア・ステージ論
	教育マネジメント M-03	質保証，入口管理，カリキュラム・マネジメント，出口管理

3-4-2. PDP 実施一覧

No.	開催日	事業名	ポスター
シリーズ１：グローバル時代の大学教職員像			
1	11/11	**「大学教員のキャリアパス」PDP #1** 日時：2011 年 11 月 11 日（金）13:00～16:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 「大学教員職とはどのような職業か」 羽田 貴史（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 「大学教員のキャリア形成・能力開発」 猪股 歳之（東北大学高等教育開発推進センター・助教） 「東北大学女性研究者育成支援推進室の取り組み ～ハードリング事業からジャンプアップ事業へ～」 田中 真美（東北大学女性研究者育成支援推進室・医工学研究科教授） 参加者数: 36 名(学内: 34 名・学外: 2 名)	
2	10/7	**「大学教員の責務」PDP #2** 日時：2011 年 10 月 7 日（金）13:00～16:00 場所：東北大学川北キャンパス　講義棟 C307 「大学教員の責務：研究不正と学問的誠実性」 羽田 貴史（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 「社会的判断と科学の関係をめぐって：科学に出来ること，出来ないこと」 本堂 毅（東北大学理学研究科・教授） 「学生指導に果たす大学教員の役割」 前 忠彦（東北大学教養教育院・教授） 参加者数: 15 名(学内: 11 名・学外: 4 名)	
3	12/3	**「英語で授業を（初級編：大学院生対象）」PDP #3** 日時：2011 年 12 月 3 日（土）10:00～16:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M601 講師：トッド・エンスレン（東北大学高等教育開発推進センター・講師） ヴィンセント・スクラ（東北大学高等教育開発推進センター・講師） 参加者数: 20 名(学内: 20 名・学外: 0 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
4	12/10	「英語で授業を（初級編：教員対象）」**PDP #3** 日時：2011 年 12 月 10 日（土）10:00～16:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M601 講師：トッド・エンスレン（東北大学高等教育開発推進センター・講師） ヴィンセント・スクラ（東北大学高等教育開発推進センター・講師） 参加者数: 14 名(学内: 14 名・学外: 0 名)	
5	12/8	「海外で学び，研究する」**PDP #4** 日時：2011 年 12 月 8 日（木）13:30～15:50 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 「海外で研究するために」 村上 祐子（東北大学理学研究科・准教授） 「海外で学ぶための危機管理」 山田 直子（東北大学国際交流センター・講師） 参加者数: 12 名(学内: 11 名・学外: 1 名)	
6	7/15 ～17	「英語で授業を　（上級編）- Creating Meaningful Teaching and Learning Experiences -」**PDP #5** 日時：2011 年 7 月 15 日（金）～17 日（日） 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 A301 講師：トッド・エンスレン（東北大学高等教育開発推進センター・講師） ローラ・ハーン（イリノイ大学） スー・インゲルス（イリノイ大学） 参加者数: 38 名(学内: 35 名・学外: 3 名)	
7	12/9	「Project Management based 研究推進法」**PDP #6** 日時：2011 年 12 月 9 日（金）13:30～15:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 講師：加藤 修三（東北大学電気通信研究所・教授） 参加者数: 18 名(学内: 18 名・学外: 0 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
シリーズ 2：大学の授業の基礎と探求			
8	11/28	**「シラバス作成から成績評価まで」PDP #7** 日時：2011 年 11 月 28 日（月）13:30～17:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 「授業の全体を構想しシラバスに表現する」 　串本 剛（東北大学高等教育開発推進センター・講師） 「授業をマネジメントする」 　邑本 俊亮（東北大学情報科学研究科・教授） 「教育測定の原理と成績評価の方法」 　倉元 直樹（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 参加者数: 38 名(学内: 36 名・学外: 2 名)	
9	11/7	**「クリッカ―を使った双方向授業の進め方」PDP #8** 日時：2011 年 11 月 7 日（月）13:30～15:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 講師：中島 平（東北大学教育情報学研究部・准教授） 参加者数: 11 名(学内: 8 名・学外: 3 名)	
10	10/17	**「Instructional Design による授業設計」PDP #9** 日時：2011 年 10 月 17 日（月）13:30～15:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 講師：岩崎 信（元東北大学教育情報学研究部・教授） 参加者数: 8 名(学内: 8 名・学外: 0 名)	
11	10/28	**「外国語教育の理論と実践」PDP #10** 日時：2011 年 10 月 28 日（金）13:30～15:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M301 講師：志柿 光浩（東北大学国際文化研究科・教授） 参加者数: 15 名(学内: 12 名・学外: 3 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
12	1/27	「ものづくり実践型問題解決学習（PBL）の設計と進め方」**PDP #13** 日時：2012 年 1 月 27 日（金）13:30～15:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 講師：吉田 和哉（東北大学工学研究科・教授） 参加者数: 14 名(学内: 13 名・学外: 1 名)	
13	1/20	「学生の心をつかみ，授業を楽しむ方法 ～動物食品機能学の事例～」**PDP #14** 日時：2012 年 1 月 20 日（金）13:30～15:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 講師：北澤 春樹（東北大学農学研究科・准教授） 参加者数: 13 名(学内: 12 名・学外: 1 名)	
シリーズ 3：学生を支援する			
14	2/20	「学びを支える大学の役割」**PDP #15** 日時：2012 年 2 月 20 日（月）13:30～16:30 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 「学習支援の現状と課題」 沖 清豪（早稲田大学文学学術院・教授） 「氷河期の就職支援に求められるもの」 千葉 政典（東北大学高等教育開発推進センター・講師） 「学生相談から見える学生の姿」 池田 忠義（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 参加者数: 26 名(学内: 16 名・学外: 10 名)	
15	1/30	「大学生への経済支援のあり方と課題」**PDP #16** 日時：2012 年 1 月 30 日（月）13:30～15:30 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 講師： 小林 雅之（東京大学 大学総合教育研究センター・教授） 参加者数: 26 名(学内: 20 名・学外: 6 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
16	1/6	「ポートフォリオが開く学生と教師をつなぐ新たな世界」**PDP #17** 日時：2012 年 1 月 6 日（金）13:30～16:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M601 「ポートフォリオとは何かー学士力涵養に向けた射程ー」 　土持 ゲーリー 法一（帝京大学高等教育開発センター・教授） 「東北大学工学部のポートフォリオによる修学指導」 　田中 仁（東北大学工学研究科・教授） 「山形大学における教師と学生をつなぐ e ポートフォリオ」 　松田 岳士（島根大学教育開発センター・准教授） 参加者数: 37 名(学内: 19 名・学外: 18 名)	
17	11/15	「課外活動の現状と大学教職員の役割」**PDP #18** 日時：2011 年 11 月 15 日（火）13:30～15:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 講師：永富 良一（東北大学医工学研究科・教授） 参加者数: 19 名(学内: 19 名・学外: 0 名)	
18	12/19	「大学教員に求められる異文化理解 ～留学生とともに考える～」**PDP #19** 日時：2011 年 12 月 19 日（月）16:20～17:50 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 A202 講師：佐藤 勢紀子（東北大学高等教育推進センター・教授） 参加者数: 14 名(学内: 12 名・学外: 2 名)	
19	11/25	「他者理解：発達障害学生支援を学ぶ」**PDP #20** 日時：2011 年 11 月 25 日（金）13:30～15:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 講師：田中 真理（東北大学教育学研究科・准教授） 参加者数: 18 名(学内: 17 名・学外: 1 名)	

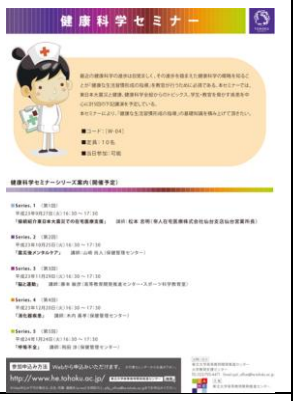
No.	開催日	事業名	ポスター
シリーズ 4：大学のマネジメント			
20	2/16	**「適合的入学者へのアプローチ」PDP #21** 日時：2012 年 2 月 16 日（木）13:30～16:30 場所：東北大学川内キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 「保護者から見た大学進学行動」 　谷口 哲也（河合塾教育開発部教育研究部長） 「大学入学者選抜の基礎知識」 　鈴木 敏明（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 「高大接続と初年次教育」 　杉谷 祐美子（青山学院大学教育人間科学部教育学科・准教授） 参加者数: 25 名(学内: 12 名・学外: 13 名)	
21	3/2	**「大学の危機管理」PDP #22** 日時：2012 年 3 月 2 日（金）13:30～16:30 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 A202 「リスク管理とダメージコントロール」 　中島 茂（中島経営法律事務所・代表） 「大学での事故事例と保険適用」 　藤井 昌雄（国大協サービス事業部・次長） 参加者数: 46 名(学内: 34 名・学外: 12 名)	
シリーズ 5：大学のカリキュラム			
22	1/24	**国際シンポジウム** **「グローバル時代の大学マネジメントと質保証」PDP #23** **第 1 部　「大学における教育マネジメントと質保証」** 日時：2012 年 1 月 24 日（火）13:00～18:00 場所：東北大学片平キャンパス　片平さくらホール 「米国の都市型大規模大学におけるデータ利用による学生到達度の改善」 　　デイビッド・ドゥエル（カリフォルニア州立大学ロングビーチ校・戦略的計画担当副学長） 「教育プログラムの健康診断―機関レベルにおける学士課程プログラムの質保証プロセス―」 　　トッド・ウォーカー（バララット大学・学習・質保証担当副学長） 「質の保証から質の文化へ―欧州の経験―」 　　ヘンリケ・トフト・イエンセン（元ロスキレ大学・学長） 参加者数: 82 名(学内: 10 名・学外: 72 名)	

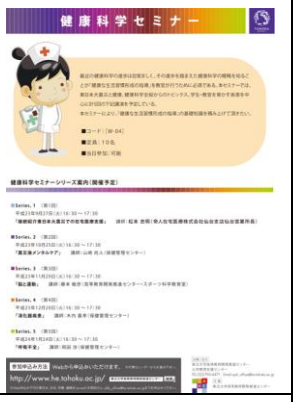
No.	開催日	事業名	ポスター
23	1/25	国際シンポジウム 「グローバル時代の大学マネジメントと質保証」**PDP #23** 第 2 部 「豪州における学生の需要に基づく高等教育システムの導入」 日時：2012 年 1 月 25 日（水）10:00～12:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M601 講師：リチャード・ジェームス（メルボルン大学・高等教育参加担当副学長） 参加者数: 52 名(学内: 9 名・学外: 43 名)	
24	10/13	公開シンポジウム 「東北大学における初修外国語教育」**PDP #25** 日時：2011 年 10 月 13 日（木）15:00～18:00 場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生支援部管理棟 3 階大会議室 「調査の概要」立石 慎治（東北大学高等教育開発推進センター・助教） 「ドイツ語」　杉浦 謙介（東北大学国際文化研究科・教授） 「フランス語」阿部 宏（東北大学文学研究科・教授） 「スペイン語」志柿 光浩（東北大学国際文化研究科・教授） 「中国語」　上野 稔弘（東北大学東北アジア研究センター・准教授） 参加者数: 34 名(学内: 33 名・学外: 1 名)	
単独セミナー			
25	9/9	職員向けシンポジウム＆ワークショップ **PDP #26** 「『大学の国際化』 - 快適安全なキャンパスを考える - 」 日時：2011 年 9 月 9 日（金）13:00～17:30 場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生支援部管理棟 3 階大会議室 第 1 部 講演：「グローバル時代における留学生教育の展望と課題」 岡田 昭人（東京外国語大学総合国際学研究院・准教授） 第 2 部 講演：「減災のための『やさしい日本語』とは」 前田 理佳子（大東文化大学外国語学部日本語学科・講師） ワークショップ：「『やさしい日本語』を使った（留）学生との円滑な日本語コミュニケーション～災害時の日本語に着目して～」 水野 義道（京都工芸繊維大学工芸科学研究科・准教授） 参加者数: 42 名(学内: 30 名・学外: 12 名)	
26	9/16 ～17	国際シンポジウム 「大学教授資格 ～世界の動向～」**PDP #27** 日時：2011 年 9 月 16 日（金）～17 日（土） 場所：東北大学川内萩ホール 2 階大会議室 第 1 セッション　『ヨーロッパ・北米の教授資格』 「イギリスの大学教授資格」　加藤 かおり（新潟大学・准教授） 「オーストラリアの大学教授資格」　杉本 和弘（東北大学・准教授） 「カナダの大学教授資格」　土持ゲーリー 法一（帝京大学・教授） 「メキシコの大学教授資格」　斉藤 泰雄（国立教育政策研究所・総括研究官）	

No.	開催日	事業名	ポスター
		第 2 セッション　『ヨーロッパ大陸の教授資格』 「イタリアの大学教授資格」　児玉 善仁（帝京大学・教授） 「フランスの大学教授資格」　大場 淳（広島大学・准教授） 「ドイツの大学教授資格」　木戸 裕（元・国立国会図書館・専門調査員） 「オランダの大学教授資格」　田中 正弘（弘前大学・准教授） 「フィンランドの大学教授資格」　渡邊 あや（熊本大学・准教授） 第３セッション　『アジアの教授資格』 「中国の大学教授資格」　叶 林（北京師範大学・准教授） 「韓国の大学教授資格」　金 美蘭（韓国教育開発院・研究員） 参加者数: 55 名(学内: 51 名・学外: 4 名)	
27	11/21	「Global に Competitive な学生輩出のためにⅡ-大学は何をすべきか」**PDP #28** 日時：2011 年 11 月 21 日（月）13:00～18:00 場所：東北大学片平キャンパス　片平さくらホール 「明日からボーダレスに闘えますね？ ～産業界が期待する人財像～」 北道 佳久（帝人海外事業企画室） 「東北大学電気・情報系グローバル COE（情報・電気・電子分野）の活動状況」 安達 文幸（東北大学工学研究科・教授） 「慶應義塾大学大学院理工学研究科（情報・電気・電子分野）での研究教育活動活性化への取り組み」 笹瀬 巌（慶応大学理工学研究科・教授） 「プロジェクトマネージメントをベースとした論理的 R&D 遂行法：論理的に思考する学生の輩出へ」 加藤 修三（東北大学電気通信研究所・教授） 「大学はどこまで主体的な学生を育てるのに成功してきたか」 羽田 貴史（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 参加者数:　名(学内・学外)	
28	12/1	「よりよい論文を書くために」**PDP #29** 第 1 回『研究とは？ 論文とは？』 日時：2011 年 12 月 1 日（木）13:00～14:30 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 A301 講師：佐藤 勢紀子（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 参加者数: 22 名(学内: 21 名・学外: 1 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
29	12/8	「よりよい論文を書くために」**PDP #29** 第 2 回『研究課題の示し方』 日時：2011 年 12 月 8 日（木）13:00～14:30 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 A301 講師：佐藤 勢紀子（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 参加者数: 25 名(学内: 24 名・学外: 1 名)	
30	12/15	「よりよい論文を書くために」**PDP #29** 第 3 回『先行研究の扱い方』 日時：2011 年 12 月 15 日（木）13:00～14:30 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 A301 講師：佐藤 勢紀子（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 参加者数: 26 名(学内: 25 名・学外: 1 名)	
31	12/22	「よりよい論文を書くために」**PDP #29** 第 4 回『論の展開の仕方』 日時：2011 年 12 月 22 日（木）13:00～14:30 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 A301 講師：佐藤 勢紀子（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 参加者数: 19 名(学内: 18 名・学外: 1 名)	
32	11/18	平成 23 年度 IDE 大学セミナー 「東日本大震災と人材育成」**PDP #30** 日時：2011 年 11 月 18 日（金）13:00～17:15 場所：仙台ガーデンパレス 「 震災復興の構想力 」 高成田 享（仙台大学・教授） 「 脱原発時代を支える人材確保・人材養成の課題 」 吉岡 斉（九州大学・副学長） 「 大震災以後の科学技術と人材育成 」 野家 啓一（東北大学・理事） 参加者数: 75 名(学内: 57 名・学外: 18 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
33	12/17	**「植民地時代の文化と教育Ⅱ『朝鮮と台湾における植民地大学』」PDP #31** 日時：2011 年 12 月 17 日（土）13:00～18:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア棟 M601 「台北帝国大学と熱帯研究」 呉 文星（国立台湾師範大学・教授） 「京城帝大の内と外: 韓国学術史の再認識」 白 永瑞（延世大学・教授） 「植民地官僚と帝国大学」 駒込 武（京都大学・准教授） 参加者数: 53 名(学内: 33 名・学外: 20 名)	
34	4/19	**第 15 回東北大学高等教育セミナー** **「震災後の学生支援と教職員支援のあり方　- 阪神・淡路大震災の教訓に学ぶ - 」** 日時：2011 年 4 月 19 日（火）15:30～18:00 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 A307 齊藤 誠一（神戸大学人間発達環境学研究科・准教授） 吉田 圭吾（神戸大学人間発達環境学研究科・准教授） 参加者数: 105 名(学内: 74 名・学外: 31 名)	
35	9/2	**大学改革シンポジウム / 第 14 回東北大学高等教育フォーラム** **「学習指導要領と大学入試　- 高大接続の原点を探る - 」** 日時：2011 年 9 月 2 日（金）13:00～17:30 場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M601 基調講演：「学習指導要領 VS. 大学入試　－その葛藤の軌跡といま－」 荒井 克弘（大学入試センター入学者選抜研究機構長） 現状報告：「新学習指導要領と大学入試」 樫田 豪利（金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校・教諭） 倉元 直樹（東北大学高等教育開発推進センター・准教授 渡邊 重夫（宮城県仙台第二高等学校・教諭） 参加者数: 158 名(学内: 20 名・学外: 138 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
36	9/27	2011 年度第 1 回健康科学セミナー　「東日本大震災での在宅医療支援」 日時：2011 年 9 月 27 日（火）16：30～17：30 場所：保健管理センター2F　ゼミナール室 講師：松本 忠明（帝人在宅医療株式会社仙台支店仙台営業所長） 参加者数: 15 名(学内: 13 名・学外: 2 名)	
37	10/25	「大学教員という職業　Part 1（文系）」 日時：2011 年 10 月 25 日（火）16:20～17:50 場所：東北大学川内北キャンパス 講義棟 B101 講師：羽田 貴史（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 参加者数: 9 名(学内: 8 名・学外: 1 名)	
38	10/25	2011 年度第 2 回健康科学セミナー　「震災後メンタルケア」 日時：2011 年 10 月 25 日（火）16:30～17:30 場所：保健管理センター2F　ゼミナール室 講師：山崎 尚人（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 参加者数: 17 名(学内: 14 名・学外: 3 名)	
39	10/28	高等教育国際セミナー 「欧州高等教育圏における質保証の動向（1999～2011 年）」 日時：2011 年 10 月 28 日（金）15:00～17:00 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M401 講師: ドナルド・ヴェステルハイデン（広島大学高等教育研究開発センター） 参加者数: 17 名(学内: 15 名・学外: 2 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
40	11/15	「大学教員という職業　Part 2（理系）」 日時：2011 年 11 月 15 日（火）16:20～17:50 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 B101 講師：関根 勉（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 参加者数: 16 名(学内: 16 名・学外: 0 名)	
41	11/29	2011 年度第 3 回 健康科学セミナー 「脳と運動」 日時：2011 年 11 月 29 日（火）16:30～17:30 場所：保健管理センター2F　ゼミナール室 講師：藤本 敏彦（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 参加者数: 15 名(学内: 13 名・学外: 2 名)	
42	12/16	第 13 回東北大学高等教育講演会 「産学連携と大学のあり方 ～象牙の塔から社会のセンターへ～」 日時：2011 年 12 月 16 日（金）10:30～14:30 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア棟 M601 「アカデミック・キャピタリズムを超えてーアメリカの大学と科学研究の現在」 上山 隆大（上智大学経済学部・教授） 「ヨーロッパにおける産学連携ー研究，教育と大学の第三の使命」 北川 文美（マンチェスタービジネススクール・講師） 参加者数: 24 名(学内: 19 名・学外: 5 名)	
43	12/20	2011 年度第 4 回 健康科学セミナー 「消化器疾患」 日時：2011 年 12 月 20 日（火）16：30～17：30 場所：東北大学川内北キャンパス 保健管理センター2F ゼミナール室 講師：木内 喜孝（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 参加者数: 13 名(学内: 12 名・学外: 1 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
44	1/24	2011 年度第 5 回 健康科学セミナー 「呼吸不全」 日時：2012 年 1 月 24 日（火）16:30～17:30 場所：東北大学川内北キャンパス 保健管理センター2F ゼミナール室 講師：飛田　渉（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 参加者数: 18 名(学内: 13 名・学外: 5 名)	
45	2/29	大学職員能力開発プログラム（SDP） 「教育企画力とは何か？ いかに身につけるか？」 日時：2012 年 2 月 29 日（水）13:30～17:35 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 A101 「教育企画力を考える」 江島 定人（九州大学学務企画課） 「これからの大学職員に求められる教育企画力とは？」 亀谷 純（宮城学院女子大学教育研究支援グループ） 「山形大でプレイフル！」 樋口 浩朗（山形大学渉外部大学連携推進室） 「図書館員としての教育企画力をいかに高めたか」 米澤 誠（東北大学附属図書館） 参加者数: 69 名(学内: 11 名・学外: 58 名)	
46	3/16	高大連携英語指導ワークショップ 「高校英語教育から大学英語教育への橋渡しを目指して - 英語コミュニケーション能力の向上を図るための教授法とは - 」 日時：2012 年 3 月 16 日（金）13:00～17:30 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M301 【第 1 部】高校の授業例の報告 「Japanese Teacher & American Teacher」 佐藤 真理，リック・メアーズ（尚絅学院高等学校・教諭） 「中高一貫英語指導実践に見る変化と気づき ― 小さな学校の小さな取組にどのような意義があったのか ―」 小林 昭文（聖徳学園高等学校・教諭） 「発信力のある生徒作り」 今川 佳紀（立命館宇治高等学校・教諭） 【第 2 部】東北大学からの報告 「CALL 授業例」 橘　由加（東北大学高等教育開発推進センター・准教授） 「全学英語教育の現状」 浅川　照夫（東北大学高等教育開発推進センター・教授） 参加者数:　名(学内:・学外)	

No.	開催日	事業名	ポスター
47	3/19	国際シンポジウム 「次世代の大学院教育　- 日米両国における大学院教育改革 - 」 日時：2012 年 3 月 19 日（月）13:00～17:20 場所：東北大学川内北キャンパス　マルチメディア教育研究棟 M601 「アメリカにおける大学院博士課程教育の改革」 　ダニエル・デネッケ（全米大学院協会准副代表） 「日本における大学院博士課程教育の改革」 　樋口 聰（文科省高等教育局大学振興課大学改革推進室長） 参加者数: 58 名(学内: 42 名・学外: 16 名)	
ランチタイム FD			
48	5/26	ランチタイム FD「FD 研究会 - 研究と教育の関係を探る」第 9 回　海外の大学教員養成プログラム参加報告（カリフォルニア大学バークレー校／メルボルン大学）について 日時：2011 年 5 月 26 日（木）12:10～12：50 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 C301 講師：佐藤 万知（東北大学高等教育開発推進センター・講師）　他、プログラム参加教員 参加者数: 17 名(学内: 17 名・学外: 0 名)	
49	6/9	ランチタイム FD「FD 研究会 - 研究と教育の関係を探る」第 10 回　東北大生は初修外国語とどう向き合っているか？　- 基礎調査の概要報告 - 日時：2011 年 6 月 9 日（木）12:10～12:50 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 C301 講師：立石 慎治（東北大学高等教育開発推進センター・ 助教） 参加者数: 18 名(学内: 18 名・学外: 0 名)	
50	7/28	ランチタイム FD「FD 研究会 - 研究と教育の関係を探る」第 11 回　運動を画像化する 日時：2011 年 7 月 28 日（木）12:00～13:00 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 C305 講師：藤本 敏彦（東北大学高等教育開発推進センター・ 准教授） 参加者数: 19 名(学内: 19 名・学外: 0 名)	

No.	開催日	事業名	ポスター
51	10/25	授業参観型 FD　「授業を聞く見る学ぶ」 第 1 回　近代イギリスとヨーロッパ経済興亡史 ■授業見学： 日時：2011 年 10 月 25 日（火）8:50～10:20 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 B201 担当教員：関内 隆（東北大学高等教育開発推進センター・教授） ■検 討 会： 日時：2011 年 10 月 25 日（火）12:10～12:50 場所：川内北キャンパス マルチメディア棟 M401 参加者数: 10 名(学内: 10 名・学外: 0 名)	
52	12/22	授業参観型 FD　「授業を聞く見る学ぶ」 第 2 回　Japanese for beginners ■授業見学 日時：2011 年 12 月 22 日（木）16:20～17:50 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 A405 担当教員：菅谷 奈津恵（高等教育開発推進センター・准教授） ■検討会 日時：2011 年 12 月 22 日（木）17:55～18:35 場所：東北大学川内北キャンパス　講義棟 A405 参加者数: 17 名(学内: 17 名・学外: 0 名)	

2011 年度ＰＤプログラム参加者総数

計 1,563 名（学内 1,043 名・学外 520 名）

※**PDP #11** および**#12** は申込者少数のため中止

3-4-3. PDP 参加者アンケート

シリーズ 1. グローバル時代の大学教員像

大学教員のキャリアパス（2011.11.11）
PDP #1

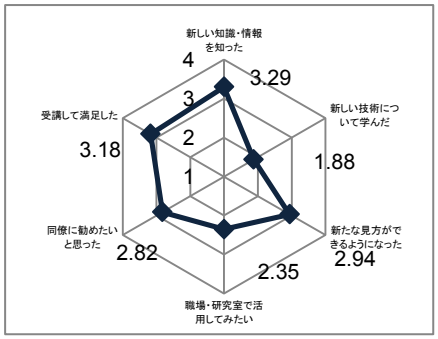
羽田貴史 ・猪股歳之・田中真美 先生

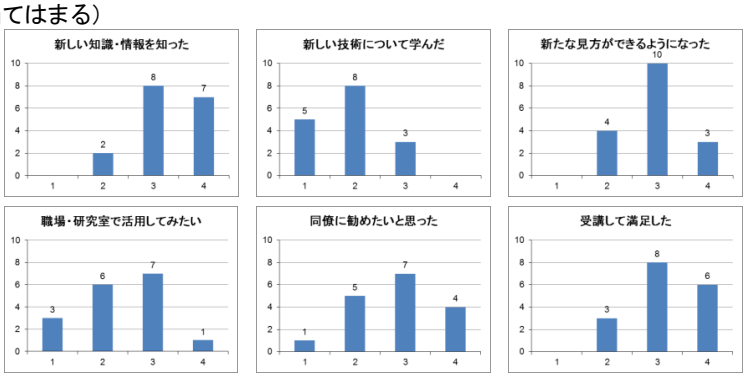
回答者属性(N=17)

【職階】学部生(4)／博士課程後期(9)／准教授(1)／講師・助教(3)

【性別】男性(11)／女性(5)／無回答(1)
【学校種】東北大学(15)／東北大学外(2)／無回答(0)

1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- 大学教員の現状について学んだこと
- クリッカーを初めて使いました。これか・・・
- 大学教職員の役割の多様性
- 東北大学での女性研究者の支援プログラムの存在
- 女性に対する支援活動を知ることができたこと
- 大学教授に求められる能力についての知識、教育能力への関心について
- 大学教員についてのデータが全般的に今後の進路を考える上で役に立った
- 大学教員となるまでのプロセス、それを裏付ける客観的データを得ることができ、今後の自身の方向性を決める手がかりの一つとなった
- 猪股先生の話の中にあった、教員を目指すうえで重要な２つの要因１．競合相手と２．ニーズ　という考え方は、今後の身の振り方を考える上でとても役立った
- 院にいる間にやっておくべきこと、教授する視点からいろんな先生の授業を見る、広い世界に身を置く
- 羽田先生の「大学教授職」とは何か？とのお話の中で「大学教授職に期待される能力とは」は、10 月に大学教員となったばかりの私にとってはとても参考になった
- 昨今、一般企業では労働生産性が注目されているが、大学のシステムにおいても教育や事務処理を効率化し、労働生産性を高め、研究時間を増やし、勤務時間を削減する必要があると感じた。羽田先生のお話全般。高等教育や大学教員の労働環境は大変興味深い分野だと思った

3. わかりにくいと思ったこと
- 大学教師の歴史的変遷の意味
- 受講対象がわかりにくかった。院生、PD 向けだとは知らなかった
- 話し方。「えー」と「おー」が多すぎて何を言っているかわからない
- 教員になる以前に、どのように必要な教育経験をつむのかについて
- 大学教員像の今後あるべき姿(要請されるであろう姿)というものが依然としてよく見えてこなかった(多様である、ということは、具体的な取り組みにおいて必ずしも意味を持たないと考えられるため)↑※質疑応答の中で、ある程度解消された面もあった
- 「田中先生の女性研究者支援プログラム」私自身文系(法学)の所属なので、文系研究者の支援があるのかよくわからなかった
- 講演２,「大学教育の能力開発」についての話がなかった(少なかった？)
- 猪股歳之先生の御発表はもっともらしくきこえるが、研究方法が十分適切とは言えないと思われ、内容の信ぴょう性に疑問が残った。正直に答えたとしても、人は誰でも経験は長いが、能力は低いという矛盾を解消するように考えるものである。また、人の判断はポストの変化など、環境の変化に影響を受ける。この点が考慮されているかどうかは疑問でした

4. セミナーに関しての意見・感想
- 3 人の先生方の教員になるプロセスは大変参考になりました
- 参加者同士の交流(情報交換)があれば良いと思いました
- 入職後、職場での人間関係の構築に関するコツなどを教示してほしい
- また機会があれば、このプログラムのセミナーをお願いします
- 他キャンパスでも聴講できるように、できれば動画・スライドデータの配信してほしい
- 女性研究者育成支援推進室の紹介が本日の手指にあっていたのか疑問
- もっと教員としての就活のリアルについて知る機会が欲しかった(公募への応募数とか、気をつけることとか)。討論会はすごいよかった
- PD プログラムは大変すばらしい取り組みだと思います。難しいことだと思いますが、教員のパフォーマンス評価に関する研究の成果に基づいて、教員養成プログラムが開発されるとよりすばらしいと感じました
- このセミナーは主として院生を対象にしていると思われるが、新任教員に対しても意味がありました。特に教えるという能力開発をどうするのか、見通しが立たなかったが、今回のお話を聞いて”FD”の重要性が理解できた。(私自身、この 9 月までは”

FD"というのはフロッピーディスク？という知識しかなかったが、採用されたことで FD という言葉を初めて知り、現在にいたっています(笑))

大学教職員と国際化１―英語で授業を（初級編：大学院生対象）（2011.12.3） PDP #3

Todd Enslen・Vincent Scura 先生

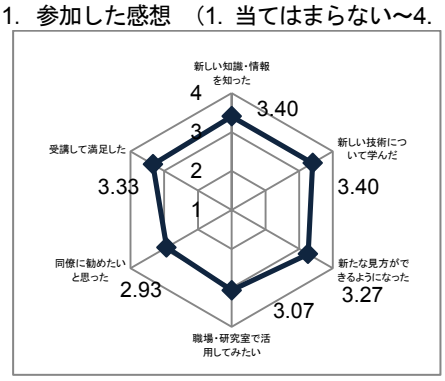
回答者属性(N=15)

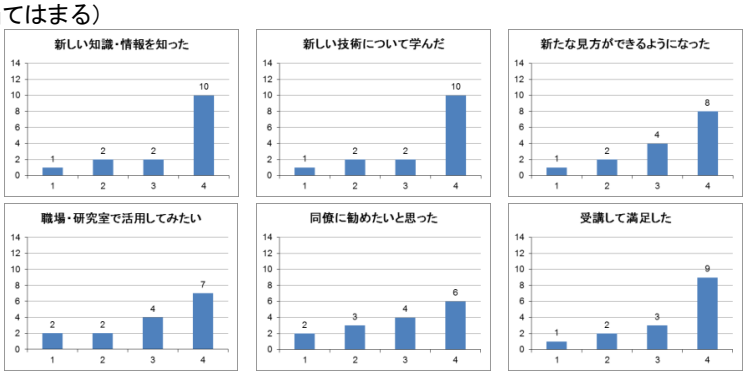
【職階】博士課程学生(13)／その他(1)／無回答(1)

【性別】男性(6)／女性(6)／無回答(3)

【学校種】東北大学(12)／東北大学外(0)／無回答(3)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・文化の違いによる授業の難しさ　・人前で英語授業したこと　・The tools (tricks) introduced by Vincent
・自身の Teaching philosophy を明確にする　・実際に発表してフィードバックをもらえたこと
・I firstly know the organizational styles of hight context and (on) context.
・microteaching is practical and helpful!　コメントも非常に役に立ちます
・Teachers management skill was excellent.／I could learn how to manage lecture.
・質問を作り、おたがいにインタビューをするワーク／仲間同士で討論しあう
・講義内容もそうですが、自分のマイクロティーチングを視聴することは有意義だと思います。はずかしいですが
・何よりも実践できたことが大きな意味をもっていると思います
・自分自身の言動などを客観的にチェックできることはよかった。ビデオに記録されていることで復習も可能となっていること
・受講者とのインタラクションにおいて工夫が必要な点がプレゼント比べて多いように感じた。どうやって受講者の興味を惹きつけるかは今後の課題としたい

3. わかりにくいと思ったこと

・There weren't any.　・the slide of language was hard to understand.
・前もって必要な準備について、事前連絡があったため、パワーポイントをつくったが、意味がなくなってしまったこと
・CLASSROOM,VOCABULARY　よく利用される専門用語については、海外研修に行く前に紹介していただけると幸いです。
・実際に教室内で使う表現 etc を練習する時間があるとなお良かったと思います。
・自分の語学力が足りなかったため、全体的に内容を理解しづらいと感じた。
・Video (about grammar idioms) is not easy for native-speaker(I want to pre-explanation)
・microteaching をもっとやさしいのにして欲しい。 Or English skill grade 別に行う

4. セミナーに関しての意見・感想

・とても有益な貴重な機会だった　・Very interesting topic, I could enjoy to セミナー
・英語での授業に関する表現はもっと多く教えていただければ　・マイクロティーチングに関する準備期間が欲しかったです
・ワークショップがおもしろかった。人の話を聞くだけでもためになる。あとで、自分のプレゼンをみなおしてみようと思う。
・時間的には難しいかもしれないが、定期的な研修、授業実践を行ったほうがいいと思う。継続的な training が必要
・もう少し事前にマイクロティーチングについて詳しい説明があればよかったか

大学教職員と国際化１―英語で授業を（初級編：教員対象）―（2011.12.10） PDP #3

Todd Enslen・Vincent Scura 先生

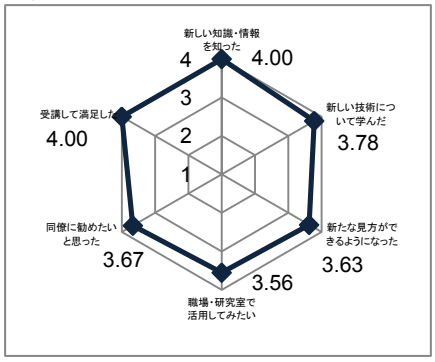
回答者属性(N=9)

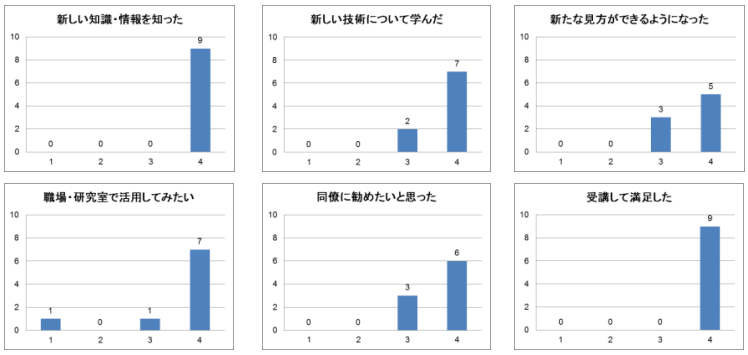
【職階】博士課程学生(2)／准教授(2)／講師・助教(4)／無回答(1)

【性別】男性(7)／女性(1)／無回答(1)

【学校種】東北大学(6)／東北大学外(0)／無回答(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
   - Skills
   - 自分が話す英語が聞き取りにくい原因を改めて自覚した
   - 1. The presentation of the two teachers. 2. The presentation of students. I learnt a lot from them.
   - Likert scale で、neutral answer なしのかんたんな discussion がセミナーや授業の初日などにかなり有効だとおもった
   - b と v の発音の違い。英語で授業をする上で役に立つ表現の紹介(organization cues など)
   - 英会話スクールでは日常会話しか学べないので、アカデミックな講義を英語で開くことができたことがじぶんにとっては大きな収穫であった。定期的にこのような機会があればもっと上達できるのに、とも思う
   - 構成の作り方、自分でマイクロティーチングを行なって、その後コメントをもらえるところ
   - どれもよかったです。他の生徒の microteaching も勉強になりました
3. わかりにくいと思ったこと
   - 1. I enjoy the workshop of this time.
   - 講師の話す英語のスピードがもう少し遅くても良かったのでは？
   - コメディ動画の笑いどころ
   - とくにないが、もっと時間をかけて（何回かにわけて）やってもらえるといい
4. セミナーに関しての意見・感想
   - Good
   - シリーズで時間をかけたものを受けたい
   - 10 日間のコースなど、長期のものがあってもいいかと思いました
   - 英語を用いての教育法に関するセミナーは今後ニーズが高まるので今後もぜひ開いてほしい

大学教職員と国際化２―海外で学び、研究する―（2011.12.8） PDP #4

村上裕子・山田直子　先生

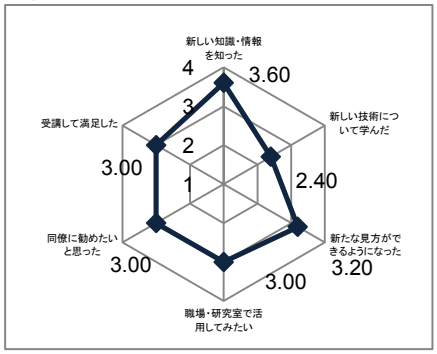
回答者属性(N=5)

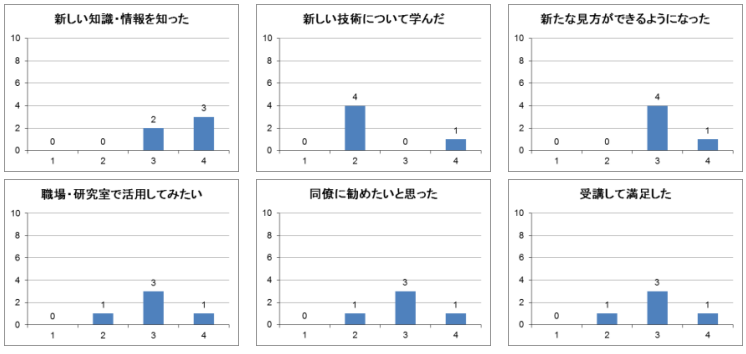
【職階】博士課程学生(2)／助手(1)／職員(1)／無回答(1)

【性別】男性(2)／女性(3)／無回答(0)

【学校種】東北大学(3)／東北大学外(1)／無回答(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
   - 海外留学の際の準備、リスク、村上先生：指導者視点での学生への留学支援の具体例が非常に参考になった。情報がとても充実していた。今後も今回の内容をフォローアップしたい。山田先生：大規模大学のリスクマネジメントがとても参考になった
   - 留学の代替案として高度イノベーション博士人材育成センター等の道がある
   - 留学させる前の段階で教員側から注意すべき点が特に役に立つと思いました
   - 役に立つと言うよりは、気をつけようということが多かったのですが、具体的な事例をいくつか聞けてよかったです
3. わかりにくいと思ったこと
   - 村上先生の授業が大変興味深かったが、配布資料がなかったのでもう少しスライドの切替をゆっくりにしてほしかったです
   - 教員の立場ではないので、なかなか実感しにくい点もありました
4. セミナーに関しての意見・感想
   - このような充実の有益な講義を広く公開していただき、ありがとうございました

・もっと多くの教官に対して知らせたほうが良いのでは。自分の分野の教官のリスク管理が不十分ではないかと心配になりました

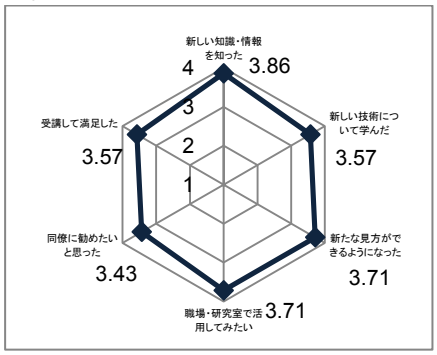
大学教職員と国際化４―Project Management based 研究推進法―（2011.12.9） PDP #6　　加藤修三　先生

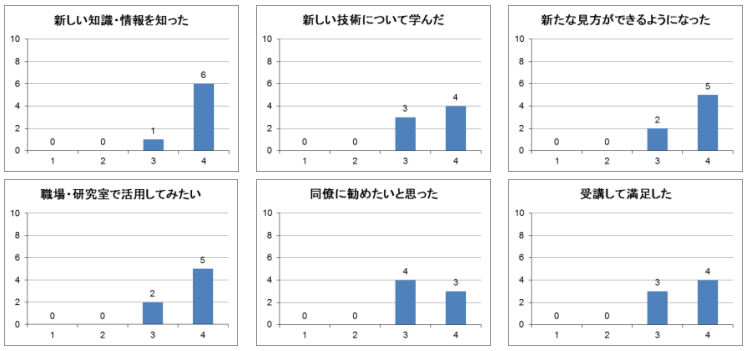
回答者属性(N=7)

【職階】博士課程学生(1)／准教授(2)／講師・助教(2)／助手(1)
研究員(1)

【性別】男性(3)／女性(4)／無回答(0)
【学校種】東北大学(7)／東北大学外(0)／無回答(0)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
   - 犯人探しをしないこと
   - 毎回の様々な会議の開催とその進め方に役立つ
   - 会議の招集、運営の仕方について
   - アプローチ、考え方について新たに学びができていいと思います。
   - どの技術も役に立ちそうで、大変良かったです。／やめる勇気をもつこと
3. わかりにくいと思ったこと
   - WBS のリソース割り振りの方法
   - 90 分は短すぎました。半日でも良いと思います
   - もっと Discussion とワークショップの時間があればと思います
4. セミナーに関しての意見・感想（記入なし）

シリーズ２．大学の授業の基礎と探求

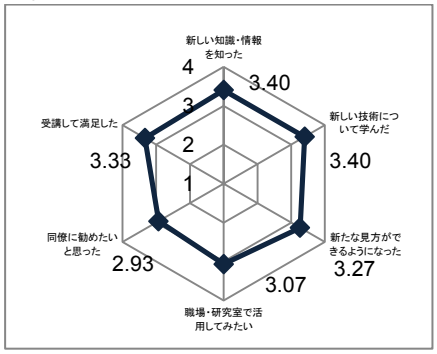
大学の授業 基礎編①―シラバス作成から成績評価まで―（2011.11.28） PDP #7　　串本 剛・邑本俊亮・倉元直樹　先生

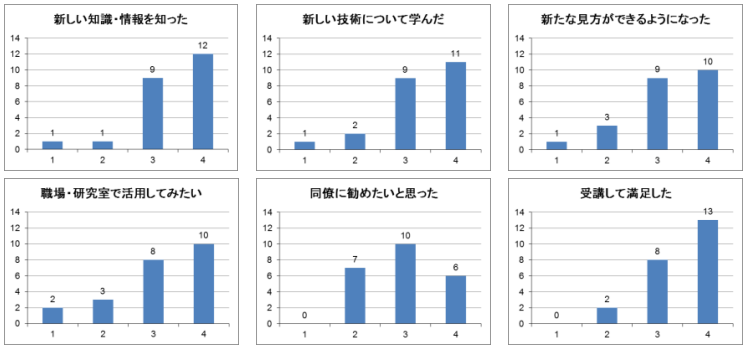
回答者属性(N=23)

【職階】博士課程学生(11)／教授(1)／准教授(1)／講師・助教(6)
職員(1)／無回答(3)

【性別】男性(16)／女性(4)／無回答(3)
【学校種】東北大学(18)／東北大学外(0)／無回答(5)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
   - 邑本先生
   - シラバス作成上の留意点
   - シラバスの作成法
   - シラバスの作成手順について
   - シラバス構成法／授業運営法
   - ユニバーサル段階という言葉の意味
   - 「内容ベース」と「学習ベース」というシラバスの発想
   - 学習理論、シラバスの作成～できるという？内容妥当性について
   - 学習中心のシラバス設計と、内容中心のシラバス設計との比較／「どうつくればよいか？」という疑問に直接答える回答例のひとつが示されており、実践的／メンタルモデル構築のプロセス、抽象的概念をわかりやすく可視化していた。すぐに取り入れたい
   - 人間の心理学的視点から、授業をとらえていたことは新鮮でした。三週間後の模擬授業に生かしたい
   - 授業計画策定、授業マネジメントについて大変有益な示唆を頂き感謝します
   - 「授業をマネジメントする」という講義は非常にわかりやすく印象的になります
   - シラバス作成と成績評価について非常に勉強になりました。「授業をマネジメントする」は昨年授業しましたけど、またおもし

ろいと思います
・授業の準備において 10 の材料のうち、使うのは 2 だという話が印象に残りました。また、映像を続けるのではなく、映像→話→グラフ、とバラエティに富ませるのが重要だということが役にたちそうだと思います
・授業のマネジメントで発表の仕方のポイントをお示しいただいたので、是非実践してみたいと思いました
・授業マネジメントについて。文脈の活用や先行オーガナイザー利用など、授業に導入してみたいと思いました
・シラバス、講義、評価に関して、基礎的な内容を学べたこと。基礎と技術の両方が学べ、参考になった
・串本先生、シラバスの書き方は全く知識がなかったので勉強になりました。（邑本先生は一部学部時代に受けた講義と重複していましたが飽きませんでした、さすがです）
・理解の過程は授業の構成を練るのに役立つと思いました
・「授業をマネジメントする」大変役にたった。とても具体性に富み、心理学的に学習者がどう考えるかを想定し、私達にとってもわかりやすかったと思う
・文脈の中で既有知識有り無しで理解度が全然違うという事。理解の段階が、見て、文脈を把握して、既有知識の活性化ということ、理解の段階に関する全体像が見えるようになった

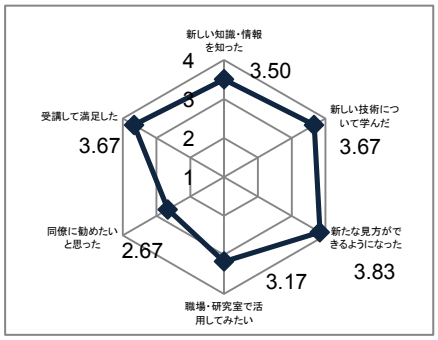
3. わかりにくいと思ったこと
・具体的な評価の方法　・成績評価の方法について　・評価における事例があまりないこと
・倉元先生の講演、全てわかりませんでした。論点を整理してください
・「古典的」テストとは具体的にどんなテストのことか?
・そもそも、授業を設計するときに頭に描くべき最上位の目的は何なのか？（自分なりに定義すれば OK なのか？それとも、教師として心得ておくべき職業倫理のようなものはあるのか？）この最上位の目的が先にあって、その手段の一例として今日のセミナーで取り上げられたような技術があると思うので、目的の方を知らないと使いこなせないと感じた
・シラバスの作成を手がけたことがなかったため、１５分で作るのは大変難しかった。普段日頃から授業を構築することを考えていなかった証拠なのだろうか。やや文系の授業に焦点があてられているなあとは感じました
・概念的な部分についてはそれをどう実践に結びつければよいかの演習も含められれば良いと感じました
・古典的テスト理論についてはちょっと抽象的で、それに関する知識は？なかったのでやはりあまりわかりません
・シラバス作成のところにもちょっと例を上げればわかりやすくと思います
・成績評価の方法。理論ばかりで実践でどう応用すればよいのかわかりづらかった。あと最初の「課題」に何の意味があったのか？
・実質的にはテストよりレポートのほうが多いので、レポートの評価について聞ければよかったかと思います。
・成績評価についてもう少し具体的な例（実例に基づいたケース）などを通じて教えていただきたかったです
・古典的テスト理論についてはちょっと抽象的で、それに関する知識は？なかったのでやはりあまりわかりません
・教員各自の実際の授業への具体的な応用方法／実際の授業、学生は「なまもの」なのでシラバス構成は限界があると思う。そのへんにも触れて欲しかった

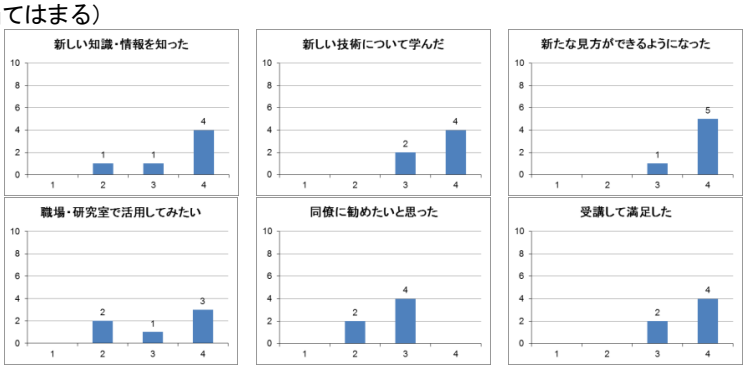
4. セミナーに関しての意見・感想
・3 つの授業それぞれに重要なテーマですので、講義＋演習というスタイルでもっと時間をかけても良いかなと思いました。大変良い企画でした。ありがとうございました
・シラバス作成などは時間をとって、おたがいに討論することがよいと思います
・実際にシラバスを書く時期に添削や助言をいただく機会があるとうれしいです

大学の授業 基礎編１ ―クリッカーを使った双方向授業の進め方―（2011.11.7） PDP #8　中島　平 先生

回答者属性(N=6)
【職階】准教授(1)／講師・助教(2)／助手(1)／職員(1)／企業(1)　【性別】男性(2)／女性(4)
【学校種】東北大学(3)／東北大学外(2)／無回答(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
・学生とのコミュニケーション　・Quiz コンテンツの作り方、tips・実習型授業で活用する手法が参考になった
・講義の構成上、ICT 機器を効果的に活用する方法を学んだこと。初回のきめ細かい質問設定
・PF-NOTE の使い方…特に医療系は話を伺っていたが、具体的な検証・動画ははじめてみたので参考になった
・think-pair-share 法は使えそうだと感じた。クリッカーが工学部にあるかどうかわからないが、使えれば有効であると感じました

3. わかりにくいと思ったこと
・クリッカーにより学生間で協力する機会を増やすというのがわかりませんでした
・プレゼン自体にわかりにくいところがあった

4. セミナーに関しての意見・感想

・他の言語に関してもお願いいいたします　　・時間があればまた参加させて頂きたいと思います
・成功例のみであったので、欠点や失敗例が知りたかった
・意外と参加者が少なく、ゆったりした雰囲気で参加できた。開催を知らない人が多いのでしょうか？
・今年度は様々なセミナーがあり、毎回楽しみにしております。ありがとうございます

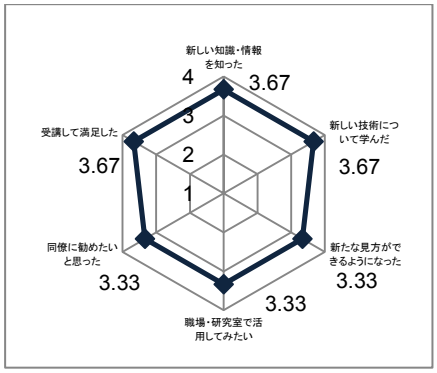
教育方法の創造２―Instructional Design による授業設計―（2011.10.17）　岩崎　信 先生
PDP #9

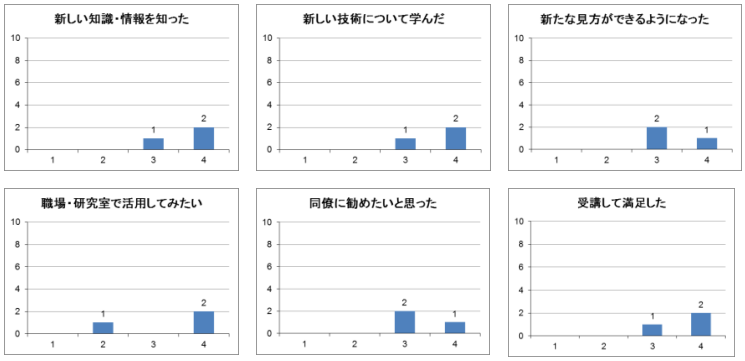
回答者属性(N=3)

【職階】博士課程後期(2)／研究員(1)

【性別】男性(3)／女性(0)
【学校種】東北大学(3) ／東北大学外(0)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・反復学習の必要；繰り返しの学習により修得力を高めることが重要であると感じた。
・シラバスの書き方と試験による評価。
・授業の進め方

3. わかりにくいと思ったこと

・実際に物理学の授業をどのように行なっているのかがイメージできなかった。ビデオなどがあると理解が高まると感じた。（最後にツールを使って行うことがわかった）
・学生の気持ち。どんな態度で授業を受けているのか、例えば単位が取れればいいのか、物理をマスターしたいと思っているのか。
・授業の内容と目標レベルとの差

4. セミナーに関しての意見・感想

・ディスカッションの時間が長くてよかった。もう少し長くてもいい。
・授業の進め方がはじめてで参考になった

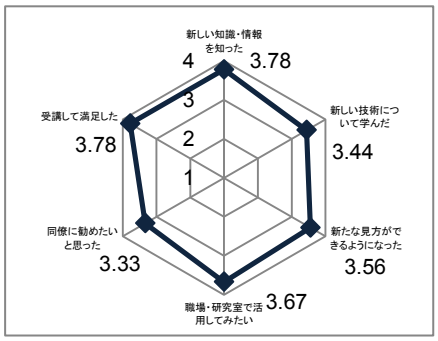
教育方法の創造３―外国語教育の理論と実際―（2011.10.28）　志柿光浩 先生
PDP #10

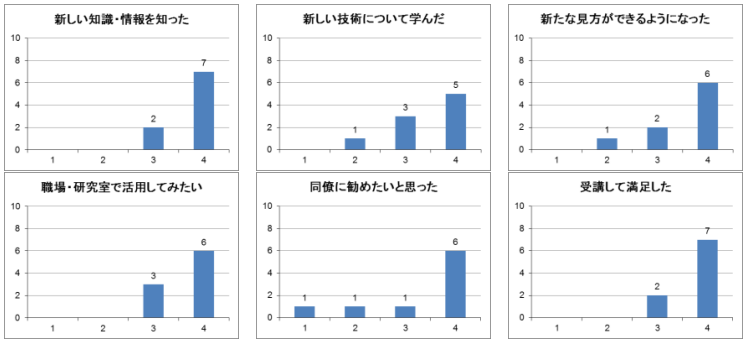
回答者属性(N=9)

【職階】博士課程後期(1)／教授(2)／准教授(1)／講師・助教(2)
非常勤講師(1)／職員(1)／無回答(1)

【性別】男性(6)／女性(2)／無回答(1)
【学校種】東北大学(4)／東北大学外(3)／その他(1)／無回答(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・実践のいろいろ　　・ほとんどすべて　　・教卓、学生机の配置、パワーポイント利用の注意
・席の座り方　　・授業実践の方法、大変参考になりました
・いろいろな教えを知った　　・様々な理論と実践のつながりに関する知見
・学習(記憶)メモリーの活用について教学んだことは役立つと思いました。実践で生かしていきたいと思います

3. わかりにくいと思ったこと

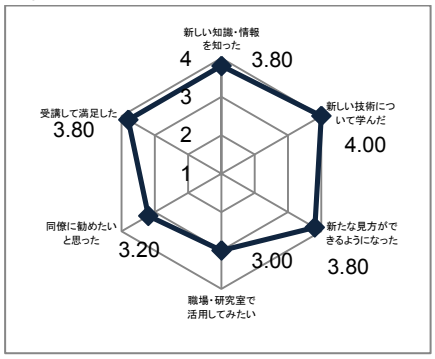
・認知負荷理論の学習観についてもっとわかりやすく説明してほしかった。参考文献を読んでみたいと思います

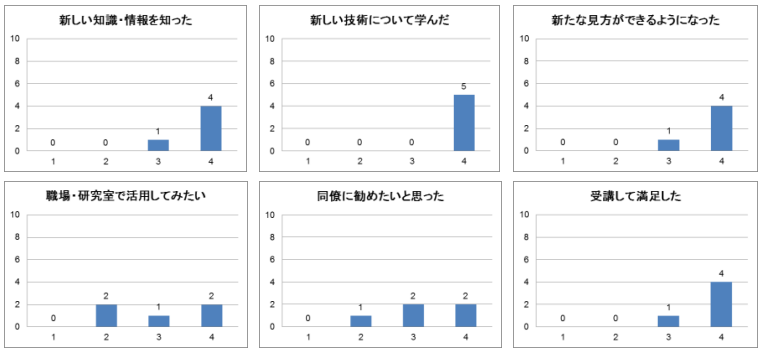
4. セミナーに関しての意見・感想
・他の言語に関してもお願いいたします
・こうしたセミナーは役立つので、また案内してほしい
・今年度は様々なセミナーがあり、毎回楽しみにしております。ありがとうございます

大学の授業 応用編２―ものづくり実践型問題解決学習（PBL）の設計と進め方―（2012.1.27） PDP #13　吉田和哉 先生

回答者属性(N=5)
【職階】教授(1)／講師・助教(1)／職員(2)／研究員(1)
【性別】男性(4)／女性(1)／無回答(0)
【学校種】東北大(4)／学外(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）



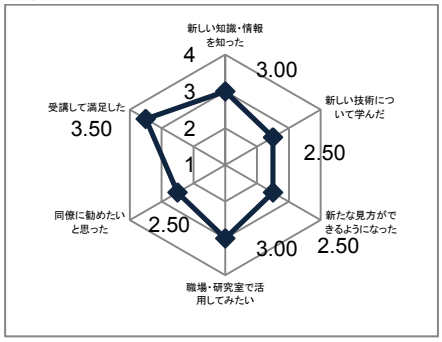


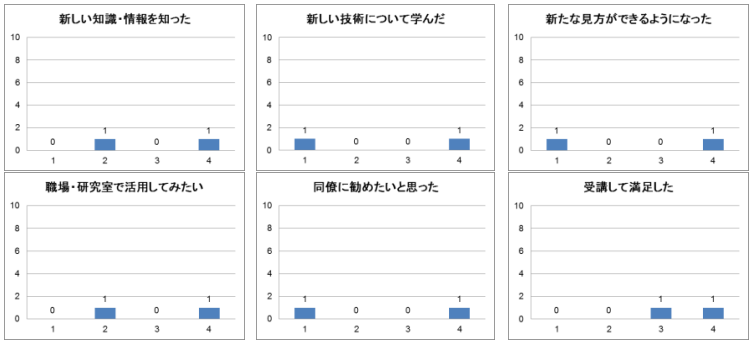
2. 特に役に立ちそうと思ったこと
・他人評価　・工学教育の考え方　・プロジェクトの推進のやり方
・PBL を進める上で成功の基準を段階的に決めていくこと
・機械系の先生方の教育に対する情熱と実行力は、大きなプロジェクトの企画実施に勉強になった
3. わかりにくいと思ったこと
・大学院での研究との関連
4. セミナーに関しての意見・感想
・受講者が少なくて、役立つ話を効果的に適所に提供できるような機会があったほうがいいのでは？

大学の授業 応用編３―学生の心をつかみ、授業を楽しむ方法～動物食品機能学の事例―（2012.1.20） PDP #14　北澤春樹 先生

回答者属性(N=2)
【職階】データなし
【性別】データなし
【学校種】データなし

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
・静止画だけでなく、動画も適度に入れて活用していくこと。聴衆が飽きないように工夫すること
3. わかりにくいと思ったこと
（記入無し）
4. セミナーに関しての意見・感想
・ワークショップが望ましい。Q&A を増やす。

シリーズ３．学生を支援する

学生支援 基礎編１―学びを支える大学の役割―（2012.2.20）
PDP #15

沖　清豪・千葉政典・池田忠義　先生

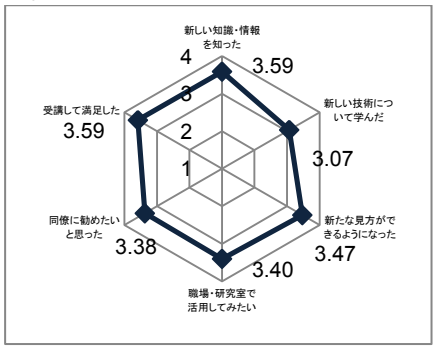
回答者属性(N=17)

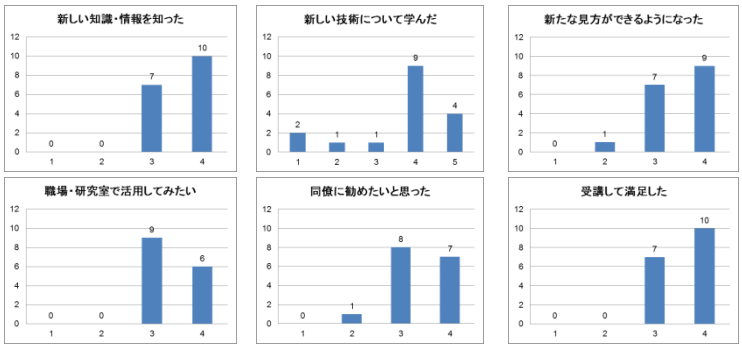
【職階】博士課程学生(3)／教授(2)／講師・助教(2)／職員(7)／その他(3)

【性別】男性(12)／女性(4)／無回答(1)

【学校種】東北大学(8)／東北大学外(9)／無回答(0)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- 「学生を理解する」視点、スタンスと
- 今の学生の置かれた立場がよく理解できた
- 学校のキャリア就職への取り組み
- 学生支援の趨勢などを聞いて考え方に幅ができたように思う。
- 「学習支援の現状と課題」における諸大学の学習支援事例と分析
- 学生支援、キャリア支援、学生相談について参考となりました。特に教員職員との連携をどうするかについて、また多様化する学生に対応するための今後検討していきたいと思います
- 全国的に大学の教育に対する支援の動きがあることを知ることができた。現代の学生の実態を基に大学のカリキュラム・教育を根本から見直すべきだと思う
- 沖先生の講演の中に他大学の具体例もあり、さらに調べて取り入れていきたいと思いました
- 学生相談の視点から見た、現在の大学生の問題点を知ることができたこと
- 学生支援の領域の全体像が分かったこと。総論としてとても有意義でした
- 学生の心理的特徴が役立った。学生と接する上でその発達的課題を知ることでその対応方法が変わってくるので
- 学生相談について当初「発達障害学生への対応」として示された。指示や助言は具体的・明確に（4 項目）といったことが「学生全般に当てはまるようだ」という示唆

3. わかりにくいと思ったこと

- 特になし
- 特に学習支援についてもっと知りたいです
- 様々な支援に内在する実態レベルでの課題（具体的な事例）、支援する例の課題
- 大学教員が本来すべき仕事や大学の役割というのが何かの講演がほしかった

4. セミナーに関しての意見・感想

- 構成、講師ともにすばらしいプログラムだと思いました。
- 東北大学様　早稲田大学様の事例と他大学様の取り組みも含めて大変参考になりました。学生相談、就職、進路、キャリア支援の進め方について、現在本学では一部署にて担当しており職員一人への業務が多く負担がかかりすぎている点を解釈する方法を、本日は見えたような気がします。今後学生にとって良い体制づくりをしていきたいと思います。本日は講師の先生方をはじめ、準備をすすめていただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました
- 院生になってこのようなセミナーに参加しました。大学は研究第一で教育に無関心な態度をとっているものだと思っていましたが、大学側もようやく教育・学習支援に目をつけるようになったとほっと安心している反面今さら？と半分呆れています。今日は（WHO?）誰が何をするのかという提案がありましたが現在講義を担当しているのは大学教員です。そのような大学教員の参加がほとんどないのは残念である。有意義なセミナー、講演であったが、これが M 棟の中での区論にならないでほしいと思う。
- 様々な視点から今の学生像をわかりやすく説明していただき、そうした学生への対応についてもお話しいただき非常に参考になりました。ぜひさらにもっと踏み込んだところをまたお話しいただければ幸いです。本日はありがとうございました

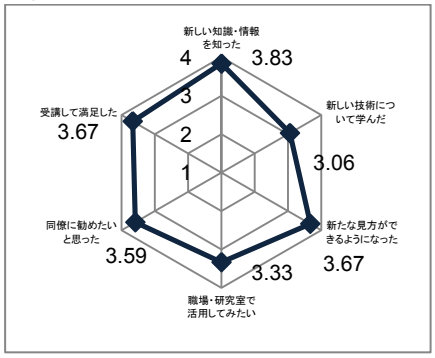
学生支援 基礎編２―大学生への経済支援のあり方と支援―（2012.1.30）
PDP #16　　**小林雅之　先生**

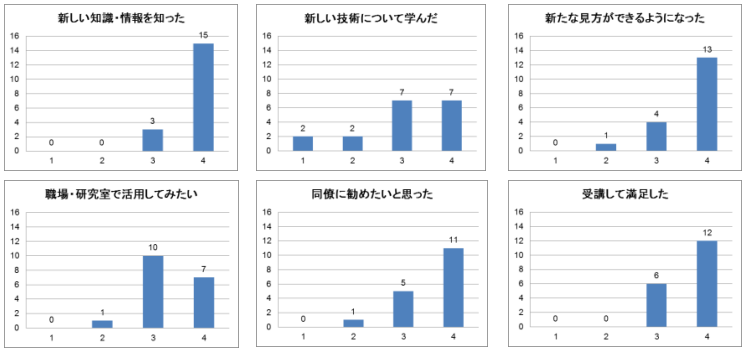
回答者属性(N=18)

【職階】学部生(3)／准教授(1)／講師・助教(1)／職員(7)／寮長(1)
その他(4)／無回答(1)

【性別】男性(14)／女性(3)／無回答(1)
【学校種】東北大学(11)／東北大学外(3)／その他(2)／無回答(2)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- 諸外国の事情がわかってよかった
- 「授業料と奨学金はセット」という考え方
- 教育の公共性と社会的貢献性
- 諸外国との比較（実情、制度面格差）
- 教育費の負担にはいろんな考え方があること
- 世界各国の経済支援制度
- グラントとローンの話
- award. Letter の発送
- 奨学金や授業料免除の意義について新たに理解することができました。また今後の教育費教育についても大変興味深いお話が聞けました
- 学生支援の各国の現状と制度、学生支援の方法、目的、価値観の種類
- 言葉の定義を明確にしてくれた。諸外国の歴史的変遷と、現時点での比較をしてくれた。自分の認識不足を正してくれた
- 高授業料・高奨学金の話で資金の再分配というものがあったが、この考え方は政策を考える上で有用だと思った
- 奨学金について正しい知識を持っていない人が多いということ。やはり問い合わせも多く、知識がないが故に申し込みを辞退する方も多いのできちんと伝えてゆきたいと思いました

3. わかりにくいと思ったこと

- ディスカウントの仕組み
- 国内の奨学金事情（学生支援のあり方）について展望も含めもう少し詳しく説明していただけるとよかったです。時間が短かったので仕方有りませんが
- 各国と日本全体の比較でしたが、日本国内で特有な事例があれば教えていただきたかった
- 少し早かったので、２回位にわけてほしかった
- 日本において学生によって異なる教育費負担戦略を適用することは可能か

4. セミナーに関しての意見・感想

- 学生支援に携わる業務にとても役立つセミナーでした。日本は学費は親まかせ。奨学金も本人が借りている認識が低いと感じていたが、アメリカなどは自立しているなーと思いました。人材育成として給付型を設立してほしい
- 私は地域間格差について関心があります。私自身も「村」出身だということで経験から感じるのは情報の少なさでした。特に高等教育への接続の段階で、今回の小林先生のお話の中にあった奨学金を始め、多くのことを地方の人々はわかっていないと思います。端的に言えば無知です。それが、大学進学率の格差に留まらず、社会の様々な格差を生んでいると私は考えています。情報通信技術の発達に伴って、情報の地域差が少なくなることを望んでいます。本日は貴重なお話を有難う御座いました
- 奨学金の業務に役立てるつもりで参加しましたが、子供を持つ親として他人的にも多いにためになり、面白かったです。ぜひ、一般のかたへも広く開講していただきたいと感じました

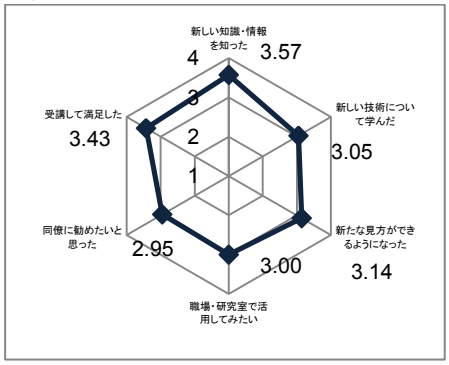
ポートフォリオが開く学生と教師をつなぐ新たな世界（2010.1.6）
PDP #17　　**土持法一・田中 仁・松田岳士 先生**

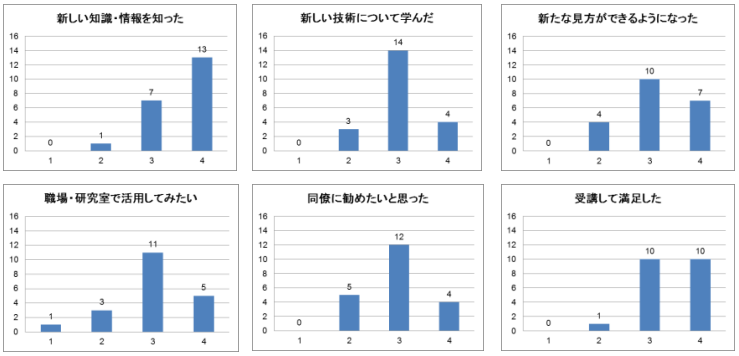
回答者属性(N=21)

【職階】博士課程学生(2)／教授(4)／准教授(2)
講師・助教(5)職員(4)／その他(4)

【性別】男性(18)／女性(3)／無回答(0)
【学校種】東北大(4)／学外(12)／高専(1)／中学校(1)／その他(1)／無回答(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- コンセプトマップについて
- ラーニングポートフォリオの位置づけと評価法
- ポートフォリオに関する体系的な整理ができた
- ラーニングポートフォリオの位置づけと評価法
- 学士力をはかるうえでの可視化の重要性
- 土持先生のポートフォリオの定義
- e ポートフォリオを全学的に導入するノウハウを学べた
- Learning Portfolio が Teaching Portfolio より意義深い点、コンセプトマップ
- ポートフォリオを導入しようと思っても、労力・学生・資金と様々な問題があるということ
- 「ポートフォリオを既存のシステムの中に追加すると良い」という話
- 工学部のポートフォリオの取り組み、昔の紙ベースのであれば自分でもやれそうである
- 各講演、それぞれで新しい情報を知ることが出来ました。ただ、お一人の講演が質疑を含めて３０分というのは短すぎる気がしました。もう少し時間をとっていただき、じっくりと聞かせていただきたい内容でした
- 学生に期末試験の問題を作らせる試み。これは複数の学生に作らせて、複数問の中からいくつかを採用して教員のものと組み合わせて問題を作成するという技法であれば自分もやってみたい
- 土持先生のお話のポートフォリオの理念とその具体的事例、各大学での具体的事例と問題点（課題）

3. わかりにくいと思ったこと
- ポートフォリオの実際
- 「ルーブリック」・・・後で了解した。
- 現場での開発導入過程（誰が主担当となり、スタッフ構成員等）、導入後に発生した問題、新たな課題
- ルーブリックの作成方法、なぜポートフォリオなのか？（「ポートフォリオ」でしか見れないものは何かあるのか？）

4. セミナーに関しての意見・感想
- 時々参加しています。今後ともよろしくおねがいします
- 先生方のお話と資料がわかりやすく、よかったです
- アメリカ的研究法ばかりではないという意見があるが、語句は５年か１０年で同じように成るという指摘の意味は重い。教育法開発の課題は大きいと感じた
- とてもいい内容でした。動画コンテンツになっているのでしたら（作成されるのでしたら）もう一度見てみたいです
- もう少し各講演者の時間が多くてもよかったかと思います
- 教員が教授法を研究することが大切である。その機会がこのような形で与えられ、活用したいと思う。感謝しています

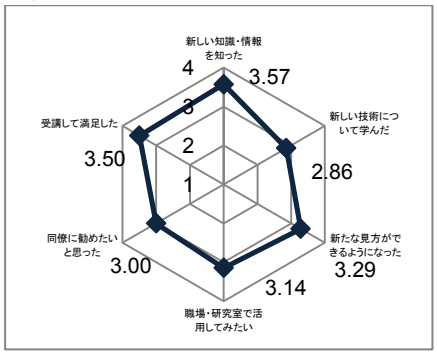
学生支援 応用編１―課外活動の現状と大学教職員の役割―（2011.11.15）
PDP #18　　**永富良一 先生**

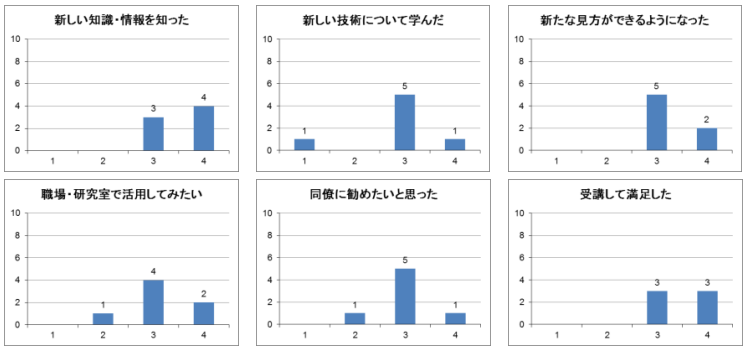
回答者属性(N=7)

【職階】教授(2)／研究員(1)／職員(2)／その他(1)／無回答(1)

【性別】男性(5)／女性(1)／無回答(1)
【学校種】東北大学(5)／東北大学外(0)／無回答(2)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
・危機管理の体制について
・学生に対する対応の仕方と責任のあり方
・危機対応経験談
・事故時の対応について
・課外活動団体の過去の事故での対応について、その当時の経験を聞いて学生とのコミュニケーションを密にとろうと実感した

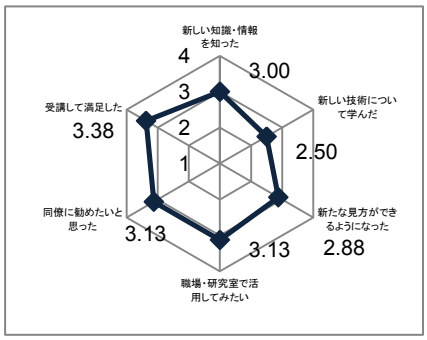
3. わかりにくいと思ったこと　（回答なし）

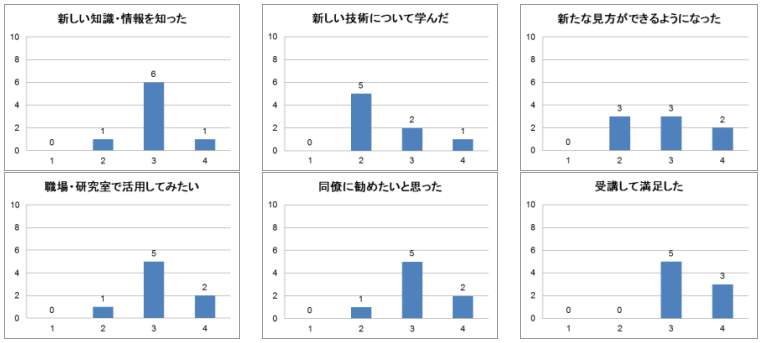
4. セミナーに関しての意見・感想
・大変わかりやすく、聴きやすいセミナーでした。今後もこのようなセミナーを続けていき、相当している業務が近い職員及び教員は出席していくべきだと考えました

学生支援 応用編２―大学教員に求められる異文化理解―（2011.12.19）PDP #19　佐藤勢紀子　先生

回答者属性(N=8)
【職階】准教授(2)／講師・助教(2)／職員(1)／研究員(1)
その他(1)／無回答(1)
【性別】男性(2)／女性(5)／無回答(1)
【学校種】東北大学(5)／東北大学外(2)／その他(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
・留学生の考え方にふれ、参考になった
・留学生（日本人学生）の大学教員（大学教育）に求める教育価値観の違いがあること
・価値観の違う留学生同士のコミュニケーションのとり方と教員の立場を明らかにする・・・
・いろんな事例の一つ一つが役立ちます。このテーマは慣れているつもりでもつい忘れたり見落としたりする観点が多いので、こういう機会につねに意識を高めておきたいトピックでした
・事例を多様な文化背景をもつ学生のグループで検討すること

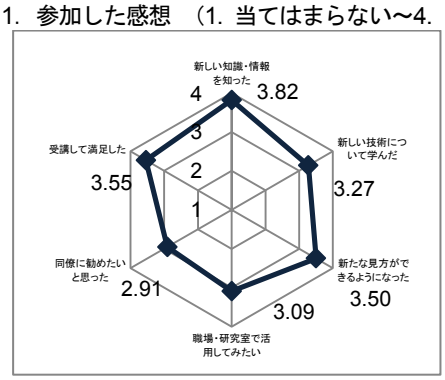
3. わかりにくいと思ったこと
・ワークショップにかける時間が短く、十分な時間までは深められなかったのは残念
・6 の Culture Assimilation(2)のような機会、学生の国の文化によっても違うのではないかと思った
・Culture Assimilation(3)の事例について、やはり「どうすればよかったのか」何の方策も得られないままに終わったことは残念
・内容が多かったので（盛りだくさん）、理解が少し追いつけないところもありました

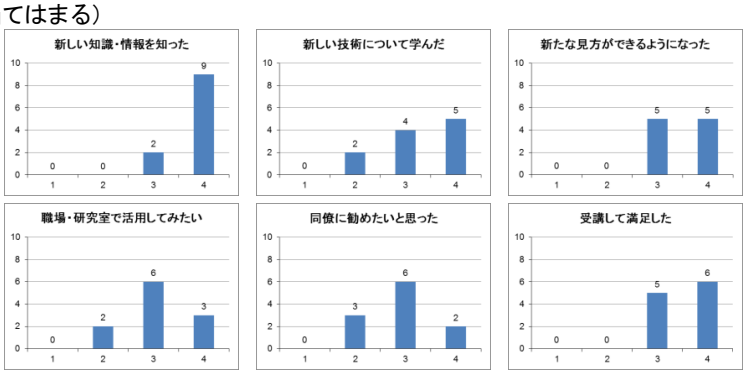
4. セミナーに関しての意見・感想
・留学生が求める教育価値観のちがいは、とても興味をひいた。ただ、もう少し討議に時間があってもよかったかもしれない。また参考にされた業務のデータが古いようにも見れた。もう少し、留学生の生の声を聞きたいと思った

学生支援 応用編３―他者理解、発達障害学生支援を学ぶ―（2011.11.25）PDP #20　田中真理 先生

回答者属性(N=11)
【職階】博士課程学生(1)／准教授(4)／講師・助教(3)／非常勤講師(1)
研究員(1)／職員(1)
【性別】男性(7)／女性(4)
【学校種】東北大学(8)／東北大学外(1)／無回答(2)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
・ASD 障害者への理解と対応方法
・SOS を発信する力をつけてやること

・問題を抱えているかもしれない学生がいるので、いろいろためしてみようと思う
・学生に SOS を発信してもらうように事前に対話が必要と思った
・発達障害について、発達の遅れではなく”歪み”である場合があること
・過去・現在指導した／している学生の中に、発達障害学生が含まれているのではないかと考えると、いろいろ思い当たるフシがあった。個別に対処するのはなかなか大変だと思う
・大学での学生支援はとても大切だと思いました。もっと多くの教員が関心がもてるようになるとよいとも思います
・アスペルガー症候群について最新の知見を得ることができました。大学の取組に関しての現状を理解することができた

3. わかりにくいと思ったこと

・発達障害学生への進路（就労）指導の具体策
・スライドがちょっと見えにくかった
・そもそも発達障害を防ぐ方法は？
・それぞれの疾患について（簡単な説明があるとありがたい）
・はじめてのことと多様性のある問題なのでそこはわかりにくかった

4. セミナーに関しての意見・感想

・複数回にして、実例をもっとだしてもいいのでは
・今後このような学生が増える傾向にあるのは社会システムが悪いのだろうか？
・現実には、発達障害まではいかないが、そのような傾向にあるグレーゾーンの学生がものすごく多くなってきているのでは

シリーズ４．大学のマネジメント

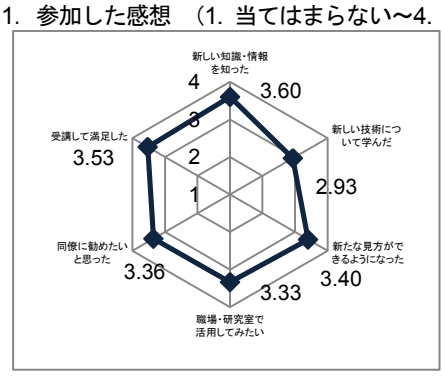
少子化時代の教育マネジメント１―適合入学者へのアプローチ―（2012.2.16）
PDP #21
谷口哲也・鈴木敏明・杉谷祐美子先生

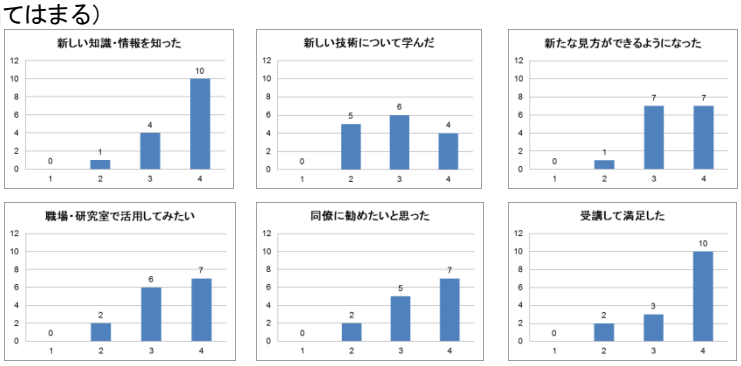
回答者属性(N=15)

【職階】学部生(1)／教授(3)／准教授(4)／講師・助教(3)／職員(3)
その他(1)

【性別】男性(9)／女性(6)／無回答(0)
【学校種】東北大学(5)／東北大学外(9)／その他(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・入試広報の大切さ　高校生の大学選択の現状
・保護者データ
・適合的入学者を得るためには大学の広報活動が重要
・東北大の試み（鈴木先生）
・入試制度についての全体像がわかった
・谷口氏による大学選択の優先項目の変遷
・定員割れに直面している大学の学生募集のあり方
・役に立ち過ぎです
・谷口先生の講演は今後の学生募集の参考になりました
・杉谷先生の初年次教育について特にスチューデントスキルの目標例については、これから初年次ゼミを担当する私にとっては参考となった
・河合塾の取り組みについて概要を知ったこと。河合塾は少子化の中生徒数が減っていない（むしろ微増している）。現時点で正に「高校から大学への橋渡し役」として有効に機能している証左であると考える

3. わかりにくいと思ったこと

・特になし
・わかりやすかったです
・特にない。ただ今回は資料のボリュームが厚いのでもう少し整理されてもよかったかと思う
・初年次教育については学生のレベルもありますので、もう少し勉強しないと効果的な教育は難しいと感じました

4. セミナーに関しての意見・感想

・非常に勉強になりました
・いつも学ぶことが多すぎて困るくらいです
・入試をアドミッションポリシー含むとして留学生獲得にもつなげる方法はないのか
・入試（特にセンター試験）を述べる際教育測定的議論も必要だと思うので是非それに関連するセミナーを実施してほしい
・資料を PDF にしてダウンロードできるように、または紙ではなく電子データで配布をお願いしたい
・大学入試後の学生を取り巻く状況について幅広く学べました

少子化時代の教育マネジメント２―大学の危機管理―（2012.3.2）
PDP #22　　**中島 茂・藤井昌雄　先生**

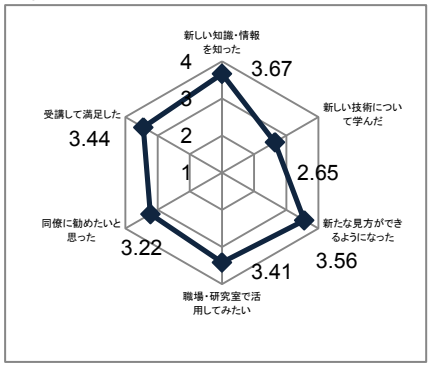
回答者属性(N=18)

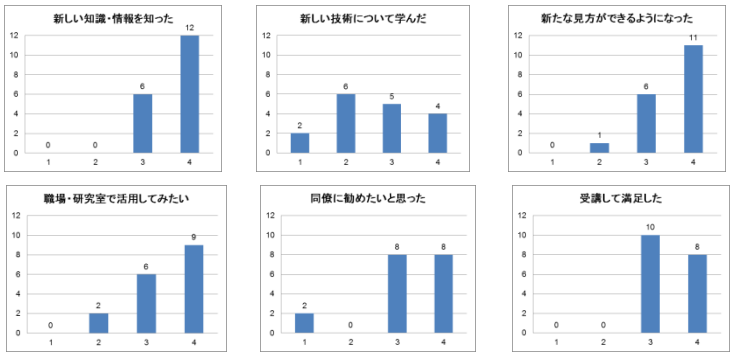
【職階】教授(4)／講師・助教(1)／職員(9)／その他(2)／無回答(2)

【性別】男性(13)／女性(4)／無回答(1)

【学校種】東北大学(10)／東北大学外(5)／その他(2)／無回答(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・リスク管理の考え方
・リスク管理は性悪説
・質疑応答での回答
・リスク管理の重要さを実感しました
・謝罪のタイミング　組織の管理体制の重要さ
・両公演とも大変役に立った。研究室、部活動共にすぐに反映させたい
・運動部の部長【顧問）に関する部分　USB メモリの扱いに関する部分
・「リスクマネジメントはイマジネーション」は名言（中島先生）　ネット社会の恐ろしさ　情報は到達主義　ダメージコントロール　リスクマップ　安心×公正　マニュアルのあり方（×現場の判断）大学と保険の総合的理解（藤井昌雄氏）
・リスクの予測の仕方特に１人ですべての業務を行うと不正やミスのリスクが高くなる。　使用責任が発生するもののとしないものの区分け
・リスクマネジメントの意識に対してイマジネーションが大切なこと　情報伝達の確認重要性など
・入試関係のパンフレットに学生の顔写真を記載する事はあまり気にしていなかったがこのようなことまで神経を使わなければならないことを教わった
・リスクマネジメントとは「知る」「避ける」「ダメージコントロール」であるということ　研修の意義と組織の責任のあり方について

3. わかりにくいと思ったこと

・特になし
・保険適応の解釈

4. セミナーに関しての意見・感想

・実例を含めた説明が多く大変参考になりました
・大変有意義なセミナーであっという間の４時間でした。大学のリスクはある意味で大学生協のリスクを含んでいます。同じ環境で仕事をさせていただいている立場からも、大学の皆様と同じ目線で危機管理について学ばせて頂く絶好の機会となりました。個人的にも大変勉強になりました。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いします
・差別であると受け取られ得る男女区別という制度対策はあるか？？という質問だったと思う(正しいか？という質問ではなかったと思う)

シリーズ５．　大学のカリキュラム

グローバル時代の大学マネジメントと質保証―（2012.1.24）
PDP #23

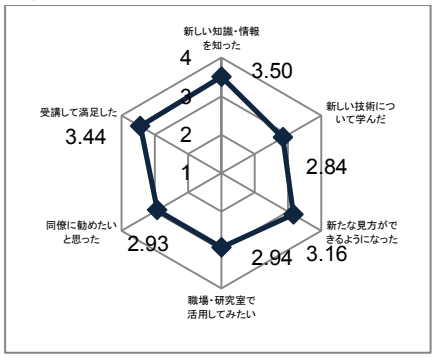
回答者属性(N=32)

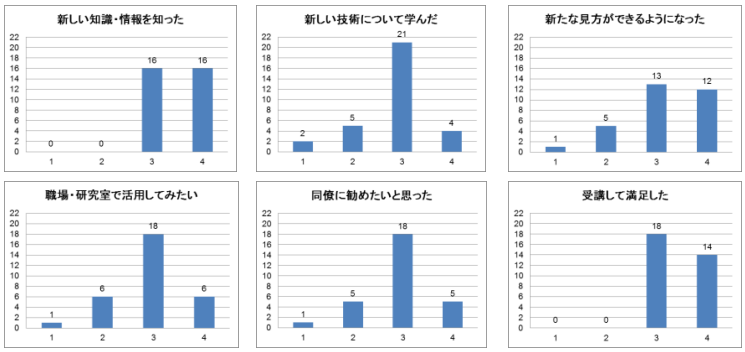
【職階】教授(7)／准教授(5)／講師・助教(3)／管理職教員(1)／職員(14)　その他(2)

【性別】男性(24)／女性(8)／無回答(0)

【学校種】東北大学(1)／東北大学外(25)／短大(1)／その他(5)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- 国際的な質保証の考え方
- 質評価のためにデータを利用・活用することの意味
- データの活用と大学の質文化をどう捉えるか参考になった
- データのやりとり　・データをツール（コミュニケーション）すること
- 質保証が推進される文脈に共有可能な部分と Local な部分の 2 つがあること
- データにせよ基準にせよ、形式的に使うのではなく、状況を分析し、検討し、改善するためのきっかけとなる道具として活用することの特性
- 質の保証を通した質の文化の形成。Maragenet 様の考え方に立脚した議論になっていた
- 大場先生からの質問とコメントが発表内容を補う知識を提供して下さり助かった。国により（大学により）IR に活用するデータが異なる（と思われた）こと。データによって人を説得することはできず、議論の材料（ツール）であるということ
- 大場先生のまとめは特によかった。文脈の違いも理解した上で何が日本にとって適しているのか、極めて納得できるものでした
- 大学の教育マネジメントの考え方と実際、IR の実例について大変勉強になった。他方、retaiution, transfer や major の変更があまりなく、入試後は変化がほとんどない日本の大学の現状には合わないように感じた
- 最後の 100%ではないが、いまある既存のものを用いてデータやツールを開発し、そこを出発点にディスカッションを始めてもらいたいという趣旨のやりとりが、とても納得できた。質保証というとどうしても完璧なものを目指してしまいがちだが、トライ&エラーでまずやってみることも必要なのだと思った
- 3 カ国、地域からのご報告があり、現状と課題の国際的状況がよくわかってよかった。また IR やデータの話と、Culture の話とバランスがとれた構成でわかりやすかった
- 大学のマネジメントに係る IR によるデータ活用の取り組み、とりわけ、トップマネージャの意思決定利用に係るデータの見せ方の技法（Dashboard…）
- 質の保証に関する先進的な取り組みを知ることが出来、自分が所属している大学との比較材料がえられたこと
- Date 利用、IR についての認識が？たになった。データ活用に目を向けがちであるが、繰り返し言われた。Date は議論のはじめるためのひとつの証拠であるという点が印象的であった。「データ＝数値」という拒否感が大きいが、インパクトはその分大きい。数値の上下にとらわれない IR 意識、文化の向上が必要と感じた。それが質文化につながる。おそらく現場、いかに議論すらできない環境であるかということも
- 諸外国の状況を理解した上で我が国の状況に合わせて考察するのが難しいがやりがいがあると思う
- 教育の質保証のためには様々なアプローチの仕方、考え方があることがわかった
- 上層部が意思決定するにあたって、わかりやすい健康診断が非常に有益であると思いました
- Evaluate system の相互評価についてデータをどのように使いこなすかがポイントか
- ロングビーチでの分析方法及びバラート大学のヘルスチェックというデータ分析をまとめての議論の引き起こし方

3. わかりにくいと思ったこと

- 日本との違いについて補足説明があればよかった
- Jensen 氏の講演内容と資料が一致していなかった
- Quality Culture はわかったが、そもそも"Quality"が何かは、よくわからなかった
- データを用いた具体的な改善手続き。評価活動に在説する学生がどのように関わっているか。（回答、評価の信頼性、妥当性、回答方法、等）（フィードバック通じたメタ認知と行動改善）
- Jensen 先生の話がよくわからなかった。プロセスなどの話がなかったし・・・残念
- Henrik Toft Jensen 先生の内容は、もう少し焦点をしぼって頂いた方が理解が深まったような印象があります。先生が提起したいであろう論点を読み取ることが出来ませんでした
- "Quality"の定義も、各国の状況も異なる中、議論が勧められるので、理解するのに少々手間取った。発言の背景にある各国の HE の状況をもって学びたい
- ヨーロッパにおける質保証に係るプレゼンテーション（やや概念的にあったように思えた）→大学の職員にとっては。。。
- ヘルスチェックにおける評価単位。単元？コース？利用？教員個人？オーストラリアのカリキュラムを知らないので、情報のくくり方がわからなかった。通訳の人も迷っていた
- データ収集の方法と分析手法に関する説明・情報が少なかったため、もう少し説明が必要では？

・日本における教育の質保証の重要性（上からの要請ではなく、社会からの需要）が他国に比べてどうなのかが自分自身勉強不足でよくわかっていない（大きなコストをかけてデータ収集、分析し、改善につなげることに経営陣、現場、ステークホルダー等がメリットを感じているのか等）どの程度力を入れ、どの程度の分析をするべきなのか個々の大学の事情もあると思うが難しい
・質保証についての観念論が多く、なかなかしっくりと理解できなかった。ツールの説明は大変面白く、活用できるように感じた

4. セミナーに関しての意見・感想

・各講演、焦点がまとまり、有益なセミナーであったように思います
・適度な休憩（コーヒー付）と同時通訳といったサポート体制には感謝しています。多様かつテーマに合致したスピーカーをそろえられるセンターの力業に敬意を表すとともに、今後もこうした企画を計画してください
・外国の大学とのダブルディグリーにおける質の保証。今後のジョイントディグリーに向けての展望など
・他国の先鋭的な取り組みの要点を生で拝聴でき、非常に勉強になりました。講演に対してコメントを付し、最後に討議するという流れも話が掘り下げられることになってよかったです。他国では、教育の質保証について全学的にある程度の意識が根付いていることに驚きました。多くの日本の大学の現場では、教育の質保証に対する意識がまだ根付いておらず、上層部、現場、担当者の意識のズレが大きいと感じています。現場が質保証について何らかのメリットを感じるような仕組みが構築されない限り、当面この意識のズレは解消されないように思います
・教育の質保証そのものは重要と思うが、そのためのシステム構築やメンテナンス作業を考えると、大学単独の取り組みではなく、ある程度、広域連携での取り組みが必要であるように感じる。現在実施されているアンケートも、単に評価のために実施されている感が強く、実効性の高いアンケート及び分析手法は今後の大きな課題では？
・質の高いセミナーだと思いました。国際比較によるアプローチも大変参考になりました。有難う御座いました
・大学マネジメントにおける重要なテーマですので、これを基に内容を充実させ出版してほしい
・東北でなかなかこのような機会がないので、是非続けてほしい
・他大学で行われる同一演者の発表は内容が同じなのか、違うのか
・教育マネジメントというよりも教育管理あるいは教育計測の議論になりがちになっていたことがきになりました。教育の質保証に関する場を設けて頂きました。貴センターに感謝いたします

大学における初修外国語とは（2010.10.13）　立石慎治・杉浦謙介・阿部宏　志柿光浩・上野稔弘先生
PDP #25

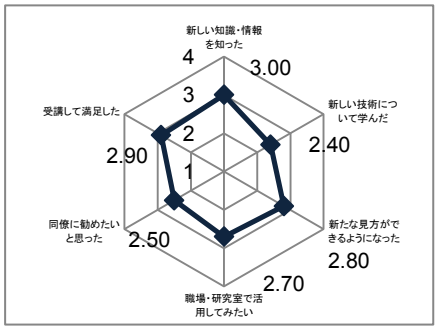
回答者属性(N=10)

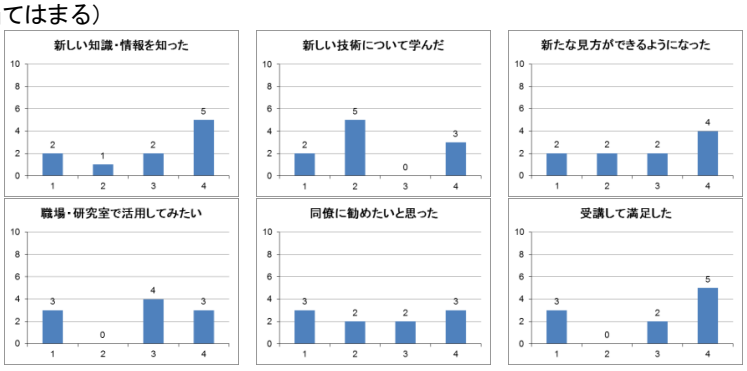
【職階】教授(1)／講師・助教(4)／非常勤講師(1)無回答(4)

【性別】男性(2)／女性(3)／無回答(5)

【学校種】東北大(4)／学外(1)／無回答(5)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・志柿先生の提言
・第二外国語教育の多様性を認識できたこと
・外国語教育に特化したシンポジウムは機会がなかなかないのでありがたかったです
・１．内容は大変わかりやすい。２．上野先生は中国語教育の実態について詳しく把握しているとつくづく感じており、発言も素晴らしかったです。３．今後の授業改善に特に教員側の対応についてたいへん考えさせられました
・１．教材の重要さ。２．モチベーション維持。３．限られた時間でどのようによい授業ができるか。刺激的な視点を教えていただいた
・異なる外国語教育の違いがより明確になりました。そして共通課題を見つけたような気がします。

3. わかりにくいと思ったこと

・開催趣旨
・調査結果を踏まえて講義を展開したいなら、まず調査を科学的に設計し、実施すべきである。なんの仮説もなしで設計した調査によって得たデータはただのデータであり、なんの意味もない。パフォーマンス以外
・資料は読みにくい。特にグラフ、図表等ははっきり読めない(見難い、色がついていないから)
・先生方からの指摘がありましたが、アンケートの結果が必ずしも学生の実態を反映していないとおもいました。アンケートを提出する学生はそもそも外国語教育に意見をもつ学生だと思います。アンケートを提出しなかった学生の意見も聞きたかったです
・悪く言えば、いつもどうどうめぐりの議論になる部分もあるかもしれない。しかし、それもきわめて大事だと思う

4. セミナーに関しての意見・感想

・ありがとうございます
・平日開催だと授業と重なる場合があり、参加しにくい。土日あるいは平日１８：００以降にできないか？
・初修外国語について：学生が CD,DVD、参考書を使って自主学習できる場所が学内にあるといいと思う
・今回のセミナーはテーマが広範すぎた気がします。「モチベーションを維持させるためには」「第二外国語で扱う”文化”とは何か」といったテーマでも良いと思います

単独セミナー

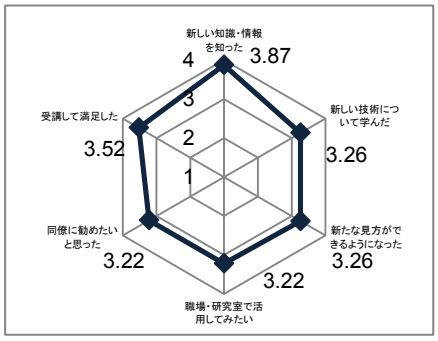
職員向けシンポジウム＆ワークショップ
大学の国際化―快適・安心なキャンパスを考える―（2011.9.9） **岡田昭人・前田理佳子・水野 義道 先生**
PDP #26

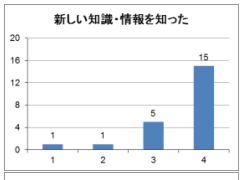
回答者属性(N=23)

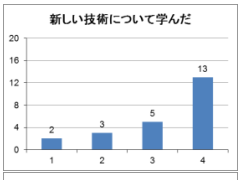
【職階】博士課程学生(1)／教授(3)／職員(15)／その他(3)／無回答(1)

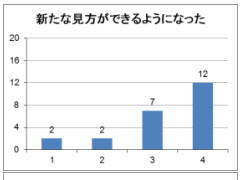
【性別】男性(10)／女性(11)／無回答(2)
【学校種】東北大学(10)／東北大学外(11)／無回答(2)

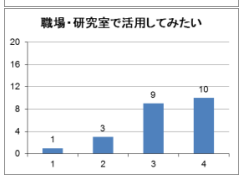
1. 参加した感想 （1. 当てはまらない～4. 当てはまる）

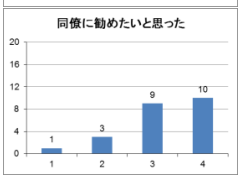


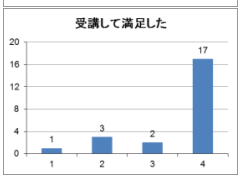












2. 特に役に立ちそうと思ったこと

- 全部
- 異文化の理解の話
- 留学生教育の課題
- 簡単な日本語に言い換えるという発想
- やさしい日本語について考える
- やさしい日本語、いいかえや、否定文を使わないこと、やってみる。また、異文化コミュニケーションはこれからますます留学生がはいってくるのでどんどん学んでいきたいと思った。恐れず、自分も外に出ていきたいと思う
- 日本語を留学生にわかりやすく説明する講座。前田先生の減？のための「やさしい日本語」
- はいコンテキスト、ローコンテキスト→学生が全員必ず留学するので・・・文章：相手のために書く文章の大切さ、自己満足にならないことの意義を学ばせていただきました
- 異文化コミュニケーション―国/人種の理解をさらに行うこと／やさしい日本語の大切さ
- やさしい日本語です。さっそく仕事の対応、お知らせ、サイン等で役立たせたいと思います
- 今までは難しい漢字にルビを振って掲示等をしていたが、以後「やさしい日本語」を使用したい
- 留学生とのコミュニケーションで、言語以外の手段に関する視点はよく考えてみたい
- ジェスチャー、目の合わせ方などなど。国にとって、捉え方、意味が違うこと
- 留学生との交流でいろいろと気付けなければならないことがよくわかりました
- 2つの講義を聞いて今後の窓口業務に生かしたいと思いました
- やさしい日本語を心がけていきます／相槌には気をつけます
- 留学生に対する心構え(英語で話そうとしなくても良いということ)
- やさしい日本語は日常業務や緊急時にも活用できると思った
- 多言語での「やさしい」コミュニケーションのセンスを磨く必要性
- ジェスチャー、アイコンタクトなどによる各国の反応の違い、やさしい日本語と口語の違い

3. わかりにくいと思ったこと

- 万人に通じる「やさしい日本語」なんですか？
- 前田講師の長々しい話、説明
- 余震など外せないキーワードの判定が難しい
- どこまでをステレオタイプと呼び、特徴と区別するのか
- 優しい日本語といっても「これは大事」という言葉は残す、という観点が難しい
- わかりやすい日本語と世界共通語としての英語のポジショニング
- やさしい日本語の例文が、見せて示すものか、聴かせるものなのかがわかりにくかった
- やさしい日本語の基準がただ検定試験のレベルでいいかと思いました
- わかりにくくはなかったのですが、やさしい日本語にするという作業が予想よりも難しかったです
- 具体的にその状況の中に入らなければわからない、ということ

4. 留学生を含む学生対応に関して、現在悩んでいること

- 留学生への更なる支援の充実
- 今は教育から離れたけど、時間や期限にルーズな人はどうすればいいのか、手続きなどが遅れるので困る。→容認すると他の学生にも迷惑、いずれ日本人と留学生も一緒にしていくなら、そのあたりについても検討必要では？
- 学生対応に関して自分が思うほど十分に時間を取れないこと
- 学内の他部署に日本語のわからない留学生が出向くとほぼ毎回対応や通訳が必要となる。学内でももう少し職員が英語に対して積極的になる機会が出来れば良いと思っていたが、むしろ積極的にやさしい日本語を活用することの意義があることがわかった
- 果たして満足のいく大学生活を楽しんで帰ってくれているか否か、満足度調査にはあらわれない本音について知りたい
- スタッフの言葉の問題、スタッフ全員が英語を話せるわけではないし、留学生も日本語・英語とも不得手の人がいる。全体に神経質な学生がふえているような気がする。特に音について
- 英語(日本語以外の言語)を話すスタッフが少ない
- 現場対応はよく学生のことを理解しているが、大学内での上司からの指示が逆に現場職員の事務量を増やす結果になっている。上の方たちがよく現場のことをわかっていない
- 学費の納入が困難になっている留学生が数名いる

5. セミナーに関しての意見・感想

・とても意義のあるセミナーでした
・留学生の方が同席していただき、大変助けられました
・とても新鮮な体験ができました。ありがとうございます。運営のスタッフの皆様も大変だったことと思います。本学でも１１月にグローバル化の研修会を開催するさいの参考になりました。ありがとうございます
・少人数のセミナーだったのでとても楽しく、ためになり、また有意義にすごすことができました。東北大学で震災に関すること、学生支援、留学生支援についてのセミナーがあったことが、とても意味があったと思います。秋田は隣県ですが、東北の皆さんの復興を心より願っています。今後も東北のリーダー的役割を東北大の皆さんには期待します。私達もリーダーシップを発揮していきます
・もっと多くの受講者がいればよかったと思う。周知方法についてメール以外にも郵送などがあっても良いと感じた
・やさしい日本語の使い方が災害時に限ってレクチャーがあったのは残念。むしろ毎日、留学生とのコミュニケーションをする上での「やさしい日本語」の使い方の方が大学にとっては応用できる部分が多いと思われる
・ワークショップで留学生？の方と接し、アドバイスや雑談できたことも勉強になった。ワークショップで得たことは大きいと思う
・セミナーのタイトル、内容、ターゲットの一貫性、分かりやすさを忘れないでほしい
・実際の現場対応職員には優しすぎたかもしれませんが、特に留学生課の職員は参加すべきと思いました。事実、職員さんたちは興味がないのか、仕事量が多いのか、参加できずといった結果です
・HP 等に掲載されたポスターのみでは今セミナーの内容が非常に掴みづらかった。２人目の講師のセミナー内容のクオリティが低い

国際シンポジウム
大学教授資格～世界の動向～（2011.9.16）
PDP #27

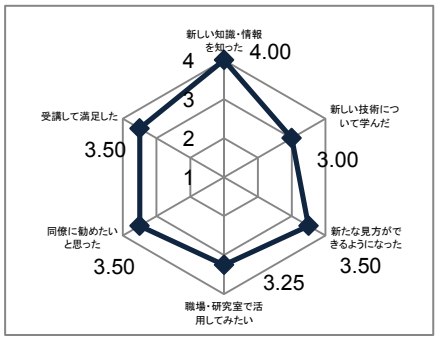
加藤かおり・杉本和弘・土持ゲーリー法一・斉藤泰雄・児玉善仁
大場 淳・木戸 裕・田中正弘・渡邊あや・叶 林・金 美蘭先生

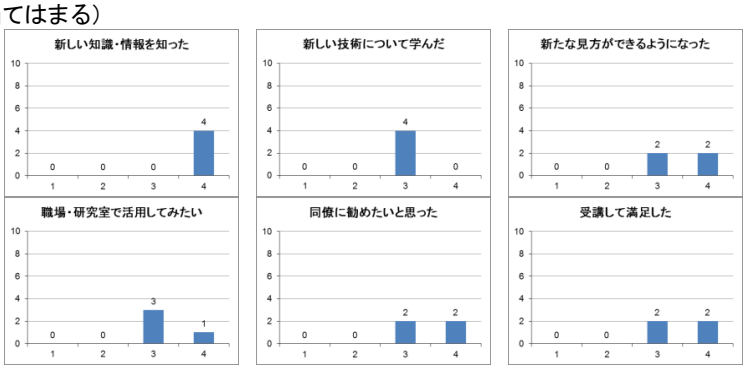
回答者属性(N=4)

【職階】博士課程学生(1)／教授(2)／研究員(1)

【性別】男性(1)／女性(3)／無回答(0)
【学校種】東北大学(1)／東北大学外(2)／研究所(1)／無回答(0)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・各国の事例を通じて比較研究の必要さを強く感じた
・アングロサクソン中心に世界各国において大学教員の能力として教育(教授能力)(ティーチング)が重要視されていくように思われたこと。このような傾向を把握していくことは重要であるように思いました

3. わかりにくいと思ったこと

・アメリカの教授資格についての報告がかけていたのが、残念でした。そのため、アメリカの影響についてがよくわかりませんでした

4. セミナーに関しての意見・感想

（記入無し）

よりよい論文を書くために（2011.12.1-22）
PDP #29　　**佐藤勢紀子 先生**

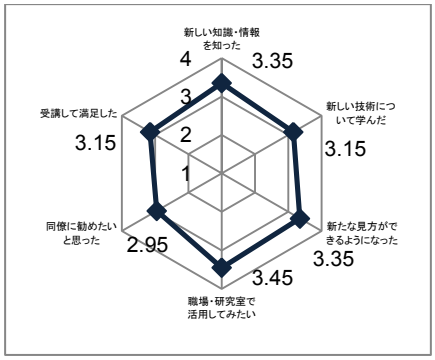
回答者属性(N=15)

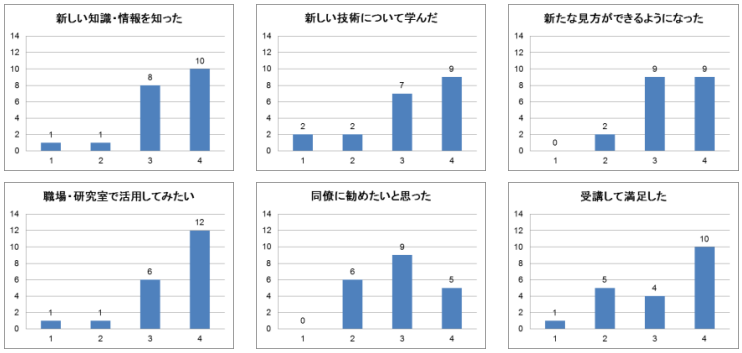
【職階】博士課程学生(13)／その他(1)／無回答(1)

【性別】男性(6)／女性(6)／無回答(3)

【学校種】東北大学(12)／東北大学外(0)／無回答(3)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- 先行の言及する方法と引用の方法
- 先行研究の引用の仕方
- 正しい論文、わかりやすい論文とは
- 文献の引用法、メタ言語
- 先行研究の取り上げ方について
- 先行研究の整理
- メタ言語、引用の方法など
- わかりやすい論文の条件
- 論文の論点を提示する方法
- 引用の方法
- 先行研究の取り上げ方について
- 分野横断的な手法、留意的について理解が深まった
- 引用に関する部分だと思います
- メタ言語について、先行研究言及の目的
- 論文の文章構成に対する分析的な視点
- 序論の書き方、本論の展開についてはもっと勉強したい
- 自分の論文を作る時、どのようなプロセスに沿って、そしてどの点に注意して作るかなどがわかるようになりました
- わかりやすい論文の条件に関する話、及びいい引用・わかりにくい引用についての検討の部分が特に役に立ちそうと思いました
- これまで考えたことがない専門的な内容で、新しい考え方を学ばせて頂きました

3. わかりにくいと思ったこと
- 論の展開の仕方のメタ言語表現方法
- 分野が違うと、理解が難しい点
- いろいろの論点提示の形
- 先行研究言及の目的
- メタ言語をどのように上手に使えるかは実際論文を書く際、難しいと思いました
- 全体的にわかりやすかったですが、時間の関係上、説明が少ししきれなかった点などがあったように感じました
- 授業内容と授業方法が必ずしも整合しているとは思えず、どのような姿勢で授業に望めば良いのか戸惑いました

4. セミナーに関しての意見・感想
- 大変よかった。内容はもちろん、教育法についても勉強になりました
- とても素晴らしかった授業でした・自分にとしては大変役立つ講義です。まだ、機会があれば、是非もう一度参加したいと思います
- もう少し回数を増やすか、時間を増やして内容を濃くしてください。それだけする価値のあるセミナーだと思います
- ４回シリーズでは処理できないボリュームであった。やろうとしていることが未消化なまま進行し、受講者の理解が深まっていないような印象を受けました。テーマをもっとフォーカスし、受講者のターゲットも明確にできれば大変に魅力的なセミナーになると感じます

高等教育国際セミナー
豪州高等教育圏における質保証の動向（1999～2011 年）（2011.10.28）
Don F. Westerheijden　先生

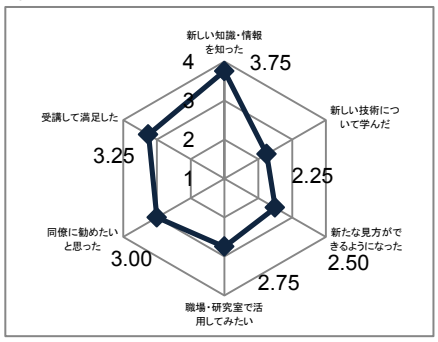
回答者属性(N=4)

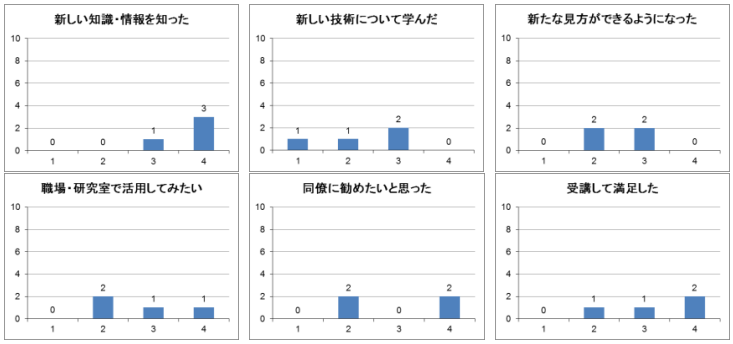
【職階】博士課程学生(1)／職員(1)／無回答(1)

【性別】男性(1)／女性(2)／無回答(1)

【学校種】東北大学(2)／東北大学外(1)／無回答(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- 国際的な学術交流には、質保証と信頼が大切だということです。また、制度的なことよりも、学生の学習内容に反映されなければならないということも考えさせられました
- 教員をいかに政策(トップダウンの)に取り込むのが難しいかということが日本だけの問題ではないことがわかった
- 海外における質保証に関する動きを理解できたこと。なかなか文献以外から知る機会がないので、生のプレゼンテーションで聞けたことは良かったと思います
- ヨーロッパで高等教育を統一しようという動きがある。その効果については今後、現場の教育や研究者と協力しながらすすめる必要がある

3. わかりにくいと思ったこと
- 通訳をしてくださったので大変助かりました
- なぜヨーロッパの動きを学ぶ必要があるか
- 英語ができないので、ヴェステルハイデン先生が説明されていることが理解できず、申し訳なく思いました。杉本先生には、短い時間の中でエッセンスをとらえて通訳していただき、本当に感謝しています
- 難しいことがたくさんあって、すべてを理解するのは無理でした。事前にダウンロードできるものがあることをしっていたらもしかしたら読んでいたかもしれません

4. セミナーに関しての意見・感想
- 一人英語ができず、でも色々としゃしゃりでて質問などしてしまい、申し訳ありませんでした。でも暖かく輪に迎えてご説明下さり、感謝しております。本当にありがとうございました
- 高等教育システムの統一はヨーロッパ特有の問題だと思う。質の保証や承認に特化した話をアメリカやオーストラリアと比較しながら学びたかった

大学職員という職業 Part1（文系）（2011.10.25）　羽田貴史 先生

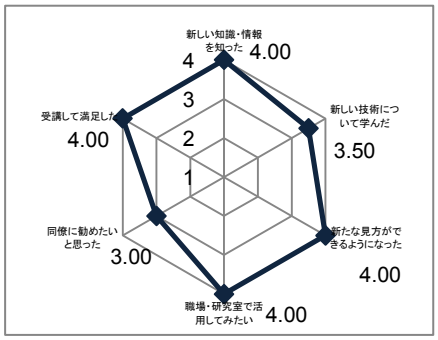
回答者属性(N=2)

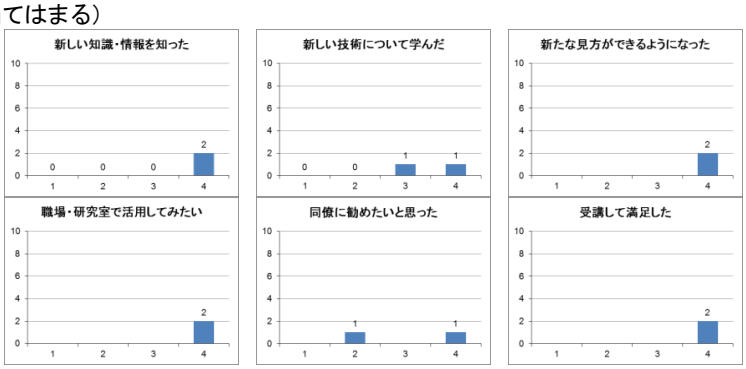
【職階】学部生(1)／職員(1)

【性別】男性(2)／女性(0)

【学校種】東北大学(1)／東北大学外(1)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- 羽田先生の体験談

3. わかりにくいと思ったこと（記入無し）

4. セミナーに関しての意見・感想（記入無し）

大学教員という職業 Part2（理系）（2011.11.15）　関根　勉 先生

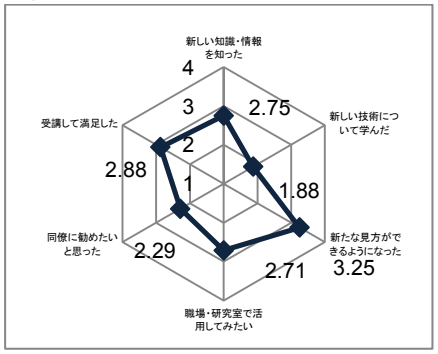
回答者属性(N=8)

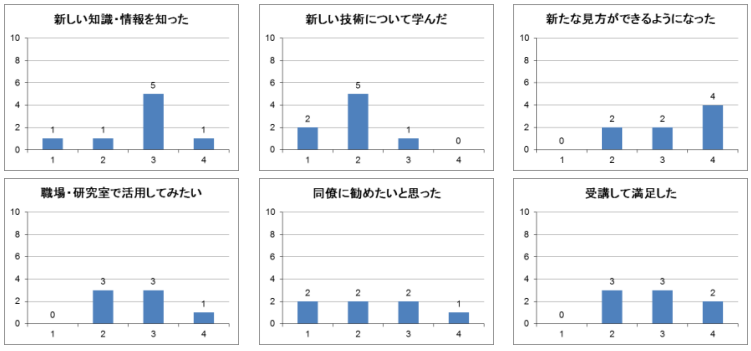
【職階】学部生(3)／博士課程学生(3)／研究員(1)／その他(1)

【性別】男性(5)／女性(2)

【学校種】東北大学(7)／東北大学外(1)／無回答(0)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
・放射線量の推移
・大学という場の特徴と重要な中心的に考えなければいけない点がクリアになった
・国際的な視点を持つべき。研究室というグループにおける各立場の違い、関係
・人体中の Cs137 の量の変化。大学教員になるには Dr に進む必要があること。自分を作りに外国に行くこと
・体内の放射能や原爆実験時の放射能のデータは現在の数字の比較として参考になった

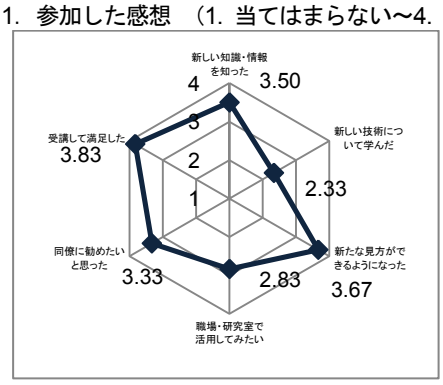
3. わかりにくいと思ったこと
・大学教員になる課程におけるリスク。スライドですっとばした部分重要だと思うんですけど

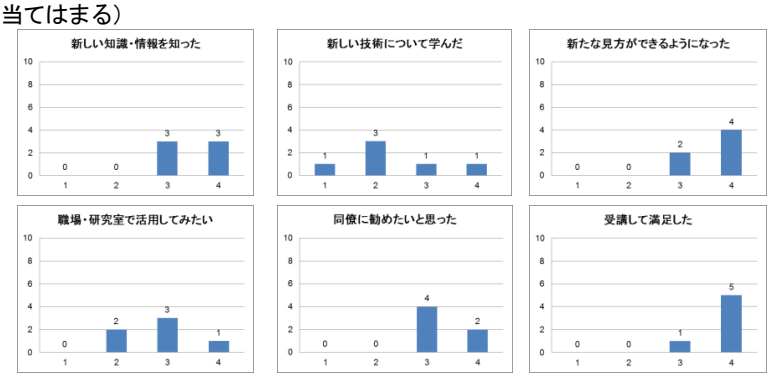
4. セミナーに関しての意見・感想
・受講者の対象設定があいまい　・もっと専門的(理系寄り)な話でも良かったと思う
・学部生と同じ講義ではなく PD プログラム用に講義を組んで欲しい
・学部 1 年生を対象としたものとは知らず、若干肩身が狭かった。自分のキャリアを考える上で役に立つような内容ではなかったが、学部生にいかに研究の動機を伝えるか考える上では参考になった
・心が豊かになる、生活が豊かになることの大切さとこのようなレベルで行動をおこしていくことが大事であることが共感した

第 13 回東北大学高等教育講演会
産学連携と大学のあり方～象牙の塔から社会のセンターへ～（2011.12.16）　上山隆大・北川文美　先生

回答者属性(N=6)
【職階】教授(2)／研究部長(1)／室長(1)／職員(1)／研究員(1)
【性別】男性(5)／女性(1)／無回答(0)
【学校種】東北大学(5)／東北大学外(1)／無回答(0)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
・国立大学法人大学の立ち位置として変えてはいけない公共性をどんどん変えていくべきことを考えさせられた
・大学におけるパテント取得の意義を再考するためにアメリカの事例・考え方が参考になった。「公共性」を大学が、又は大学に構成員がどの程度意識しているのか、また、議論しているのか、大学のレベルなども踏まえて考えなおす必要があると感じる
・産学連携・公共性などのあるべき姿を立ち止まって考えることが、業務進めるうえで大切だと感じました
・どちらの講演者のお話も、新しい情報・見方がもりこまれていてよかった
・「産学連携」の捉え方、米国、欧州での現状

3. わかりにくいと思ったこと
・ヨーロッパ関連はわかりにくかった　・専門用語が多く、理解出来ないことがあった　・PDF を希望します
・もっとじっくりお話を伺いたかったです
・ヨーロッパの事例の代表として、イギリス、しかも、Ox, bridge の例でよかったのか、わかりにくい。政治的な利益相反の事例は必要だったのか、疑問。大きく考えると理解はできるが、アメリカの事例で少し明瞭になったか？

4. セミナーに関しての意見・感想
・大学の業務に関連する今回のようなテーマの場合、配信し、案内を職員にしていただくと有効と考えます
・講演者のご都合かと思うが、午前から午後早い時間までの講演会は、外部者として出席しにくいところがある。ちょっと残念
・大変興味深い内容にもかかわらず、参加者がそれほど多くなかったのが残念に思います。広報面等に工夫をされて、一流の研究者の貴重な講演を学内に広く伝播してほしいと思います

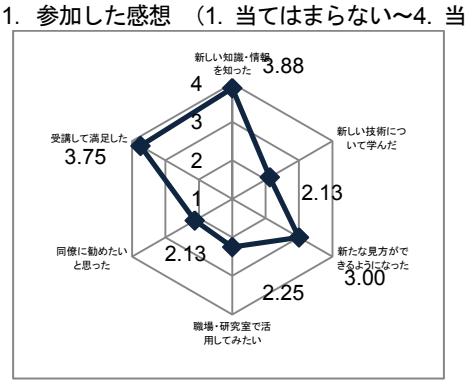
植民地時代の文化と教育（Ⅱ）―朝鮮と台湾における植民地大学―（2011.12.17）
PDP #31

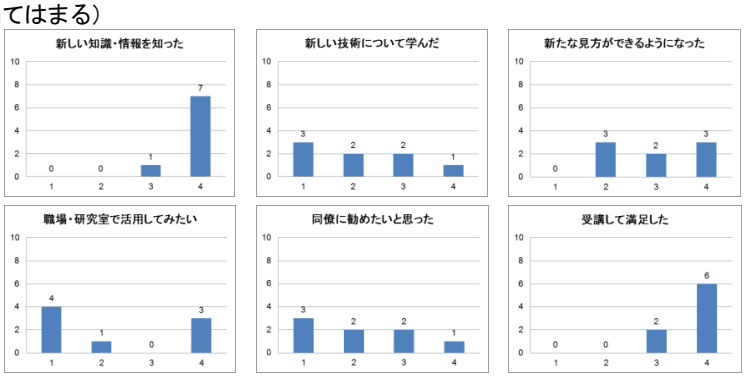
回答者属性(N=8)

【職階】博士課程学生(3)／准教授(1)／講師・助教(3)／職員(1)　　【性別】男性(1)／女性(6)／無回答(1)

【学校種】東北大学(2)／東北大学外(4)／無回答(2)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・シンポジストの方法論　　・台湾・韓国の研究動向、”帝国大学”への日中韓の向き合い方

・植民地台湾における官僚と一般台湾庶民の位置づけ、及びお互いの関係

・白水瑞さんの発表、駒込さんの発表は「植民性克服」を受講する者にも直接問う内容で新鮮だった。「運動としての学問」「制度としての学問」の定義：興味深い

・「運動としての学問」という見方、韓国における意味と日本における意味が異なるようにも感じますが

・文献に現れていた、台湾・韓国の帝国大学に対する評価が、そのとおりであったことが確認できた。日本人が見た植民地の帝大と、植民地とされた国民から見た帝大に対する見方・評価が異なっているのは当然と思われるが、発展的に共通の価値が見えてこないかという思いがある

・植民地官僚養成の教育が整備されたのが台湾、韓国を領有してからずっと後だったということ

3. わかりにくいと思ったこと

・やはり言語

・コメントから全体討論の時に、上記「植民性克服」の視点を確認した上での討論に入っていったら、もう少しフォーカスがしぼられたのでは

・日本語で話される部分と通訳をする部分をわけて、話してもらえば、話される方も聞く方もよかったのではないかと思いました

・日中戦争が始まって、時局が切迫した時の軍部と植民地帝大との関係が聞きたかった。特に、１９４１年の京城帝大の理工学部、１９４３年の台北帝大の工学部の設置とその役割について知りたいと思う。内地の帝大工学部と同様に兵器開発に何らかの功績があったのか。また戦後の朝鮮、台湾の発展において帝大時代の工学部の遺産はどういかされたのか

4. セミナーに関しての意見・感想

・海外からの研究者をよんだ意味が大いにあったシンポだったと思う

・同じ、共同研究に、支援留学の博士課程後期の延世大学の学生が１０月から一緒におり、週に１回程度日韓間のいろいろな問題について話す機会をもっていて、植民地時代の経済的評価など（漠江の奇跡といわれる経済発展についての植民地時代のインフラ整備と戦後賠償について）について、全く考えが異なり、韓国においては教育も含めてインフラ整備について全く評価しないという考えが主流としり、驚きました。植民地時代の評価がその精算（戦後賠償-台湾における「光華寧事件」や韓国の慰安婦問題の法的見解について、国際法の人達と議論したことがありますが、そうしたことを考える意味でも両国の事情（考え方）を知っておくことは重要だと思い、今回のセミナーはよい機会だったと思います。台北やソウルに行った所、帝大の建物を見に行ったこと、京城大は、大学？？？物部）もあり、歴史的事実は事実として発展的な交流、建設的な研究（考え方）へと広がって欲しいと思いました

・院生、新任を「絶対お薦め」の対象としているシンポジウムなのに、年齢がずいぶんと上に偏っている。事前の案内のやり方を検討しなおしたほうがよいのではないか

国際セミナー
豪州における学生の需要に基づく高等教育システムの導入（2012.1.25）

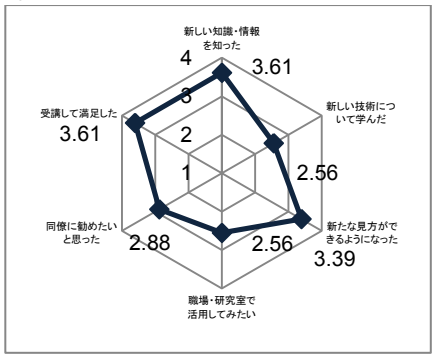
Richard James 先生

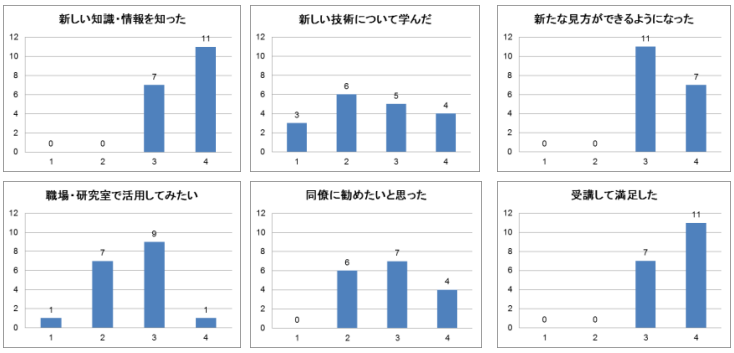
回答者属性(N=18)

【職階】博士課程学生(1)／教授(3)／准教授(5)／講師・助教(1)
職員(6)／その他(1)／無回答(1)

【性別】男性(9)／女性(6)／無回答(3)
【学校種】東北大学(3)／東北大学外(10)／その他(3)／無回答(2)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- オーストラリアの高等教育のトレンド
- 国による差異
- メルボルンモデルの内容、メルボルン大学の経営方針
- DDS というコンセプトを知ったこと
- オーストラリアの政策状況とメルボルン大学をはじめとした各国の対応は非常に参考になりました
- メルボルン大学の取り組みで、Teaching Special???を？？している点
- オーストラリアの高等教育政策の概観
- 質保証について（１日目）、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパとそれぞれ異なるアプローチについての紹介、
- オーストラリアでの最新の高等教育政策とそのインパクト予想、メルボルンモデル～昨年、オーストラリアのいくつかの大学を訪ねて聞いたこととあわせて
- オーストラリアの高等教育の文脈における大学の改革について、メルボルンモデルに基づく学士課程教育について

3. わかりにくいと思ったこと
- なぜオーストラリアを選択したのか
- メルボルンモデルは何回聞いても複雑です
- オーストラリアの高等教育制度を知らないとわからない単語が少しあった・・・
- 発表者の問題だと思います。図表もデータもなく、理解するのが難しかったです
- 日本とオーストラリアの大学制度の違いについて少し説明があればよかったと思います
- メルボルン大学の具体的なカリキュラム改革、政策動向よりも、具体的なカリキュラムや教授方法改革の話を聞きたかったし、聴衆のニーズもそこにあるのではないか？

4. セミナーに関しての意見・感想
- 水があったのは助かりました
- 予備の資料を余分に用意していただけると助かります
- 興味深かったが、かなり教育学専門的内容であり、他教職員にすすめるのは難しいと思った。
- 1)このようなセミナーを継続していただきたい。2)このような貴重な知識については出版物にして広く公開・普及していただきたい

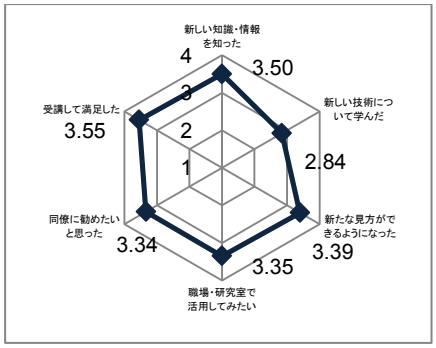
SDP―教育企画力とは何か？いかに身につけるか？（2012.2.29）

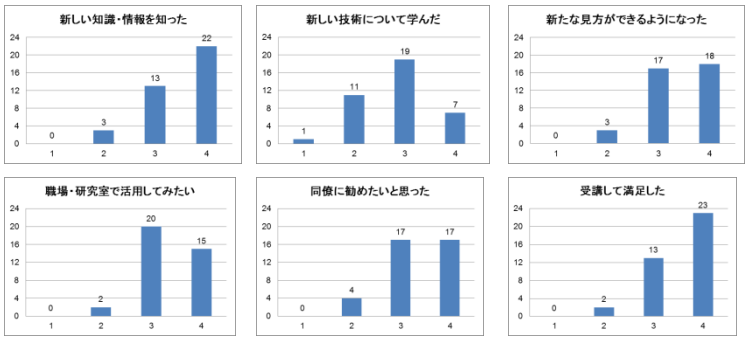
回答者属性(N=38)

【職階】教授(4)／准教授(4)／講師・助教(3)／職員(25)
その他(1)／無回答(1)

【性別】男性(24)／女性(11)／無回答(3)
【学校種】東北大学(5)／東北大学外(27)／短大(4)／無回答(2)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと
- 「教育企画力」という概念を具体性を持って語ること
- SD 研修への教員参加（又は FD 研修への教員参加）

・樋口さんの取り組み
・初期キャリア形成の大切さ
・「ジョブローテと業務の完遂性」の話
・様々な見方があることを再認識できたこと
・職員のアクティビティの高さの重要性
・「強かに回りを巻き込む」
・若手の勉強会　教員との連携　機会を生かす
・教員と事務職員が協力していくこと
・今後の業務内での企画運営について
・多くの話し合いでは組織
・職員だけでなく、教員も一緒にやっていくことが大切と思った
・大学教員として、職員の立場など多くのことを知ることができた
・「役に立つ」ということではないが、職員の方々から今回のテーマのような話を聞く機会が少ないので勉強になった。内容としては考えさせられるもの、反論もある。
・大学職員として何のために働く（行動する）のかについて、考えるきっかけになりました
・職員の意欲、アイディアを引き出し評価することの大切さを実感した
・職員の方々の教育に対する熱意をあらためて感じることができました。山形大の事例、東北大学附属図書館の事例は大変参考になりました。ディスカッションも大変役立つものでした
・最後のディスカッションがいろいろ話を聞けて、自分の仕事と比べながら考えることができて役に立った
・課題を発見するセンスという言葉が印象に残った。例えば疑問に感じたことを前例踏襲でそのまま進める前に考えて少し改善するだけでも少しずつ業務改善していけるのではないかと思った
・大学の風土に応じた企画実現方法をとる必要があること。　企画実現のために、少しでも夢を進める必要があること
・「いぶき」の取り組み　事務官が科研費を取るのはびっくりだ（山形大　樋口さん）
・大学の設置形態による事務職員の特性について考えさせられた。各大学の組織文化の違いも大きな要因のように思われる
・「志」でしょうか？（あえて言うなら）　パネル報告とも非常に興味深いものでした
・山形大学でプレイフルの職員の活動報告は大変に私立大学の職員へのメッセージとして有効であると感じた
・「教育企画力」について他大学の事例を知ることができた。　若手職員に伝達していきたい
・職員としての課題、あり方について新たな見方ができるようになった。これまで事務職員の教育企画力は各々個人に委ねられるものであると感じてきたが「大学」として「組織」としてどう向き合っていくかという視点に改めて気付けて良かったと思います
・図書館に所属していますが、日々「図書館で完結しない仕事」を意識しているものの、その具体的な手法が分からずにいました。図書館は専門性が高いゆえか、大学組織の中では「浮いた存在」になりがちですが、本日の皆様のお話を伺ってもっと大学全体の教育方針に自主的にかかわる姿勢（カリキュラムへの参画）や「図書館職員から大学職員としての視点の転換」が必要であることを改めて認識しました。明日からの業務にすぐに活かせる内容であったと思います

3. わかりにくいと思ったこと

・特になし
・わかりにくかった訳ではないが小規模私立大とは状況が多かったのがやや残念だった
・勤務先は小規模大学のため、今日の報告の事例がどの程度通用できるかが分からない。講師に小規模大学のスタッフがいればよかったと思う。（わかりにくい部分ではありませんが）
・わかりくいということはなかったが東北大図書館での発表での協力回答者の手法
・「委員会参加の満足度の調査」については外向けの発信力が弱いというか意義が分からなかった
・大学職員の人事異動は一律ではない。議論しにくいです
・「教育企画力」の対象が広い。具体的に定義するのが難しいように感じた
・「志」も継承できねば意味はない「志」に気付かせる場のあり方（＝共通的に）について議論していきたい
・「教職協働」の各大学具体的な展開事例（どうしてそこまでいけたのか）を知りたかった
・「教育」という言葉の汎用性から教学の本丸なのか自身の業務を通じた広義の教育なのか不透明であり、結果として「教育企画力」が何なのか良くわからなかった。「教育企画力」が市民権を得ていないとの言葉通りだった。どのような職員を養成するのか。これは学生の学士力のような基礎力を身に付けるプログラムなのかそれともマネジメントができる人を目指すのか。是非参加大学が行われている企画力 up（研修制度）について広く情報交換したい

4. セミナーに関しての意見・感想

・今後も多くの機会を設けていただければと思います
・動画配信などして欲しいです（遠隔地のため）
・今後もこうした企画を実施していただけましたら幸いです
・SDP について入試から入学多忙な時期は避けた方がよいのでは
・人事政策に話がより、教育企画力について深められなかったのが少し残念でした
・今日は「教育企画力がテーマでしたが、「入試、広報、学生募集」というも重要ではないのでしょうか？色々と刺激になりました。ありがとうございました
・SD って何？というところから入っていかなければならない学内ですが少しずつ回りを巻き込んで強かに仕掛けていきたいと感じました
・とても勉強になった。　自分が何をしたいのかを考えるきっかけとなった
・私は公立短大のプロパー職員１人目としてとして採用されました。なのでジョブローテーションから派生した話は大変興味深かったです
・講師の選び方がよかった（職員の世界でも良く講師になられる方がいらっしゃった）　これだと断言できるものは（人事に関して）ないと思う
・素晴らしい内容でした。この機会を知ることができ参加できて幸せでした。気になったのは場所が狭いことです。それこそ附属図書館の大会議室（２号館４F）をお使いになってはいかがでしょうか？70 名程度入ります
・参考にはなるが、全般的に仲間内の会合的なイメージ（時間的な制約）　シリーズものにしてもう少し長いタームで実施したら良いのではないのか
・セミナーの準備、関係、運営に携わった皆様に御礼申し上げるとともにわかりやすくお話しいただいた講師の皆様ありがとうございました
・今後、○○会との関わりが深くなる教育が必要となる。その面で職員が大きくかかわることの性が高い。大学クローズでの教育改革では大きな期待はできないのではないだろうか。
・教育企画力とは何か？報告書をディスカッションコメンテーターとのつながりとテーマが一貫性がなかったが話題性はあった

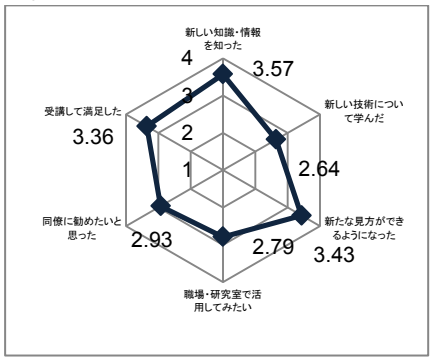
国際セミナー
次世代の大学院教育―日米両国における大学院教育改革―（2012.3.19）

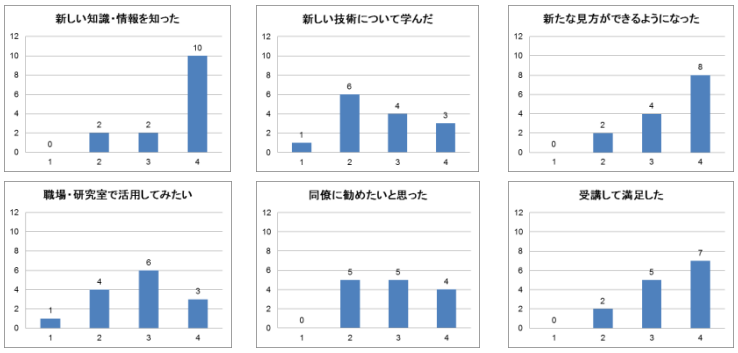
回答者属性(N=14)

【職階】博士課程学生(1)／教授(5)／准教授(3)／講師・助教(1)
管理職教員(1)／職員(2)

【性別】男性(16)／女性(1)／無回答(0)
【学校種】東北大学(6)／東北大学外(8)／無回答(0)

1. 参加した感想　（1. 当てはまらない～4. 当てはまる）





2. 特に役に立ちそうと思ったこと

・アメリカの大学院教育の実態と課題
・国際データ比較
・アメリカ大学院の現状が理解できたこと
・大学院システムの日米の比較について
・アメリカでも大学院改革の動きがあるということを聴くことができた
・アメリカ日本の現状を理解できたがもう少し理系文系の博士人材の教育について聞きたかった。小村先生の話は参考になった
・日米の大学院教育の類似点相違点が今後の自分の教育に役立つと感じた
・米国で CGS（全米大学院教育）が米国の理系の修士プログラムにおいて企業と連携した内容を採用するように指導している
・大学院改革について文科省がどのように考えているのか分かった。アメリカがどのように改革が実現したのかメソッドを知ることができた
・研究のチャンスを与えるということ機会を多く与え経験を積ませることはよい。しかしそれが Dr の学位につながるかどうか？

3. わかりにくいと思ったこと

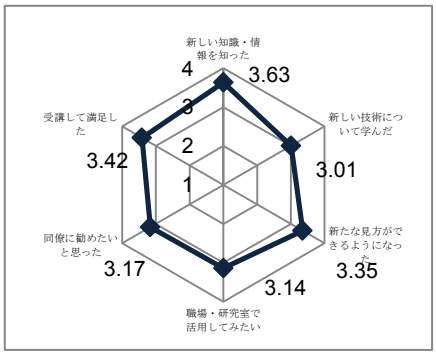
・博士課程を修了後の就職先とのつながり
・文科省の動向
・米国から何を学ぼうとするのか不明確（オーバードクターの問題か？ドクターの質保証の問題か？大学の質保証の問題か？）研究の質保証（トップ、リーディング）修士課程での Interdisciplin(マルチ、複合融合）教育・研究はうまくつながっているのか？
・大学という大きな枠ではなく個々の教員にかかる部分が博士教育には大きいと思うもっと末端の教員に何ができるかを説明してもらえれば良かった。「なんとなくドクター」や「先生の思惑ドクター」への対応も考えないと
・もう少し具体例(論文執筆 support system など）がほしかったが時間配分の関係でやむを得ないと思う

4. セミナーに関しての意見・感想

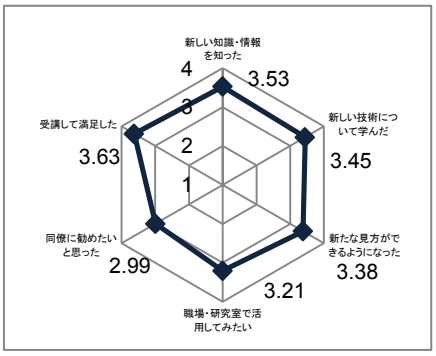
・日本語及び英語字幕があると良かったと思います
・小林先生の現状の（professional Master's Program,Continuous Doctoral Program)で教育された学生の出口つまり現在の需要の分析と将来予測についての議論　社会のニーズの分析と将来像（Ph.D の出口)政府、教育界、産業界を集めて議論（キャリア支援に関するシンポ)
・社会が大学に何を求めているのか？少しですがわかった気がしました。このようなセミナーを受講する他はマスコミの情報だけでした。東北大の教員に対してこのセミナーのレジェメを公開することはできますか？もし可能であれば広く発信していただきたいと思います。
・Hand out を日英両言語作成頂いたのはとても役に立ちました。但し翻訳結果を文字として表現する際は注意が必要ですね（もちろん制度が異なるので適切な和訳が難しいことは理解しています)

PD プログラム参加者アンケート　シリーズ別集計結果

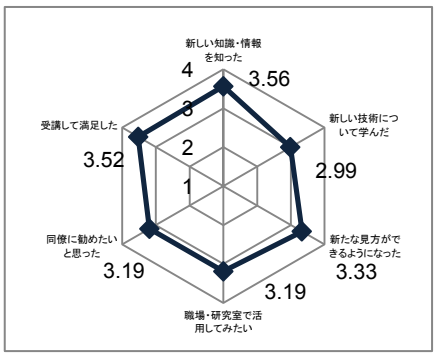
1. グローバル時代の大学教員像



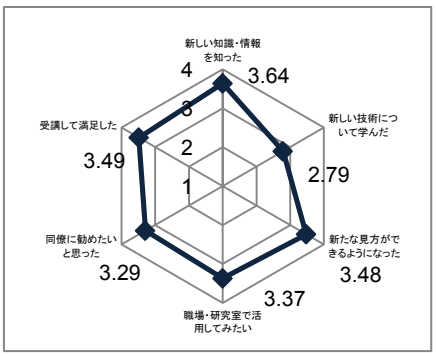
2. 大学の授業を追求する



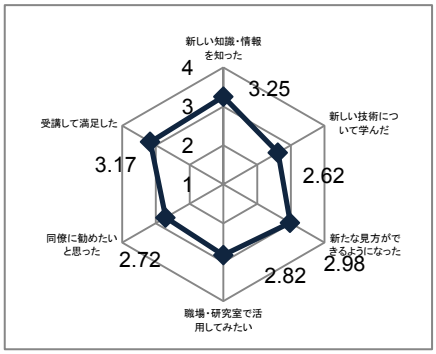
3. 学生を支援する



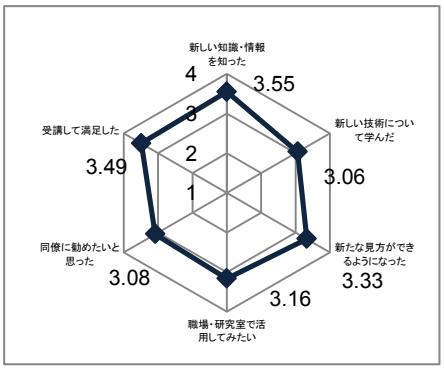
4. 大学のマネジメント



5. 大学のカリキュラム



全体



3-5. CPD 教員組織

2011 年 12 月 1 日付

役職	氏名	所属, 担当
大学教育支援センター長	◎羽田　貴史	高等教育開発推進センター（高等教育開発室）教授
同　副センター長 ・プログラム開発部門長	◎関根　勉	同（理科実験教育室）教授
同　調査研究部門長	◎杉本　和弘	同（高等教育開発室）准教授
同　プログラム開発部門長	◎羽田　貴史(兼務)	同（高等教育開発室）教授
同　プログラム実施部門長	◎鈴木　敏明	同（入試開発室）教授
高等教育開発推進センター副センター長	◎関内　隆	同（高等教育開発室）教授
同　　研究開発員	◎佐藤　万知	同（高等教育開発室）講師, 調査研究等
同　　研究開発員	◎立石　慎治	同（高等教育開発室）助教, 調査研究等
同　　研究開発員	◎今野　文子	同（高等教育開発室）助教, 調査研究等
同　　研究開発員	○葛生　政則	同（高等教育開発室）准教授, プログラム実施
同　　研究開発員	○串本　剛	同（高等教育開発室）講師, 調査研究
同　　研究開発員	○北原　良夫	同（語学教育室）准教授, 調査研究
同　　研究開発員	○橘　由加	同（語学教育室）准教授, プログラム開発・交渉
同　　研究開発員	ENSLEN Todd	同（語学教育室）講師, プログラム開発・実施
同　　研究開発員	SHEARON　Ben	同（語学教育室）講師, プログラム開発・実施
同　　研究開発員	藤本　敏彦	同（スポーツ科学教育室）准教授, プログラム開発・実施

同	研究開発員	芳賀　満	同（人文社会科学教育室）教授, プログラム開発・実施
同	研究開発員	木内　喜孝	同（保健管理室）教授, プログラム開発・実施
同	研究開発員	吉武　清實	同（学生相談室）教授, プログラム開発・実施
同	研究開発員	上原　聡	同（日本語研修室）教授, プログラム開発・実施
同	研究開発員	○千葉　政典	同（キャリア支援室）講師, HP 開発・プログラム開発・実施
同	研究開発員	○猪股　歳之	同（キャリア支援室）助教, 調査研究
同	研究開発員	佐藤　勢紀子	同（日本語研修室）教授, プログラム実施
同	研究開発員	中島　平	教育情報学研究部　准教授, プログラム開発・実施
同	研究開発員	三石　大	教育情報基盤センター　准教授, プログラム開発・実施
同	研究開発員	浜田　良樹	情報科学研究科　講師, プログラム開発・実施
同	研究開発員	邑本　俊亮	情報科学研究科　教授, プログラム開発・実施
同	共同開発員	藤村　正司	広島大学教授，大学教員調査
同	共同開発員	加藤　かおり	新潟大学准教授, イギリスの大学教員養成
同	共同開発員	土持　法一	帝京大学教授，ポートフォリオ開発
同	共同開発員	渡部　芳栄	福島大学特任准教授，管理職調査
同	共同開発員	丸山　和昭	福島大学特任准教授，大学教員調査

◎部門長・コア会議メンバー
○コア会議メンバー

3-6. CPD 教員の活動 （2010 年 4 月～2012 年 3 月の主な活動）

センター長・教授　羽田　貴史

〔研究業績〕

1. （編著）「はじめに」,『諸外国の大学教授職の資格制度に関する実態調査』（文部科学省委託調査報告書，研究代表者），264 頁，2011 年 6 月.
2. （編著）「まえがき」ほか 2 章,『アジア・太平洋地域における高等教育市場化政策の国際比較研究』（科学研究費補助金報告書，研究代表者），302 頁，2011 年 8 月.
3. （単著）「国立大学の法人化」『新通史　日本の科学技術』第 3 巻，原書房，2011 年 10 月.
4. （共著）「大学の変貌」（塚原修一と共著）『新通史　日本の科学技術』第 3 巻，原書房，2011 年 10 月.
5. （単著）”Current State and Challenges of Faculty Development in Japan.” *Conference on International Comparison of Teacher Quality Chinese Taipei Comparative Education Society*.『2011 教師素質之国際比較国際学術研討会　Conference on International Comparison of Teacher Quality』（中華民国比較教育学会），2011 年 11 月 26-27 日.
6. （単著）「大学団体の可能性と課題」『IDE 現代の高等教育』538 頁，2012 年 1 月.
7. 『大学における教育研究活動の評価に関する調査研究』（文部科学省平成 23 年度先導的大学改革推進委託事業研究成果報告書，研究代表者：北原和夫，第 1 グループ委員として参加），全 420 頁，2012 年 3 月.
8. 企画・執筆「はじめに」,『CAHE　TOHOKU　Report 39　東北大学の初修外国語教育』（東北大学高等教育開発推進センター），全 83 頁，2012 年 3 月.
9. 「高等教育の役割と課題―グローバリゼーション・人材育成・質保証」『クロスワード＜TMU FD レポート＞』第 11 号，首都大学東京 FD 委員会，2012 年 3 月.
10. 「私立学校への財政援助と設置形態の戦後史素描」,『私立高等教育研究叢書　学校法人の在り方を考える』，日本私立大学協会私学高等教育研究所，35-37 頁，2012 年 3 月.
11. 「学びの転換をめざす大学教育の課題」，近畿地区大学教育研究会『第 79 回研究協議会記録集』4-17 頁，2011 年 8 月.
12. 企画編集・執筆『PD ブックレット Vol.1　すてきな大学教員をめざすあなたに』，東北大学高等教育開発推進センター，2011 年 7 月.

〔学会活動〕

1. 大学教員の能力像と獲得要因」（猪股歳之，立石慎治，丸山和昭，藤村正司），日本教育社会学会第 63 回大会（お茶の水女子大学），2011 年 9 月 25 日.
2. 「教育史研究における大学史研究の位置」指定討論者，教育史学会第 55 回大会シンポジウム（京都大学），2011 年 10 月 3 日.
3. 分科会（植民地と教育）司会，教育史学会第 55 回大会（京都大学）2011 年 10 月 3 日.
4. 招待講演，中華民国比較教育学会，2011 年 11 月 26 日.

〔各種活動〕

1. PDP「震災後の学生支援と教職員支援のあり方 - 阪神・淡路大震災の教訓に学ぶ」司会，2011 年 4 月 19 日.

2. 佐賀大学高等教育開発センター「大学教員の能力開発の現状と課題」講演，2011 年 5 月 16 日.
3. 首都大学 FD/SD 宿泊セミナー「高等教育の役割と課題：グローバリゼーション・人材育成・質保証」講演，2011 年 5 月 26 日.
4. 平成 23 年度大学教育研究センター等協議会「学生生活支援としての保健管理センター」報告（一橋大学），2011 年 8 月 2 日.
5. 筑波大学大学研究センター「Rcus 大学マネジメントセミナー」講義，2011 年 8 月 9 日.
6. 国公私立 4 大学ネットワーク「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出」シンポジウム講演（同志社大学），2011 年 8 月 23 日.
7. 国際シンポジウム「大学教授資格～世界の動向～」司会，2011 年 9 月 16-17 日.
8. 東北地域大学教育推進連絡会議「大学教員調査の報告」（教授　関内隆・教授　羽田貴史・講師　串本剛・講師　佐藤万知）（福島大学），2011 年 9 月 28 日.
9. 東北大学高等教育開発推進センターPDP「大学教員の責務」にて「大学教員と学問的誠実性」講演，2011 年 10 月 7 日.
10. 法政大学第 9 回 FD シンポジウム「本当に必要な FD 活動とは－実質化のための支援・教員評価－」にて基調講演「大学教員の能力形成プロセスと FD の課題」，2011 年 10 月 8 日.
11. PDP「教育方法の創造 1―Instructional Design による授業設計」司会[2011.10.17]
12. 東北大学全学教育総合科目／PDP「ライフ・キャリアデザイン」にて「職業としての大学教員」講演・授業，2011 年 10 月 25 日.
13. PDP「学生支援　応用編 1―課外活動の現状と大学教職員の役割―」司会，2011 年 11 月 15 日.
14. 平成 23 年度 IDE 東北地区セミナー「東日本大震災と人材育成」司会，2011 年 11 月 18 日.
15. PDP「Global に Competitive な学生輩出のためにⅡ-大学は何をすべきか」にて報告，2011 年 11 月 21 日.
16. 第 13 回東北大学高等教育講演会／PDP「産学連携と大学のあり方～象牙の塔から社会のセンターへ～」司会，2011 年 12 月 16 日.
17. PDP 国際シンポジウム「植民地時代の文化と教育Ⅱ　朝鮮と台湾における植民地大学」司会，2011 年 12 月 17 日.
18. 小樽商科大学 FD 講演会にて「教育開発とＦＤの課題，　何が教員の能力開発に役立つか？」講演，2011 年 12 月 21 日.
19. 東京大学教育学研究科・大学経営・行政コースにて授業，2012 年 1 月 21 日.
20. PDP 国際シンポジウム「グローバル時代の大学マネジメントと質保証」司会，2012 年 1 月 24 日.
21. PDP「学生支援　基礎編 2―大学生への経済支援のあり方と課題―」司会，2012 年 1 月 30 日.
22. PDP「少子化時代の教育マネジメント 1-適合的入学者へのアプローチ-」司会，2012 年 2 月 16 日.
23. PDP「学生支援　基礎編 1―学びを支える大学の役割―」司会，2012 年 2 月 20 日.
24. Tohoku U. PFFP「諸外国の高等教育を知る～大学教育制度と役割について考える（日・米・豪の比較）」（東北大学）にて講演・司会，2012 年 2 月 22 日.
25. PDP「大学のマネジメント危機管理」司会，2012 年 3 月 2 日.
26. 東北大学学務審議会主催 第 6 回全学教育 FD 主催，オリエンテーション報告，司会，2012 年 3

月 6 日.

27. 国公私立 4 大学ネットワーク外部評価委員会出席（同志社大学東京キャンパス），2012 年 3 月 7 日.
28. 東北大学自然科学総合実験外部評価実施（東北大学教育情報・評価改善委員会），2012 年 3 月 13 日.
29. PDP 国際シンポジウム「次世代の大学院教育 - 日米両国における大学院教育改革 - 」司会，2012 年 3 月 19 日.
30. 熊本大学 大学教育機能開発総合研究センター「21 世紀型大学教育セミナー」にて「大学教育改革の要点―組織改革と能力開発をどのように統合するか―」講演，2012 年 3 月 26 日.

副センター長・教授　関根　勉

〔研究業績〕

1. （共著）「研究する　理系編」,『PD ブックレット Vol.1 すてきな大学教員をめざすあなたに』（東北大学高等教育開発推進センター），89-92 頁，2011 年 6 月.

〔各種活動〕

1. 東北大学高等教育開発推進センターにて「身近な放射線について」講演，2011 年 4 月 8 日.
2. 東北大学全学教育総合科目「ライフ・キャリアデザイン」にて「大学教員という職業 Part 2―自然科学に携わる大学教員の立場から―」講演・授業，2011 年 10 月 25 日.

プログラム実施部門長　教授　鈴木敏明

〔研究業績〕

1. （共著）「学生を理解する」,『PD ブックレット Vol.1 すてきな大学教員をめざすあなたに』（東北大学高等教育開発推進センター），49-62 頁，2011 年 6 月.

〔各種活動〕

1. PDP「他者理解：発達障害学生支援を学ぶ」司会，2011 年 11 月 25 日.

調査部門長・准教授　杉本和弘

〔研究業績〕

1. （単著）「豪州大学によるトランスナショナル・エデュケーションの展開と質保証」,『比較教育学研究』第 43 号，33-44 頁，2011 年 6 月.
2. （単著）「オーストラリアの大学教授資格」，文部科学省委託調査報告書『諸外国の大学教授職の資格制度に関する実態調査』（研究代表者：東北大学　羽田貴史），199-209 頁，2011 年 6 月.
3. （翻訳）サイモン・マージンソン著「高等教育の新展望」，科学研究費補助金研究成果報告書『アジア・太平洋地域における高等教育市場化政策の国際比較研究』（基盤研究（B）平成 20-22 年度，研究代表者：東北大学　羽田貴史），7-61 頁，2011 年 8 月.
4. （単著）「日豪のホスピタリティ分野における高等職業教育に関する予備的考察」，九州大学「高

等教育と学位・資格研究会」編『非大学型高等教育と学位・資格制度―国際ワークショップ報告―』ワーキングペーパーNo.1，143-149 頁，2011 年 12 月.

5. 「桜美林大学：不断の点検・評価こそが教育システムを変える」，リクルート編『カレッジマネジメント』No.172（特集　ユニバーサル化時代の大学評価），26-29 頁，2012 年 1 月.
6. 「早稲田大学：『たくましい知性』をもったリーダーの育成」、リクルート編『カレッジマネジメント』No.173（特集　リーダーを育てる）、12-15 頁，2012 年 2 月.
7. （単著）「豪州大学における教育マネジメントと IR―ヴィクトリア州・バララット大学の事例から―」，科学研究費補助金研究成果報告書『大学マネジメントにおける上級管理職と IR の機能的連携に関する研究』(基盤研究 (B) 平成 21～23 年度, 研究代表者：立命館大学　鳥居朋子)，63-73 頁，2012 年 3 月.

〔学会活動〕

1. 杉本和弘「豪州における学士課程教育改革の現状と日本への示唆」，日本高等教育学会第 14 回大会課題研究Ⅲ「教養・共通教育を通してみる学士課程教育の構築」（名城大学），2011 年 5 月 28 日.
2. 杉本和弘・大佐古紀雄・田中正弘・福留東土・高森智嗣・鳥居朋子・林隆之「高等教育における機関レベルの教育質保証システム―米・英・豪・欧州の動向から―」，日本高等教育学会第 14 回大会（名城大学），2011 年 5 月 29 日.

〔各種活動〕

1. 平成 21 年度戦略 GP「多面的な国際交流の充実と高等教育の質向上に向けた国際連携プログラム開発」（大学コンソーシアム京都）において「変わりゆく大学評価と FD―メルボルン大学の取組み事例を通して―」講演，2011 年 7 月 19 日.
2. 大学教育マネジメント人材育成プログラム「キックオフ・ワークショップ：教育マネジメントの視点を発展させる」において趣旨説明，2011 年 9 月 2 日.
3. 東北大学国際シンポジウム「大学教授資格～世界の動向～」において「オーストラリアの大学教授資格」講演，2011 年 9 月 16 日.
4. 労働政策研究・研修機構就職研究会において「豪州の高等教育と職業」について報告，2011 年 10 月 24 日.
5. 東北大学高等教育開発推進センター国際セミナー／PDP　‘Trends in Quality Assurance in the European Higher Education Area (1999-2011)’司会・通訳，2011 年 10 月 28 日.
6. 立命館大学 大学行政研究・研修センターの「大学行政論Ⅱ」において「オーストラリアの高等教育政策―歴史的展開と現在の課題―」と題して授業，2012 年 1 月 13 日.
7. 平成 21 年度戦略 GP「多面的な国際交流の充実と高等教育の質向上に向けた国際連携プログラム開発」の国際シンポジウム 2011「IR と教育改善～オーストラリアの事例から学ぶ～」(大谷大学) で「背景説明・オーストラリアの高等教育」講演，2012 年 1 月 21 日.
8. PDP 国際シンポジウム「グローバル時代の大学マネジメントと質保証（International Symposium: University Management and Quality Assurance in the Global Era)」において趣旨説明・ディスカッション司会，2012 年 1 月 24 日.
9. PFFP「諸外国の高等教育を知る～大学教育制度と役割について考える（日・米・豪の比較)」(東北大学) において「オーストラリアの大学教育と質保証―メルボルン大学を事例に―」講演，2012

年 2 月 22 日.

10. PDP 大学職員能力開発プログラム「教育企画力とは何か？いかに身につけるか？」（東北大学）において趣旨説明・ディスカッション司会，2012.2.29.
11. メルボルン大学高等教育研究センター（CSHE）において‘A Comparison of Quality Assurance Policies between Japanese and Australian Higher Education’講演，2012 年 3 月 8 日.
12. 平成 23 年度第 2 回東北大学附属図書館職員総合研修会「教育学習支援における大学図書館の役割を再考する」コメンテータ，2012 年 3 月 13 日.
13. 日本インターンシップ学会九州支部・日本キャリア教育学会合同研究会「インターンシップ、海外動向についての研究報告」において「豪州における高等教育政策と産学連携教育」を報告，2012 年 3 月 16 日.
14. 高等教育国際セミナー「実社会と対話する大学教育―インターンシップから職業統合学習へ―」のパネルディスカッション「インターンシップの充実に向けて英独豪米日の実践と政策に学ぶ」において「豪州高等教育における学習と職業の連携（Linkage between learning and work in Australian higher education）」を報告，2012 年 3 月 17 日.
15. 第 2 回日独学長会議（於・京都大学）のセッションⅥ「World University Ranking, University Rankings and Quality Assurance of Higher Education in German and Japan」において‘Growing interest in internal quality assurance in Japanese Universities: New challenges of Tohoku University’を報告，2012 年 3 月 30 日.

研究開発員・講師　佐藤万知

〔担当〕

（調査研究部門）

1. PFFP に関する国内外調査　メンバー
2. 新任教員研修に関する調査　メンバー

（プログラム開発・実施部門）

1. 2010 年度 大学教員準備プログラム（PFFP）担当
2. 2010 年度 PDP（英語で授業を）担当
3. 2011 年度 大学教員準備プログラム（PFFP）担当
4. 2011 年度 PDP（大学の国際化シリーズ）担当
5. 2011 年度 新任教員向けプログラム（NFP）開発メンバー

〔研究業績〕

1. （共著）”Academic Inbreeding: exploring its characteristics and rationale in Japanese universities using a qualitative perspective”，Asia Pacific Education Review, Vol.12, 35-44 頁.
2. （共編）「PD ブックレット Vol.1 すてきな大学教員をめざすあなたに」（東北大学高等教育開発推進センター，2011 年 6 月.

〔各種活動〕

（講演・発表）

1. ランチタイム FD にて「海外の大学教員養成プログラム参加報告（カリフォルニア大学バークレ

一校／メルボルン大学)」発表，2011 年 5 月 26 日.

2. 日本高等教育開発協会第 1 回高等教育開発フォーラムにて「他大学の高等教育開発担当者の支援方法について」発表，2011 年 8 月 31 日.
3. 第 18 回大学教育研究フォーラムにてラウンドテーブル「FD プログラムにおける提供者と参加者の「ずれ」を考察する」を企画・発表（立石慎治・今野文子・田中岳)，2012 年 3 月 16 日.

（プログラム運営）

1. 2010 年度大学教員準備プログラム（PFFP)「バークレー事前研修」運営，2010 年 12 月 27 日.
2. 東北大学高等教育開発推進センターPDP「院生・新任教員向けセミナー」司会, 2011 年 1 月 29-30 日.
3. PDP「英語で授業を（院生編)」司会，2011 年 2 月 19 日.
4. PDP「英語で授業を（上級編)」司会，2011 年 7 月 15-17 日.
5. PDP「大学の国際化 - 快適・安心なキャンパスを考える - 」司会，2011 年 9 月 9 日.
6. PDP「英語で授業を（初級編）院生対象」司会，2011 年 12 月 3 日.
7. PDP「海外で学び，研究する」司会，2011 年 12 月 8 日.
8. PDP「英語で授業を（初級編）教員対象」司会，2011 年 12 月 15 日.
9. ランチタイム FD 第 2 弾「授業を見る・聞く・学ぶ」，2011 年 12 月 22 日.

（調査研究・プログラム開発にかかる出張）

1. アメリカ出張（コロラド大学ボルダー校，Council of Graduate Schools，カリフォルニア大学バークレー校)，2010 年 12 月 5-16 日.
2. アメリカ出張（カリフォルニア大学バークレー校)，2011 年 1 月 12-17 日.
3. オーストラリア出張（メルボルン大学，モナッシュ大学，La Trobe 大学，シドニー大学)，2011 年 2 月 26 日-3 月 9 日.
4. 名古屋大学 Catherine Manathunga 訪問，2011 年 3 月 10 日.
5. 日本教育大学院大学　吉良直先生訪問，2011 年 6 月 22 日.
6. イギリス出張（オックスフォード大学，Higher Education Academy，Staff and Educational Development Association，Roehampton University，Mick Healey 教授)，2012 年 2 月 5-13 日.
7. 北海道大学 PFF セミナー参加，2011 年 7 月 26-31 日.
8. JFDN Jr 若手 FD 担当者ネットワーク合宿参加，2011 年 9 月 4-5 日.

（その他）

1. 国際教育院グローバル 30 教員懇親会参加，2011 年 5 月 16 日.
2. 東北地域大学教育推進連絡会議（福島大学）に参加し，大学教員調査の報告（関内隆・羽田貴史・串本剛・佐藤万知)，2011 年 9 月 28 日.
3. 日本留学フェア（ロンドン)，2011 年 11 月 23-30 日.

研究開発員・助教　立石慎治

〔担当〕

（調査研究部門）

1. 大学・短大教員のキャリア形成と能力開発に関する調査 メンバー・事務局員
2. 東北大学の初修外国語学習に関する基礎調査 メンバー
3. 教育・学習マネジメントに関する研究 メンバー
4. 教育・学習過程研究 メンバー
5. 大学教育における震災ボランティア支援のあり方およびその教育効果に関する調査研究メンバー

（プログラム開発・プログラム実施部門）

1. 2010 年度 職員開発プログラム（SDP） 担当
2. 2011 年度 大学教育マネジメント人材育成プログラム（EMLP） 担当
3. 2011 年度 職員開発プログラム（SDP） 担当

〔研究業績〕

1. （単著）『編入学による高等教育機関間の学生の移動—進学選択，適応，成果—』（博士論文，広島大学大学院），2011 年 3 月.
2. （共著）「20 章　国立大学が中等後教育段階のアーティキュレーションにおいて果たす役割」（小方直幸と共著）〔既出論文再録〕『21 世紀知識基盤社会における大学・大学院改革の具体的方策に関する研究』戦略的研究プロジェクトシリーズ第 3 号，209-220 頁，2011 年 4 月.
3. （単著）「初修外国語調査の目的と結果の概要」東北大学高等教育開発推進センター編『東北大学における初修外国語』CAHE TOHOKU Report 39，1-18 頁，2012 年 3 月.
4. （単著）「授業外要因と学習成果の関連—東北大学における初修外国語を事例に」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第 7 号，2012 年 3 月.

〔学会活動〕

1. 羽田貴史，猪股歳之，立石慎治，丸山和昭，藤村正司「大学教員の能力像と獲得要因」，日本教育社会学会第 63 回大会（お茶の水女子大学），2011 年 9 月 25 日.

〔各種活動〕

（講演・発表）

1. 第 10 回『ランチタイム FD』（東北大学高等教育開発推進センター）にて「東北大生は初修外国語とどう向き合っているか？—基礎調査の概要報告」報告，2011 年 6 月 9 日.
2. シンポジウム『東北大学における初修外国語教育』（東北大学）にて「初修外国語調査の目的と結果の概要」報告，2011 年 10 月 13 日.
3. Q-conference2011（九州大学）にて「東北大学 大学教育マネジメント人材育成プログラム」ポスター報告，2012 年 2 月 18 日.
4. 第 18 回大学教育研究フォーラムにてラウンドテーブル「FD プログラムにおける提供者と参加者の「ずれ」を考察する」を企画・発表（佐藤万知・今野文子・田中岳），2012 年 3 月 16 日.

（プログラム運営）

1. 「明日の大学を担う職員をどう育てるか？~大学職員の能力開発に関するシンポジウム~」運営，2010 年 12 月 17 日.

2. 『大学教育マネジメント人材育成プログラム』「Step1: キックオフ・ワークショップ」司会，2011年9月2日.
3. 『大学教育マネジメント人材育成プログラム』「Step2: クィーンズ大学集中コース」コーディネーター，2011年9月2日.
4. 『大学教育マネジメント人材育成プログラム』「Step3: コンサルテーション・ワークショップ」司会，2012年1月7-9日.
5. PDP「学生の心をつかみ，授業を楽しむ方法」世話人・司会，2012年1月20日.
6. PDP「ものづくり実践型問題解決学習の設計と進め方」世話人・司会，2012年1月27日.

（調査研究・プログラム開発にかかる出張）

1. Dalhousie University, Higher Education Quality Council of Ontario, Queen's University, University of British Columbia 訪問（EMLP開発のための出張），2011年2月28日-3月6日.
2. 立命館大学大学行政研究・研修センター訪問（EMLP開発のための出張），2011年5月12-14日.
3. Queen's University 訪問（EMLP開発のための出張），2011年5月21-27日.
4. 九州大学教育企画支援室『第1回ODプロジェクト』「【Step1】コンフリクトを知り尽くす！？―事例を手がかりにゲストとの対話を通して課題を認識する場―」，「【Step2】コンフリクトを語り尽くす！？―互いの経験を語り合い課題を深めていく場―」（九州大学）に参加（EMLP開発のための調査出張），2011年7月22-23日.
5. 九州大学教育企画支援室『第1回ODプロジェクト』「コンフリクトを味わい尽くす！？―表現した"問いかけ"に向き合い、相互に評価し合う場―」（九州大学）に参加（EMLP開発のための調査出張），2011年9月9日.
6. 同志社大学高等教育・学生研究センター訪問（EMLP開発のための出張），2011年11月22-23日.
7. 日本私立学校振興・共済事業団『第2回私学リーダーズセミナー』（仙台ガーデンパレス）参加（EMLP開発のための調査），2011年12月7日.
8. Leadership Foundation for Higher Education ならびに Kingston University を調査訪問（教育・学習マネジメント研究のための調査出張），2012年2月11-17日.
9. 講演会「英国高等教育統計機関(HESA)－高等教育のステークホルダーへ向けて、どのようなデータを、いかに、なぜ提供するのかー」(大学評価・学位授与機構)に出席（教育・学習マネジメント研究のための調査出張），2012年2月27日.

（その他）

1. 学生ボランティア研究会編『「大学教育における震災ボランティア支援のあり方およびその教育効果に関する調査研究」中間報告書』分担執筆，18-22頁.

研究開発員・助教　今野文子

〔担当〕

（調査研究部門）

大学教員の授業準備に関する調査　メンバー

（プログラム開発・実施部門）

1. 2011 年度　大学教員準備プログラム（PFFP）担当
2. 2011 年度　PDP 動画コンテンツ化担当
3. 2011 年度　職員開発プログラム（SDP）　担当

〔研究業績〕

1. （共著）「授業改善・高度化のための授業リフレクションと情報技術活用」（三石大と共著）『システム／制御／情報（システム制御情報学会誌）』，55（10），439-445 頁，2011 年.
2. （共著）「第 6 章 情報技術の活用により教師の授業力を育む新しい授業リフレクション」（三石大と共著）東北大学大学院教育情報学研究部編『高度情報化時代の「学び」と教育』，105-126 頁，2011 年.
3. （共著）「第二外国語としての中国語学習のためのブレンデットラーニングの開発と実践」（趙秀敏らと共著）『教育システム情報学会誌』29（1），49-61 頁，2011 年.
4. （編集）PD ブックレット Vol.2「大学の授業を運営するために」（東北大学高等教育開発推進センター），2012 年 3 月.

〔各種活動〕

（講演・発表）

5. 第 18 回大学教育研究フォーラムにてラウンドテーブル「FD プログラムにおける提供者と参加者の「ずれ」を考察する」を企画・発表（佐藤万知・立石慎治・田中岳），2012 年 3 年 16 日.

（プログラム運営）

1. 東北大学高等教育開発推進センターPD セミナー「大学の授業 基礎編①―クリッカーを使った双方向授業の進め方―」世話人・司会，2011 年 11 月 7 日.
2. 東北大学高等教育開発推進センター 大学職員能力開発プログラム（SDP）「教育企画力とは何か？いかに身につけるか？」全体進行，2012 年 2 月 29 日.

（調査研究・プログラム開発にかかる出張）

1. 立命館大学 FD ワークショップ参加，2011 年 9 月 18-21 日.
2. 大阪大学 FD ワークショップ参加，2011 年 9 月 25-30 日.

（その他）

1. 宮城県大崎市立鹿島台中学校，学年 PTA 行事「進路講演会」講師，2011 年 11 月 17 日.

教育関係共同利用拠点
「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」

2011年度 教育関係共同利用拠点事業報告書
Joint Educational Development Center Project Report 2011

2012年11月30日 発行

編　者
発行所　東北大学高等教育開発推進センター

Center for the Advancement of Higher Education,
Tohoku University
〒980-8576　仙台市青葉区川内 41
TEL：（022）795-4471
E-mail：cpd_office@he.tohoku.ac.jp

印刷所　北日本印刷株式会社
〒984-0064　仙台市若林区石垣町 35 番 6